

# I. 「ステップファミリー調査」の経緯と目的

## 1. 「現代社会における技術と人間」プロジェクトとCMC研究

この報告書は、明治学院大学・社会学部附属研究所の特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」<sup>1</sup>（2000-2002年度の3年計画）の一環として、「ソーシャル・サポートにおけるCMC(computer-mediated communication)」研究グループの調査研究(2000-2001年度分)の一部、すなわち「ステップファミリー調査」の中間成果報告を目的としている<sup>2</sup>。現代社会における「技術」という大きなテーマを扱うプロジェクトの枠組の中で、私たちの研究班は、おもにコンピュータを媒介とした電子メール、メーリングリスト、ウェブサイト(ホームページ)、電子掲示板などによる「コミュニケーション技術」を研究対象に定めている。インターネットという新しいメディアの普及が私たちの社会生活をどのように変え、何をもたらすのか、という問いが私たちの研究の出発点にあった。

20世紀末から21世紀初頭にかけて、日本においてもインターネットの普及率が急激な伸びを示した。2000年末時点の日本における普及率は37.1%で世界14位であり、インターネット利用者数は4,708万人(対前年比74%増加)と推計されている(総務省, 2001)。これらのうちパソコンによるインターネット利用者数は3,723万人であり、インターネット利用者の約8割を占めている。パソコンという機器とインターネットという情報技術は、私たちの日常生活の中に、静かに速やかに浸透してきている、あるいは「〇〇革命」というものものしい旗印とともに圧力をともなって侵入してきているように見える。いずれにしても、つい数年前まではごく少数の人々の間でのみ使われていたコミュニケーション技術が、今や多数の人々にとって日常的な道具のひとつとなりつつある。

この新しい情報メディアは、果たして私たちの生活をどのように変えようとしているのだろうか。これは、様々な分野の専門家ばかりでなく、一般の(潜在的)利用者の多くが抱く疑問でもあろう。インターネット利用者が少数派から多数派に転換するこの時期、つまり臨界量を超えるか超えないかの転換点に、その社会的インパクトを問う実証的な研究をすることには独自の意義があると考えられる。

インターネットが大きな社会的関心を集めている理由は、それが人々にバラ色の未来を夢想させると同時に、重苦しい不安を投げかけるからでもある。インターネットに絡むIT関連産業は、多くの社会において経済の先進的な部門をなし、社会の仕組みを変え経済を活性化させる際の推進役として社会政策の重要なターゲットと見なされている(例えば、日本を含むアジアの状況について会津, 2001を参照)。さらに、未知の相手からごく親しい相手まで、空間的距離に関わりなくアクセスが容易になることは、様々なニーズをもつ個人に大きな社会的力をもたらすのではないかと期待が膨む。とくに(不特定)多数の相手への簡便で高速な情報発信(あるいは情報公開)は、直接の対面あるいは電話・手紙による既存の方法では不可能なことであった。これによって、これまでつながり得なかった人同士が共通の関心や利害を基盤にして関係をつくり、有益な情報や情緒的なサポート(励

ましや安心など)を交換することが可能になる。しかし、そこには影の部分もある。インターネットのウェブサイトは、未知の相手との出会いを容易にしてくれるがゆえにリスクをとまなうという点である。例えば、出会い系サイトを通じて知り合った相手が、あるいは未知の相手から送られてくるメールが、犯罪被害の入り口となるケースが報じられることで人々の不安が増幅される。

インターネットをめぐる社会的な反応には、このように明るい未来社会と不安な未知の世界という二つのイメージに両極分解する傾向があり、同時にインターネット上の「ヴァーチャルな」コミュニティとその外にある「現実の」コミュニティを相互に分離した異質な世界と見なす傾向がある (Wellman & Gulia, 1999)。しかしそれは、私たちの社会がまだ十分な経験を積んでいないために、インターネット上での出会いやコミュニケーション作法についての共有知識が足りないことを反映しているにすぎないのかもしれない。逆にいえば、時代の先端に位置する同時代人たちがインターネット上で出会い、インターネットを使って信頼関係を育む過程を追いかけるのに、今ほど好都合な時はないのかもしれない。馴染みのない道具を使った試行錯誤から生み出される社会的変化の先端も、急激に当たり前の風景と化す現実の中で見えにくくなってしまっているからである。

インターネットを介した人間関係のネットワークは、どのような強みを持ち、また限界を持つのか。言い換えれば、インターネット上でのサポート交換がそれ以外のサポートの交換とどう違うのか。どのような場合に前者は独自の強みを発揮するのか (Wellman & Gulia, 1999)。時代の先端的な変化を映し出す具体的な事例や現象の分析の中から、そうした一連の問いへのヒントを見つけ出すというのが私たちの共通した研究目標であった (宮田・野沢, 2002 および野沢, 2002 を参照)。

## 2. ステップファミリー — 潜在する家族 —

しかし、そうした先端事例探しの作業は容易ではなかった。いくつかの試行錯誤ののちに私たちが注目したのが、「ステップファミリー」経験をもつ人たちが形成するネットワークであり、そこで交換されるソーシャル・サポートであった。なぜステップファミリーなのか。

そもそも英語のステップファミリー (stepfamily) という語は、夫妻のいずれか一方または双方が、以前のパートナーとの間の子どもを連れて再婚した場合に生じる家族、すなわち結婚によって継親子関係を含む家族を指している<sup>3</sup>。しかし日本においては、そのような形態の家族を一括して指し示す日本語の用語は存在せず、「ステップファミリー」というカタカナ言葉もまだ市民権を獲得するほど十分に一般化したとは言えない状況にある。この事実が象徴的に示しているように、継親子関係を含む家族は、(以前から存在していたはずだが) 取り立てて注目を集めることもなく、社会的に見えない (見えにくい) 存在でありつづけてきた<sup>4</sup>。

ステップファミリーが社会に潜在していた理由のひとつには、形態的には標準的な（初婚・血縁）家族と区別されにくい点を指摘できる。その外見からは特別な援助ニーズをもった家族であるとみなされることもなく、公的な支援政策の対象とされることもなかった。また、正確な数を把握することも困難であり、学術的な調査研究の対象にもなりにくかった。したがって、ステップファミリーに独自の家族経験がどのようなものか、という知識やイメージが社会に共有される機会も失われていた。もうひとつの理由は、数的な稀少さにある。少なくともこれまでの日本社会においてはまれな家族形態であり、社会的マイノリティであったために目立たなかった。つまり、日本のステップファミリー経験者は、同じような経験をもつ人と出会うことがほとんどなく、比較的孤立した少数者でありつづけてきたと言えるだろう。

この点、アメリカ合衆国の経験は対照的である。米国では、離婚と再婚の増加した 1970 年代以降、ステップファミリーの存在が社会的に顕在化した。1988-1990 年の米国センサス・データによれば、初婚のうちの 52～62%が離婚に終わる。また、すべての結婚の 43%が夫妻のどちらかまたは両方にとって再婚であり、そのうち 65%が前の結婚での子どもが関わる再婚であり、ステップファミリーとなった。同じデータからの推計では、米国人の 3 人に 1 人は、継親・継子・継きょうだいなど、何らかのかたちでステップファミリーのメンバーであり、米国人の半数以上が人生のどこかの段階でステップファミリー的家族状況を少なくとも 1 度は経験すると推計されている（Larson, 1992）。このような状況に対応するかのようになり、1977 年には全国的な支援組織である全米ステップファミリー協会（Stepfamily Association of America = SAA<sup>5</sup>）が発足し、現在まで当事者および多様な専門家を対象とした活発な活動を展開している。また、こうした社会変化にともなって、ステップファミリーの研究も増加している。とりわけ 1980 年代以降、近年に至るほど研究数が飛躍的に増大し、社会全体および研究者の関心が拡大していることを反映している（Coleman, Ganong & Fine, 2000; Hetherington & Stanley-Hagan, 2000; Ihinger-Tallman & Pasley, 1997 などを参照）。このように、ステップファミリーが多くの人を経験する家族形態となり、社会的にも見える存在になってきている米国の状況に比較すると、現在の日本のステップファミリーが依然として「見えない存在」であることがはっきりする。

しかしながら、日本社会の状況も変化しつつある。すでに述べたような理由から、ステップファミリー（経験者）の正確な数はわからない。が、例えば厚生労働省の『人口動態統計』からは、ステップファミリーが増加していると推測できる。日本における離婚件数と離婚率は 1960 年代以降ほぼ一貫して増加しており、1999 年の離婚件数は 25 万件を突破し（1960 年と比較すると 3.6 倍）、離婚率（人口千対）は 2.00 に達している（1960 年の 2.7 倍）。1999 年の全離婚件数のうち、20 歳未満の未婚子のいる夫婦の離婚が約 60%を占めている。さらに再婚も増加している。1960 年代には年間約 11 万件弱だった再婚（夫妻の少なくとも一方が再婚）の件数は、1999 年には 15 万 4000 件を越えている。1960 年代には、再婚は婚姻総数の約 1 割であったが、その比率は 70 年代以降漸増し、1999 年には 2 割を

越えた（20.3%）。つまり、現在では、新たに結婚するカップルの5組に1組が再婚カップルということになる（厚生労働省大臣官房統計情報部, 2001）。再婚のうちのどれくらいがステップファミリーとなる結婚なのかは不明である<sup>6</sup>。しかし、こうした状況証拠を総合すると、次第に多くの人々がステップファミリーという家族形態を経験するようになったと推測できる。しかも、現在の傾向からすると、今後もその数は増加することが予測される。ステップファミリーを経験することは、アメリカ社会ほどではないにせよ、日本においてもそれほど珍しい出来事ではなくなってきた<sup>7</sup>。

### 3. ステップファミリーとCMC研究の出会い — 顕在化するネットワーク —

日本のステップファミリーは、次第に社会的に見える存在になりつつある。しかし、それは単にその数が増加してきたためというわけではない。それが、インターネット利用者の拡大・一般化という社会現象と軌を一にして進んだことがもうひとつの要因であると考えられる。それまで、相互に孤立し、社会の中に潜在していたステップファミリー経験者、とくに（継）親の立場にある人たちが、インターネットを通じて出会い、つながり始めたことが大きな変化をもたらした。自らのステップファミリー経験を個人ホームページに公開する人たちが現れ、似たような経験をもつ人たちがインターネット上を検索してそこへアクセスしてくるようになる。それをきっかけにして掲示板への書き込みとそれへの応答が始まり、あるいは個人間の電子メールの交換が始まる。そこから小集団が形成され、場合によってはそれが拡大し、より公的な組織へと発展する。そのようなかたちで、ステップファミリー経験者同士のネットワークは増殖し、社会のなかで可視的な存在となりつつある。

「SAJ（ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン）」は、そのようにして形成された組織の代表例である。簡単にその形成過程を振り返ってみよう（SAJの組織・活動の詳細については本書X章を参照）。再婚し継母としてステップファミリーの生活を始めて間もない春名ひろこさんは、2000年7月、使い始めたばかりのパソコンでインターネット上を検索し、SAA（上述の全米ステップファミリー協会）のウェブサイトを見つける。それを手がかりにして9月には、米国・コロラド州での継母たちのセミナーに単身で参加することになる。そして、そこでの体験が彼女に大きな目標（使命？）を与えたようである。帰国した彼女は、インターネット検索と電子メールを駆使して、情報を集め、様々な人と出会い、その年末には「Stepfamily Web」<sup>8</sup>という名のサイトを立ち上げている。そのサイトには、ステップファミリーの当事者が意見・情報を交換するためのBBS（公開された掲示板）が開設されている<sup>9</sup>。そこはステップファミリー経験者の出会いの場となり、現在まで貴重な情報やアドバイスの交換の場となりつつあるように見える。さらに、SAAの創設者であるヴィッシャー夫妻が当事者向けに書いた著作の翻訳書（Visher & Visher, 1991=2001）を春名さんが監修し、2001年7月に出版した。そして、2001年の夏には春名さんを代表とするSAJが正式発足し、9月からは会員募集も開始した。11月には、

SAA 現会長のマージョリー・エンゲルさんを招聘して、東京と兵庫（尼崎市）で（当事者向けおよび専門家向けの）講演会を開催した<sup>10</sup>。その後、2002 年に入ると、関東と関西で「LEAVES」と呼ばれる直接対面型のセルフヘルプ活動を展開している。

このように経緯をたどってみると、ステップファミリーの当事者同士が結びつき、社会的に見える存在へと変化する過程で、インターネットという新しいメディアの普及とその利用が重要な促進要因となっていることがわかる<sup>11</sup>。さらに、私たちの研究班がステップファミリーを研究テーマにするに至った経緯自体が、「インターネットが社会に何をもたらすのか」という問題を考察するうえで象徴的なエピソードになっている。この研究は、私たち研究班が適切な研究事例を模索しているちょうどその時期に、研究メンバーのひとりである野沢にメールが届いたことが発端となっている。現在 SAJ 代表の春名さんが、米国コロラドでのセミナーに参加した翌月（2000 年 10 月）に、SAA のような専門家が参加したステップファミリーの支援組織が日本にも必要であると考え、インターネット上の情報検索を頼りに何人かのまったく未知の研究者宛に送ったメールのひとつがそれであった。それをきっかけにして始まったメールの交換や直接のインタビューを通じて、SAJ 発足に向けての動向を知るにつれて、この研究プロジェクトにとってステップファミリー経験者のサポート・ネットワーク形成（とインターネット利用）という現在進行形の出来事がきわめて興味深い先端的な事例であることを私たちは確信するようになった。

#### 4. この調査の焦点

このようにして、SAJ の組織化過程と並行して具体化してきたこの調査研究は、SAJ の協力を得て、2001 年 10 月から実施している調査票（質問紙）による調査（2002 年 5 月末日終了予定）を中心として進められてきた。本報告書は、回収票のうち 2002 年 2 月 22 日までにデータ入力を完了したケースに関しての分析結果を中間的に報告することを主要な目的としている（この調査票調査とそれ以外の調査の方法の詳細については II 章参照）。この調査票調査と補足的に行ってきたインタビュー調査（ヒアリング）の焦点はおもに次の 3 点である。

##### (1) ステップファミリーの独自性と多様性

すでに述べたように、日本では「見えない存在」であったステップファミリーを対象とした研究の蓄積はほとんどないのが現状である。これまで知りえた限りでは、早野（1997）が日本における継親子の法的関係に着目した研究を進めており、また社会学の領域でも、日本家族社会学会の全国調査（NFR98）データを使った分析（西村，2001；稲葉，2002）などの研究例が出始めている。しかし、日本のステップファミリーの実態にかかわる基礎的な情報・知識の絶対量が不足している。

米国におけるこれまでの研究や SAA などの実践から明らかになってきたのは、ステップファミリーは（と言っても実はそこには多様な状況の家族が包含されているのだが）、他の

家族と共通の問題だけでなく、ステップファミリー独自の課題（困難）に遭遇するという  
こと、したがってステップファミリーは独自のサポート・ニーズを持っているということ  
である。再婚家族が「不完全な制度」だということをいち早く指摘した A.チャーリンの論  
文（Cherlin, 1978）は、「再婚およびステップファミリーには固有の困難さがあるという点  
に研究者の眼を向けさせる触媒となった」（Ihinger-Tallman & Pasley, 1997: 19）と言われる。  
チャーリンによれば、その固有の困難さは、社会の諸制度（法律、言語、教育など）が初  
婚家族を前提としてできあがっており、継親子関係など再婚によって生じる家族関係のあ  
り方が明確に制度化されていない点にある。例えば、再婚によって生じる家族・親族関係  
には、相手との関係を示す一般的な呼称が存在せず、つきあい方に関する規範やモデルも  
存在しないことが多い。そのために、家族生活上の困難（戸惑いや不安）が増幅されやす  
い（Cherlin, 1978）。ステップファミリーがかなり一般化した最近の米国でも、ステップフ  
ァミリーはいまだに「不完全な制度」の状態に置かれたままであるとの指摘もある（Ganong  
& Coleman, 1997）。

しかし現状を見ると、日本においてこそ、ステップファミリーは「不完全な制度」の状  
態に置かれていると言えるだろう。私たちは、日本のステップファミリーがどれほど多様  
な経験をし、またそこにどれくらい共通性を見いだせるのかについてほとんど知らない。  
多くのステップファミリーが直面すると予測される「当たり前」の出来事が何なのか、ど  
のような支援が必要であり有効なのか、社会に共有されている知識は乏しい。今回の調査  
は、次章で述べるように方法論的に大きな限界を負っているが、日本のステップファミリ  
ーに関する基礎的な知見を得るための端緒となることを目指している。

さらに言えば、①血縁を前提としない親子関係やきょうだい関係の形成・発達という課  
題をとまなう新しい家族ライフスタイルの可能性、②「複核家族 (binuclear family)」(Ahrns  
& Rodgers, 1989=1991) と呼ばれる、複雑に拡大連鎖するネットワーク型（緩やかな家族境  
界型）の家族構造の可能性、③同質的な当事者間のネットワークが固有の「下位文化  
（subculture）」を発達させることによって、制度的に不完全な状態にある家族スタイルが  
次第に制度化される可能性、の3つの視点から現代家族の変動を問うステップファミリー  
研究は（家族）社会学的にも大きな意義がある（野沢, 2001）。

## **(2) ステップファミリーへのサポートとインターネットの効果**

これまで述べてきたように、ステップファミリー・メンバーにとっては、その家族生活  
が特有の課題に直面し、それゆえに心理的なストレスをもたらすことが多いと考えられる。  
私たちの研究は、そうしたストレス状況に置かれた人々にとって、配偶者や親を含む家族・  
親族や友人など個人的な人間関係から得られるソーシャル・サポートが心理的な安寧  
（well-being）をもたらすメカニズムを明らかにしようとする（浦, 1992）。個人的な人間関  
係から与えられるサポートの効果だけではなく、他者へのサポートの提供がもたらす効果  
にも注目したい。さらに、そうしたサポートの受領や提供が実行されたかどうかだけでは

なく、援助的・支援的な関係のネットワークの特性（その大きさや構造など）がもたらす効果にも関心をもっている。どのようなストレス状況に置かれている場合に、誰からのサポート受領が、あるいはどのようなサポート・ネットワークの特性が、より健康的な心理状態（状況への適応）をもたらすのかが、主要な問題関心である。

ステップファミリーが、依然として社会的に目立ちにくい少数者の位置づけにあるとするならば、家族生活について悩みをもつような場合に、自らと同じような経験をもつ相談相手を得ることは簡単ではないだろう。標準的な家族形態を当然のこととしている多数派の人たちは、たとえそれ以外の点では親密な相手であっても、適切なサポートの提供者にはなりにくいかもしれない。もしそうなら、インターネットの利用によって適切な相談相手と出会い、ステップファミリー経験者同士でサポートの授受が可能になることは、決定的に重要な効果をもたらすことになるだろう。しかし、一方では、インターネット上でのコミュニケーションだけに限定されるサポート提供者よりも、家庭や近隣など日常生活領域で直接対面する相手の中に、悩みの理解者がいてサポートの提供者となっていることが、より重要な効果をもつかもしれない。

つまり、ステップファミリーにとって、インターネット・サポートとそれ以外のサポートにはどのような違いがあり、その両者はどのような関連になっているのかという点が分析の焦点である。また、インフォーマルで個人的な人間関係によるサポート交換ばかりではなく、公的な専門機関からのサポートをどう利用しているかという点も研究関心に含まれる。私たちの調査項目は、基本的にソーシャル・サポート（ネットワーク）研究の枠組みから組み立てられている。

### **(3) ステップファミリー支援組織とインターネット利用**

ヴィッシャー夫妻は、1959年に結婚してステップファミリーとしての生活を始めたとき、行き詰まってステップファミリーへのアドバイスが書かれた本を探し回ったすえ1冊も見つからなかったことを、その著書の「日本語版序文」の中で述懐している（Visher & Visher, 1991=2001: 訳書4頁）。結局この二人が自宅のリビングルームで始めたステップファミリーの集会が現在のSAAという全国組織に発展したのだが、そこには草の根的な活動からの長い歴史があったわけである。つい最近までの日本社会は、1970年代以前の米国にも等しい、ステップファミリーに関する制度的未整備状況にあったことは確かである。私たちがこれまでに接触をもった何人かのインタビュー対象者（おもに継母の方々）も、ヴィッシャー夫妻と同様に継親としての生活に戸惑い、様々な情報を探したけれども、有益な本は結局見つからなかったというエピソードを語ってくれている。

しかし、例えば上述した日本のSAJの形成過程と活動歴（その歴史はまだ2年に満たないのだが）を振り返ってみると、従来の（例えば、米国のSAAのような）セルフヘルプグループが何年もの時間をかけて行ってきた組織化の行程を超高速度の早送り映像のようなスピードで走り抜けてきたようにさえ見える。SAAという「ステップファミリー先進国」

のお手本（組織活動のモデル）がすでに存在していたという点は大きいですが、そのようなモデルを探し出すことから、当事者同士が出会い、関係を深め、様々な活動を実現していく準備作業に至るまで、インターネット利用者の拡大という社会的条件がなければこれほど短期間に進展することはなかつたであろう。私たちの関心は、直接の対面接触を条件とせず、共通の困難を抱えた当事者同士がインターネット上での出会いを通じて知り合い、組織が形成される 21 世紀型の新しいセルフヘルプグループの組織・運営がどのような特徴を持つのかという点にある。

これまで私たちは、SAJ という組織にとっての「経営学的なコンサルタントとしての役割」（岡, 2000）に近いスタンスで関係を保ち、可能な支援を提供しながら組織の発展・展開の軌跡を追走してきた。そして、SAJ 代表の春名さんほかの中心メンバーを始め、他のステップファミリー関連の団体の中心メンバーにもインタビュー調査を断続的に行っている。インターネットを活用した組織活動の動向は、上記の調査票調査への回答が生み出される背景的社会状況を成しているという意味でも重要である。また、「ステップファミリー」が社会的認知を獲得し、社会的諸制度に組み込まれていくような社会変化がストレス源を減らし、多様なサポート源を増やしていくと考えるならば、そうした社会変化を促進する公的・半公的当事者組織の形成・発展の問題は、それ自体、独自の意義をもつ研究テーマである。

---

#### 【注】

- <sup>1</sup> この特別推進プロジェクトは、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金（2001-2002 年度）による研究助成を受けている。プロジェクト全体の組織構成や研究の内容・経過については、野沢（2002）を参照。
- <sup>2</sup> この研究班が進めているもうひとつの調査は、「シニア世代のインターネット利用に関する調査」であり、その成果については別に調査報告書を作成する予定である。このふたつの調査プロジェクトの進行状況に関しては、すでに簡単な中間報告を行っている（宮田・野沢, 2002）。
- <sup>3</sup> 「ステップファミリー」という用語の使用法は、それがまだ充分人口に膾炙していない日本においてのみならず、米国社会においても明確ではない。例えば、同居している継子はなく別居の継子との関係のみをもつ場合をステップファミリーの概念に含めるかどうかは必ずしも自明ではない。また、英語の「ステップ（step）」という語には伝統的に否定的な意味合い（マイナス・イメージ）が含まれるなどの理由から別の用語（blended family, reconstituted family など）を好んで使用する研究者もおり、これも必ずしも一定していない。私たちは、SAA や SAJ の見解に倣い、より一般的である「ステップファミリー」というカタカナ書きの用語を採用している。
- <sup>4</sup> 1999 年発行の『福祉社会事典』には「ステップファミリー」という用語が項目として採用されている。そこでは、「少なくとも夫婦どちらかの当該の結婚以前に産まれた子どもを含んで構成される家族」という定義が与えられ、「日本においては、アメリカ社会ほど、ステップファミリーは多くなっておらず社会問題とはなっていない」と述べられている（竹村, 1999）。
- <sup>5</sup> SAA のウェブサイト（<http://www.saafamilies.org/>）を参照。
- <sup>6</sup> 参考までに示せば、1998 年に実施された全国家族調査（NFR98）では、19 歳以下の同居子をもつ 28～77 歳の男女のうち、少なくとも 1 人の継子と同居していると推定され



るケースの比率は1.8%であった（西村, 2001）。

- <sup>7</sup> 近年の米国および日本における離婚・再婚の社会的状況については、岩井（1997）の簡潔な解説が参考になる。
- <sup>8</sup> Stepfamily Web/SAJ（ステップファミリー・アソシエーション・ジャパン）のアドレスは <http://www.saj-stepfamily.org/>。
- <sup>9</sup> 2000年2月には、春名さんを研究会に招いて、こうした経緯について直接詳しくインタビューする機会を得た。
- <sup>10</sup> 当初は、ヴィッシャー夫妻を講師として招く予定であったが、エミリー・ヴィッシャーさんが来日直前に急逝されたため、夫妻の友人でもあるマージョリー・エンゲルさんが急遽講師を引き受けてくれることになった。この講演会およびその前後のワークショップの開催には、私たち研究班のメンバーも協力した。エンゲルさんには、SAAおよび米国のステップファミリー（の研究）について多くの示唆をいただいたことを感謝したい。また、ついにお会いすることができなかったエミリーさんのご冥福を祈りたい。
- <sup>11</sup> 社会的認知の拡大という点では、インターネットに負けず劣らずマスメディア（新聞、テレビ、雑誌、書籍など）の影響が大きいだろう。最近、メディアがSAJとの関連でステップファミリーを取り上げた例としては、『中国新聞』（2001年8月23日付、くらし欄「子連れ再婚 — きずな模索」）、『日本経済新聞』（2001年10月11日付夕刊、家庭欄「子連れで再婚 — ステップファミリーが交流」）、NHKの「おはよう日本」（SAJ主催のエンゲルさんの講演会を翌朝紹介した2001年11月4日の放送）、フジテレビのニュース番組「スーパーニュース」（2002年5月15日放送の特集「本物の親子になりたい…血縁のない家族＝ステップファミリーの苦悩と現実」）、NHK教育テレビ「にんげんゆうゆう」（2002年6月11日放送の「一步一步、家族を築く — ステップファミリー（再婚家族）」）、テレビ朝日「親の目子の目」（2002年6月14日放送の「僕のお母さん — 新たな家族・新たな絆作り」）、『AERA』（2001年12月3日付、「ステップファミリーの幸せ」）、『人間会議』（2002年春号、「新しい家族のかたち — ステップファミリー」）などがある。これらはいずれも「ステップファミリー」という呼称を使用しており、この用語の一般化に寄与しているとみられる。米国の臨床専門家が当事者向けに書いた書籍『ステップファミリー』（Visher & Visher, 1991=2001）の翻訳出版もマスメディアの影響の一部をなしている。さらに、私たちの研究自体がステップファミリーの社会的認知に多かれ少なかれ影響を及ぼしていることになるだろう。

## 【参考文献】

- Ahrons, C. & Rodgers, R. (1989). *Divorced Families: Meeting the Challenge of Divorce and Remarriage*. W.W. Norton. [(1991) 服部廣子訳『離婚家族 — 正常家族としての考察』家政教育社]
- 会津泉 (2001) 『アジアからのネット革命』岩波新書。
- Cherlin, A. (1978). Remarriage as an incomplete institution. *American Journal of Sociology*, 84, 634-650.
- Coleman, M., Ganong, L., & Fine, M. (2000). Reinvestigating remarriage: Another decade of progress. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 1288-1307.
- Ganong, L., & Coleman, M. (1997). How society views stepfamilies. *Marriage and Family Review*, 26, 85-106.
- 早野俊明 (1997) 「わが国における継親子の法的関係」『アルテス リベラレス (岩手大学人

- 
- 文社会科学部紀要)』61号, 159-176.
- Hetherington, E. M., & Stanley-Hagan, M. (2000). Diversity among stepfamilies. Demo, D. H., Allen, K. R., & Fine, M. A., (Eds.), *Handbook of Family Diversity*, Oxford University Press, 173-196.
- Ihinger-Tallman, M. & Pasley, K. (1997). Stepfamilies in 1984 and today: A scholarly perspective. *Marriage & Family Review*, 26, 19-40.
- 稲葉昭英 (2002) 「結婚とディストレス」『社会学評論』53 (2), 69-83.
- 岩井紀子 (1997) 「アフター・ディボース — 離婚からの出発」石川実 (編) 『現代家族の社会学 — 脱制度化時代のファミリー・スタディーズ』有斐閣, 140-152
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (編) (2001) 『人口動態統計 (平成 11 年)』厚生統計協会.
- Larson, J. (1992). Understanding stepfamilies. *American Demographics*, 14, 36-40.
- 宮田加久子・野沢慎司 (2002) 「新しいメディアとソーシャルサポート研究」(特別推進プロジェクト中間報告「現代社会における技術と人間」) 『研究所年報』32号 明治学院大学社会学部附属研究所, 87-94.
- 西村純子 (2001) 「家族構造と家族生活ストレイン — ひとり親、ふたり親、ステップ・リレイション」渡辺秀樹 (編) 『現代日本の親子関係』文部省科学研究費基盤研究 (A) : 家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No.2-2, 91-110.
- 野沢慎司 (2002) 「研究の経緯と焦点」(特別推進プロジェクト中間報告「現代社会における技術と人間」) 『研究所年報』32号 明治学院大学社会学部附属研究所, 69-70.
- 野沢慎司 (2001) 「ネットワーク論的アプローチ — 家族社会学のパラダイム転換再考」野々山久也・清水浩昭 (編) 『家族社会学の分析視角』ミネルヴァ書房, 281-302.
- 岡知史 (2000) 「21 世紀のセルフヘルプグループとその調査方法」右田紀久恵・小寺全世・白沢政和 (編) 『社会福祉援助と連携』中央法規出版, 91-107.
- 総務省 (編) (2001) 『情報通信白書 平成 13 年版』ぎょうせい.  
[<http://www.mha.go.jp/hakusyo/tsushin/index.html>]
- 竹村祥子 (1999) 「ステップファミリー」庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之 (編) 『福祉社会事典』弘文堂, 555-556.
- 浦光博 (1992) 『支えあう人と人 — ソーシャル・サポートの社会心理学』サイエンス社.
- Visher, E. B., & Visher, J. S., (1991). *How to Win as a Stepfamily*. Second Edition, Brunner/Mazel.  
[春名ひろこ監修・高橋朋子訳 (2001) 『ステップファミリー — 幸せな再婚家族になるために』WAVE 出版.]
- Wellman, B., & Gulia, M. (1999). Net surfers don't ride alone: Virtual communities as communities. In B. Wellman (Ed.), *Networks in the global village*. Westview Press, 331-366.

## Ⅱ. 「ステップファミリー調査」の方法とデータ特性

### 1. ステップファミリーはどこにいるのか？ — サンプルングの問題 —

この章では、後続の章で分析に使用している「ステップファミリーに関するアンケート調査」データの収集方法と特性について説明する。あらかじめ強調しておかなければならないのは、この調査によって得られたデータは現代日本の「ステップファミリー」の一般的な姿を代表するものではないということである。この調査に回答していただいた方々は、日本社会（あるいはその特定の地域）に住むステップファミリーを代表するような方法で抽出されたわけではなく、後述するように限られたルートでの募集という方法を使った。したがって、いくつかの面で偏りのあるデータとなった可能性が高い。それについては、この章の後半で検討したい。

通常の社会調査であれば、まず調査の対象となる人々の集団（これを母集団と呼ぶ—例えば「ある都市に住む30歳代の女性」という条件にあてはまる人々）を設定する。ただし、その対象全員を調査することは現実的には困難なので、次に母集団の特徴を偏りなく忠実に代表するようにその一部（サンプル）を抽出し、それを調査の対象とする。多くは、母集団に属する全員の名簿（これをサンプルング台帳と呼ぶ—例えば住民基本台帳や選挙人名簿）をもとに、その名簿に記載されている人たちからできるだけランダム（無作為）に抽出する方法を採る。そして、このサンプルの回答結果から母集団全員についての回答傾向について推定をするわけである。このようにして、回答者となる調査サンプルが母集団の正確な縮図である場合にのみ、調査結果が想定している母集団についての事実を推測することができる。

ところが、現代日本の（あるいは特定の地域の）ステップファミリーに属する個人を母集団とした場合、そのサンプルング台帳はどこにも存在しない。したがって、ランダムなサンプルングは不可能であり、代表性のあるデータを確保することはできない。のみならず、少数のステップファミリーにアクセスし、限られた情報を得ることでさえ、これまではほとんど不可能であった。ステップファミリーが社会的に見えない存在であったことが、ステップファミリーについての研究が進展しなかった理由のひとつでもある。

しかしながら、前章で述べたような経緯から、少しずつステップファミリーの社会的な可視性が増すことで、私たちの調査研究に協力いただける方々と接触する可能性が広がってきた。インターネットの普及は、ここでも大きな意味を持っている。以下に述べるように、インターネットを含むメディアの力を借りることによって、私たちは調査対象者を募集し、その募集に応じていただいた方々を対象にした調査票調査（いわゆるアンケート式の調査）を実施することができた。代表性のあるデータの入手が困難であるにせよ、これまで調査自体がなされてこなかったステップファミリーについて、可能な限り多様な情報を集めるという方法でアプローチすることが今後の研究展開にとっての糸口となると考えたからである。

したがって、この調査データの分析結果が日本のステップファミリーの平均的な姿を描き出しているという保証はない。導かれたいくつもの知見も、今後の研究によって再検討されるべき暫定的な仮説でしかない。各章での分析で提示されている統計的検定の結果も、本来なら代表性のあるサンプルから得られたデータの分析結果が母集団に関しても成り立つ蓋然性を推定するためのものであるから、本調査のようなデータに関しては行うべきではないのかもしれない。しかし、意味がありそうな仮説に光を当てるためのひとつの指標として、統計的検定の結果も表示することにした。私たちは、この調査から導かれた結果（とくに具体的な数字）が一人歩きし、あたかも確定的な事実であるかのように扱われることのないように願っている。

しかしながら、未開拓の領域を切り開く新しいデータの収集という意味では、この調査は大きな意義を持っている。未知の「ステップファミリー」を理解していくためには、仮説的な知識であれ、可能な限りの方法を使って収集し、分析結果を積極的に提示していくことが重要であるとも考えている。それが、さらに多くの、より確からしい研究成果を導くための第一歩だからである。

## 2. 調査の実施方法

### (1) 回答者募集の方法

「ステップファミリーに関するアンケート調査」と名づけた今回の調査票（質問紙）調査の回答協力者は、おもに次の3つの方法で募集した。

#### ① 関連書籍の読者に向けた募集

ステップファミリー向けの啓蒙書である Visher & Visher (1991) の翻訳書『ステップファミリー ― 幸せな再婚家族になるために』(WAVE 出版) が 2001 年 7 月に出版された際、監修者（春名ひろこさん）と出版社にご協力をいただき、その書籍に調査協力者（回答者）を募集する文書（その片側が料金受取人払いの葉書になっている）を折り込ませていただいた（図 II-1 参照）。この文書で本調査について知り、添付の葉書で応募してきた協力者に調査票を郵送またはメールで送付した。この本の購入者がステップファミリーのメンバーである可能性が高いと考えたためである。

#### ② インターネット上のウェブサイトにおける募集

明治学院大学社会学部附属研究所のウェブサイト上に、「ステップファミリーに関するアンケート調査」のお知らせを掲示するページを開設した。同時に、SAJ のウェブサイト (Stepfamily Web) にもこの調査についてのお知らせを掲示していただき、明治学院大学のサイトと相互にリンクを張った。したがって、SAJ のサイトを訪問したステップファミリー当事者が調査に関心をもった場合、リンクしている明治学院大学の当プロジェクトのウェブページにたどり着き、おもに電子メールで調査協力の連絡をいただく、というのが第2の募集ルートである。



### ③ SAJ主催の講演会での募集

I章でも触れたように、2001年11月に東京と兵庫で開催されたSAA会長の講演会には、多くのステップファミリー当事者の参加があった。その会場で調査回答への協力者を募る文書を配布し、協力いただける方の連絡先をお知らせいただいた。後日、その方々に調査票を郵送または電子メールで送付した。

#### (2) 調査票の作成と配布・回収の方法

上記の3つのルートの内いずれの場合にも、調査の回答に応じていただけた方には、調査票の送付・返送の方法として、郵送とメールのどちらかを選択してもらった。しかし、調査票を作成する過程で、紙に印刷した郵送版の調査票とテキストファイル形式のメール版調査票を比較すると、後者がどうしても行数が膨大なものになり、読みにくく、記入しにくいものにならざるをえないことが明らかになった。そのため、メール版希望者に送付した調査票には、より記入しやすい郵送版をお薦めする文章を付け加えた。ただし、メール版への回答でも何ら差し支えないことを明示した。郵送版への変更希望があった場合には、後日調査票を郵送にて再送付するという方法を使った。送付した調査票は、送付と同様の方法で返送をお願いした。

調査票の作成にあたっては、2001年6月に予備調査として、ステップファミリーの当事者に対する半構造化インタビューを実施した。協力していただいたのは、継母（4名）と実子を連れて再婚した母親（1名）、そして実子を連れて（このインタビューに協力いただいた継母の1人と）再婚した父親（1名）の計6名である。全員が関東地方在住である。おもに明治学院大学の施設内で、約2時間の個別インタビューを実施した。内容は、インターネット利用状況から、ステップファミリーに関する家庭生活上の困難や悩みと喜び、サポートしあう人間関係の状況、家族関係の変化など多岐にわたり、比較的自由に語ってもらうことを旨とした。このインタビュー内容をふまえて、調査項目を設定し、質問文案を練り上げ、最終的な調査票を完成させた。おもな調査質問項目は、婚姻歴（婚姻状態）、家族構成、（継）親子関係、パートナー間のサポート関係、親族関係、悩みの相談ネットワーク、インターネット利用状況、インターネット上のサポート授受、（専門家による）制度的サポートの要望、心理的健康状態（ストレス反応など）、家族関係満足度などである（巻末資料の郵送版調査票を参照）。

#### (3) 実施期間と調査票の回収状況

調査協力の募集に対して応募があった方々に対して、2001年10月19日に調査票の送付を開始し、応募連絡があるごとに随時調査票を郵送かメールで送付した。なお、2002年2月5日には、その時点でまだ調査票が回収されていない可能性のある応募者全員宛に、回答を促す催促状を送付した。調査は2002年5月31日に終了の予定であるが、2002年2月22日の時点で回収されている調査票のデータを入力して得たデータが、この中間報告のた

めの分析データである。通常の社会調査と比較すると調査期間が長く、回答者によって回答時期がずれていることに注意がいる。

2002年2月22日時点での調査票配布と回収の状況は以下の通りである。調査票送付先総数は、151人（うち郵送120人、メール31人）であり、そのうち回答拒否の連絡が1人（メール）、パートナーなし、およびパートナーとの関係解消の理由で非該当との連絡が2人（いずれもメール）、宛先不明で返送されたものが1人（郵送）であった。有効回答者数は113人、そのうち郵送版回答者は93人（82.3%）、メール版回答者は20人（17.7%）である。今回の調査の場合、厳密な回収率の計算は困難であり無意味であるが、仮に調査票を送付した149人（非該当者2人を除く）を母数とすれば回収率は75.8%になる。

### 3. このデータの特性 — 推定される偏り —

今回の調査は、前例のない試行的な調査であるため、そもそも回答者数がどれほど確保できるかも不確定であった（そして結果的には数量的なデータの確保という点では当初期待したほど多くはなかった）ため、対象者の定義をできるだけ広く設定することにした。調査票の冒頭〈ご記入にあたってのお願い〉には、「この調査は、ご夫婦の一方もしくは双方が前のパートナーとの間のお子さんをつれて再婚した家族（ステップファミリー）の夫か妻（またはその双方）を対象としています。現在、法律的には結婚していないけれども、事実上ステップファミリーとしての生活が始まっている方も対象に含まれます」との対象者定義を明示した。このような対象者設定と前述の募集方法のために、以下のような点において、得られたデータが偏りをもつ可能性が高い。分析結果を解釈・評価する際に注意すべき点とあわせて列挙してみる。

#### (1) 回答者は、女性が圧倒的多数であり、カップル単位の回答も多い。

今回の回答者は、113人のうち83人（73.5%）が女性であった。回答者の4人に3人は女性であるため、ステップファミリーを構成するカップルの一方からの情報に傾斜している。しかも、男性回答者（30人）のうち24人（80.0%）が、調査票の問46で自分のパートナーもこの調査に回答していると答えている（ただし、女性回答者のうち29人〔35.4%〕がパートナーも回答していると記入している）。カップル単位で調査への協力を申し出ても実際に両者がともに回答したとは限らないので、カップル単位の回答数を確定するのは難しいが、男性回答者の大多数がパートナーとともに回答していると考えて間違いない。男女を合わせた全回答者からのデータを分析する場合には、同じ世帯に含まれる（同じ世帯状況を共有している）カップルが24組（48人）程度含まれていることに注意する必要がある。カップル単位で回答しているケースについては、例えば結婚年数や子どもの数など同一の状況について二重に報告されていることになる。そこで、以下の章における分析では、必要に応じて男女別の分析を行っている。

### **(2) ステップファミリーの前段階・初期段階の回答者が多い。**

回答者の諸特性については、Ⅲ章および巻末の資料「男女別単純集計」を参照していただきたいが、婚姻あるいは同居に至る前段階および同居・結婚後間もないステップファミリー初期の段階にある回答者が大多数を占める点はとくに重要である。今回の調査では、パートナーとの法的な婚姻関係や同居を対象者の条件にせず、本人が「事実上ステップファミリーとしての家庭生活が始まっている」と感じているかどうかという主観的な基準のみを採用した。結果として、結婚年数4年以上の回答者は（未入籍者を含めた）全体の2割強（女性の23.2%、男性の17.2%）に過ぎず、結婚後1年未満の人が男女とも約2割を占めた。また、女性回答者の23.2%、男性回答者の13.8%がパートナーとは（まだ）婚姻関係にないと回答している。同居年数についても同様に短い。女性の26.5%、男性の17.2%はパートナーと別居または半別居状態にあり、完全な同居生活が始まっていない。今回の調査回答者は、ステップファミリーとしての家族生活の初発の段階にある人が多数を占め、再婚後、長期にわたる関係を築いてきた家族のメンバーは実際よりも少ない比率でしか対象に含まれなかったと推測される。

### **(3) 家族生活の悩みやストレスのレベルが比較的高い回答者が多い。**

このような偏りが生じているのは、上記のような初発段階にある場合にもっとも悩みが大きくなるからであると推測される。そもそも今回の回答者募集の方法では、ステップファミリーに関する書籍を購入したり、インターネット上でSAJや当研究プロジェクトのウェブページに（検索やネットサーフィンの結果として）たどり着いたり、ステップファミリー向けの講演会に参加した人たちが対象となる場合がほとんどである。つまり、積極的にステップファミリー関連の情報を求めている人たちである。それは、ステップファミリーに関する悩みを抱えている人たちであり、そのような人たちの多くは再婚の直前や直後の段階にあると推測できる。なお、回答者には女性が多いという事実は、家族内外の問題直面しているのがおもに女性であることを反映しているとも考えられる。後続の各章での分析結果も、そのような推論を支持している。ステップファミリー経験者のなかでも、同居年数や結婚年数の長い、安定期に入っている家族は、今回の調査対象に含まれにくかった。一方で、悩みや問題の解決に向けて積極的に行動を取ろうとしている人が多く回答しているとみることできる。逆に、家族の問題が解決困難なほど深刻化して心身に非常に大きなストレス反応を生じているケースが含まれることは稀だろう。その意味で、多様なステップファミリーの全体的分布をうまく代表しているとは限らない。

参考までに、西村（2001: 104）が全国家族調査データを使って報告している、男女別・家族類型ごとの生活ストレイン指標の平均値と今回のステップファミリー調査での該当指標の平均値を下の表Ⅱ-1に示した。西村の分析は、1999年1月に実施された日本全国の28～77歳の男女を母集団とした標本調査（NFR98）のデータのうち、19歳以下の同居子をもつ男女に限定したデータを使用したものである。ステップ関係をもつ親（n=43）、ひと



り親（n=82）、ふたり親（n=2,252）という家族類型に基づく3グループ間で各指標（レンジ1-4点）の平均値を比較している。今回のステップファミリー調査の回答者は必ずしもステップ関係をもった継親とは限らないこと、およびNFR98調査ではステップ関係をもつ親のケース数が非常に少ないことには注意しなければならないが、質問項目が類似した全国データにおける上記3グループとの比較は今回の調査データの偏りを推測する上で参考になる。

**表Ⅱ-1 家族内ストレス源（家族生活ストレイン）指標の平均値の比較**

**（男女別／今回の調査とNFR98全国家族調査の各類型別）**

	ステップファミリー調査回答者	ステップ関係をもつ親(NFR98)	ひとり親(NFR98)	ふたり親(NFR98)
女性				
子どものことで悩んだこと（問13d）	2.77	2.76	2.66	2.76
配偶者のことで悩んだこと（問13b）	2.33	2.52	-	2.12
自分が家族に理解されていないと感じたこと（問13e）	2.11	1.84	1.78	1.83
家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと（問13a）	2.49	3.00	2.42	2.19
男性				
子どものことで悩んだこと（問13d）	2.27	1.89	2.67	2.22
配偶者のことで悩んだこと（問13b）	2.07	1.50	-	1.70
自分が家族に理解されていないと感じたこと（問13e）	1.60	1.56	1.83	1.59
家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと（問13a）	2.03	1.33	1.94	1.54

注) 西村(2001: 104)の表1の一部に今回の調査結果を加えて野沢が作成。両調査の質問文は類似しているが微妙に異なる。( )内に本ステップファミリー調査における対応問番号を示した(巻末資料の調査票を参照)。

この表からは、NFR98データ同様今回の調査でも、男性よりも女性の方が家族内のストレス源（悩みなど）をより頻繁に経験していることがわかる。しかし、今回のステップファミリー調査の回答者中の男女間の差異は比較的小さい。女性ではNFR98データのステップ関係をもつ親と今回調査回答者の各指標平均値はほぼ同レベルであるが、男性ではNFR98データのステップ関係をもつ親（男性ではこのグループがもっともストレス源が少ない）と比較して平均値のレベルがかなり高いことがわかる。今回の調査に協力いただいた男性は、継親子関係をもつ父親の平均像に比べて、ストレス経験の大きい方々を多く含んでいるのかもしれない。しかし、全体的にみれば、ストレス源となる経験の面で、今回のデータは突出した偏りをもつものではなく、ある程度標準的なデータであることが傍証されているとみることもできるだろう。

#### **(4) インターネット利用頻度の高い人たちが多く含まれている。**

今回の調査回答者は、電子メールや電子掲示板などインターネットを利用する頻度が高い。全国的なデータと比較すると、とくにヘビーユーザーが多く含まれていることがわかる（詳細はVI章を参照）。先に述べたように、調査協力者募集の主要ルートのひとつがウェ

ブサイト経由であるため、回答者がパソコンでのインターネット利用に慣れた人たちを多く含みやすかった。SAJ などステップファミリー関連の電子掲示板や電子会議室などの利用者・閲覧者もかなり含まれている（全く見ない人は3割弱に過ぎない）。そのような偏りは、若年層への傾斜など別な面での回答者の偏りをもたらしているかもしれない。

以上挙げた4つの点以外にも調査回答者の偏りは存在するかもしれない。いずれにしても、日本のステップファミリー・メンバーを代表する信頼できるデータが他に存在しない以上、データの偏りについても十分に検討することができない。したがって、このデータの分析結果を過信せずに、仮説とみなして、後続の各章の分析をお読みいただきたい。

### 【参考文献】

- 西村純子（2001）「家族構造と家族生活ストレス — ひとり親、ふたり親、ステップ・リレイション」渡辺秀樹（編）『現代日本の親子関係』文部省科学研究費基盤研究（A）：家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No.2-2, 91-110.
- Visher, E. B., & Visher, J. S., (1991). *How to Win as a Stepfamily*. Second Edition, Brunner/Mazel.
- [春名ひろこ監修・高橋朋子訳（2001）『ステップファミリー — 幸せな再婚家族になるために』WAVE 出版.]

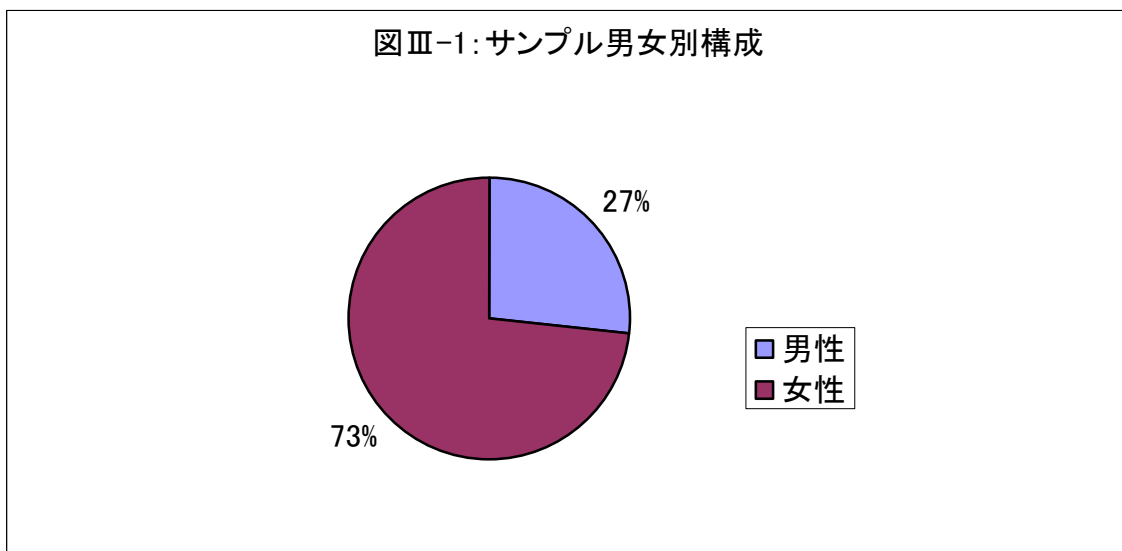
### Ⅲ. ステップファミリーの家族状況

ここでは本調査サンプルについて、下記の領域ごとに概略を見ていく。なお、Ⅱ章にも述べたように本調査のデータにおいて男女比が著しく不均衡であり、さらに男性回答者の多くは本調査の女性回答者のパートナーであるケースが多いため、質問項目によっては同一カップル（あるいは世帯）についての情報が重複してしまう可能性がある。以下の記述にあたって厳密さを増すため、場合によっては男性サンプルを除外し、女性サンプルのみで分析を進めることがあることをご了承いただきたい。

1. 性別構成
2. 年齢構成
3. 学歴構成
4. 仕事
5. 年収
6. 居住形態
7. 初婚再婚の別
8. 結婚年数
9. パートナーとの同別居
10. 親との同別居
11. 子ども関連

#### 1. 回答者の男女構成

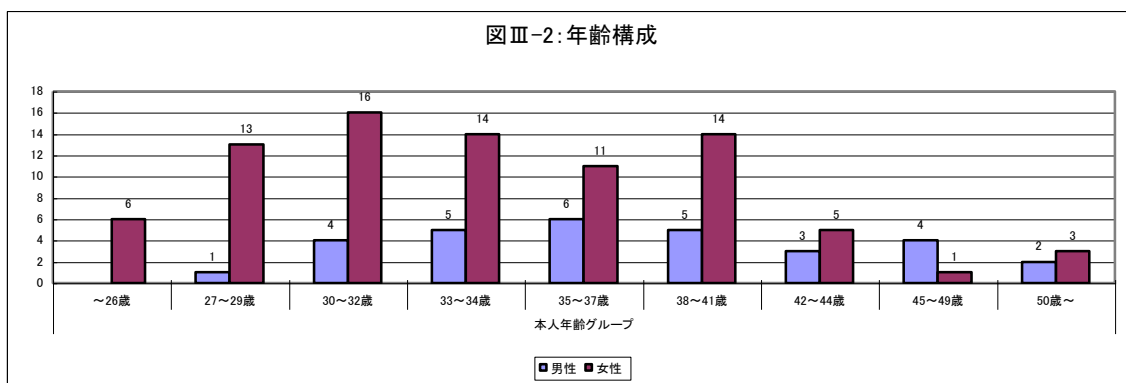
本調査の回答者数は男性 30 人、女性 83 人である。男女比を図Ⅲ-1 にまとめた。圧倒的に女性が多く、比較対照するには男性サンプルが非常に少なくなっている。



## 2. 年齢構成

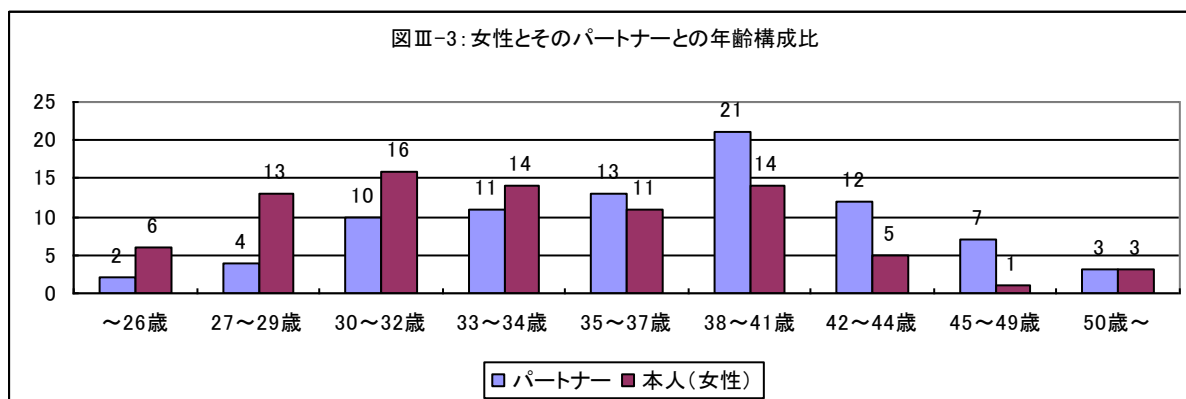
### (1) 本人の年齢

自身の年齢を見てみると、男性の場合には平均値は 39.4 歳、中央値は 37 歳となる。女性の場合には平均値が 34.3 歳で中央値は 33 歳であった。また、男性側の最年少は 29 歳で、最年長は 69 歳。女性側の最年少は 22 歳、最年長は 60 歳であった。本調査においてはサンプルの年齢層が比較的若い層に集中している。特に 50 代以降のデータが不足しており、それは子どもの年齢階層にも影響を及ぼしている。



### (2) パートナーの年齢

パートナーの年齢は、男性回答者のパートナーの平均値が 33.4 歳、中央値が 33.5 歳であり、女性回答者のパートナーは平均値 38.2 歳で中央値が 38 歳であった。言い換えれば、男性側のパートナーとしての女性の年齢は 33 歳前後であり、女性側のパートナーとしての男性年齢が 38 歳である、ということになる。図Ⅲ-3 は女性回答者に限定して、自身の年齢とパートナーの年齢を一つのグラフにまとめたものである。女性の年齢階層は 30 歳前後に傾き、そのパートナーは 30 代後半に山がきている。



### 3. 学歴構成

#### (1) 本人の学歴

本人の学歴は、データから見る限り男性では「高校」と「大学・大学院」が同数で、女性では「短大・高専」が最大、ついで「高校」が多くなっている。本調査におけるサンプル構成においては全体的に分散する傾向があり、性別と学歴との有意連関については特定できなかった。

表Ⅲ-1: 本人の性別と本人の最終学歴のクロス表

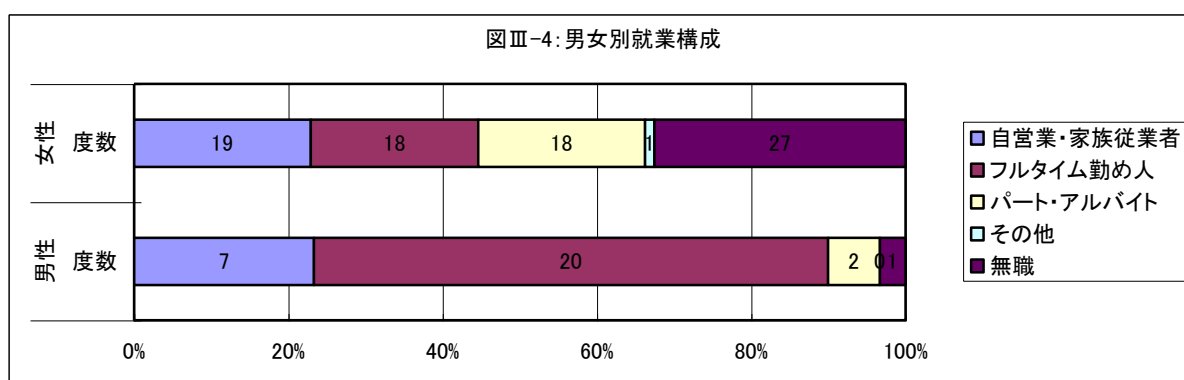
		本人の最終学歴					合計	
		中学校	高校	短大・高専	大学・大学	その他		欠損
本人の性別	男性	1	12	4	12		1	30
	%	3	40	14	40		3	100
	女性	1	29	34	16	3		83
	%	1	35	41	19	4		100
合計	度数	2	41	38	28	3		113
	%	2	37	34	25	3		100

### 4. 仕事

#### (1) 就業形態

##### ① 本人の就業

男性においては「フルタイムの勤め人」が66.7%を占め、「自営業・家族従業者」が23.3%を占める。対して女性は、度数が一極集中しておらず、多様性を見て取れるものの、それでも「無職」が32.5%と最も大きな比率を占めている。



##### ② 本人とパートナーの就業比較

なお、女性回答者のデータに限って、本人の就業形態とパートナーの就業形態とをクロスしてみた。実測値として一番大きかったのは、女性本人が無職で、パートナーがフルタイムという、性別役割分業の構図に即したものとなったと言える。このことから、ステップファミリーにおけるジェンダー差の存在を推測しうるといえる。

表Ⅲ-2: 本人の就業形態とパートナーの就業形態のクロス表

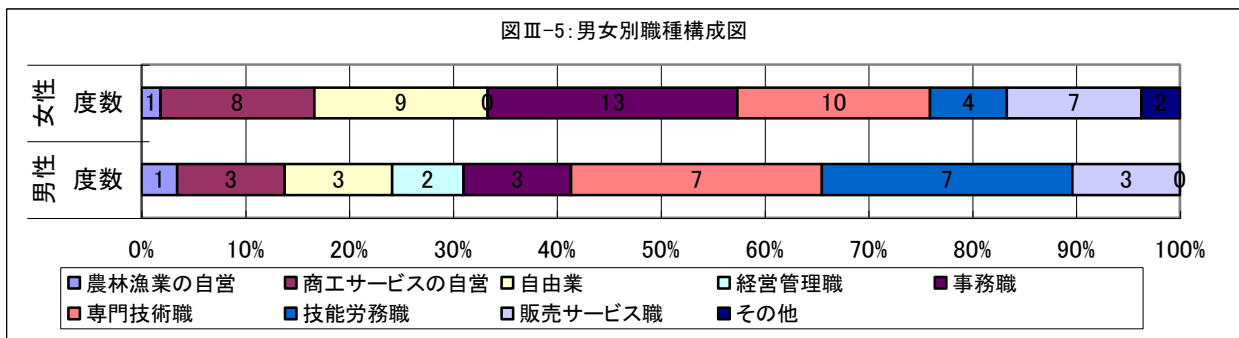
本人の就業形態	パートナーの就業形態	パートナーの就業形態					合計
		自営業・家族従業者	フルタイム勤め人	パート・アルバイト	その他	無職	
自営業・家族従業者	度数	12	7				19
	%	63.2	36.8				100.0
フルタイム勤め人	度数	4	13			1	18
	%	22.2	72.2			5.6	100.0
パート・アルバイト	度数	7	10	1			18
	%	38.9	55.6	5.6			100.0
その他	度数	1					1
	%	100.0					100.0
無職	度数	4	20	1	1	1	27
	%	14.8	74.1	3.7	3.7	3.7	100.0
合計	度数	28	50	2	1	2	83
	%	33.7	60.2	2.4	1.2	2.4	100.0

## (2) 職種

### ① 本人の職種

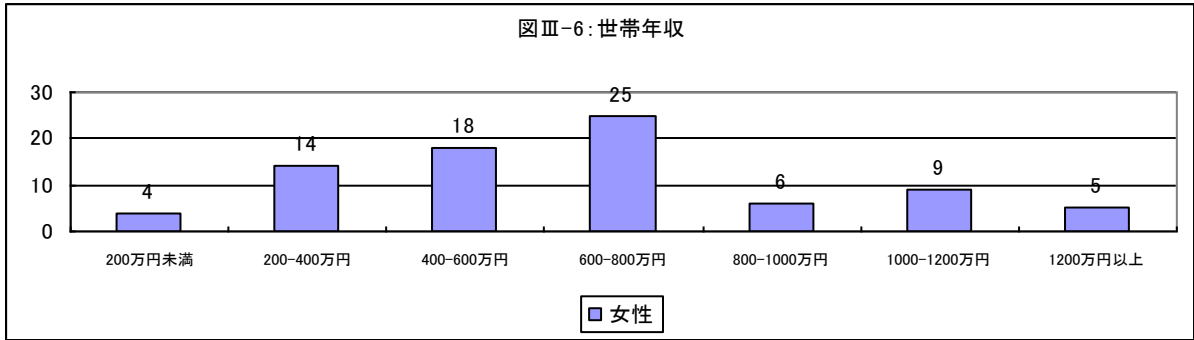
次にその職種に注目する。下記の表は、上記の就業構成図より、「無職」を除いたものである。

男性においては、「専門技術職」と「技能労務職」が最も多いが、女性側は「事務職」が最も多い。



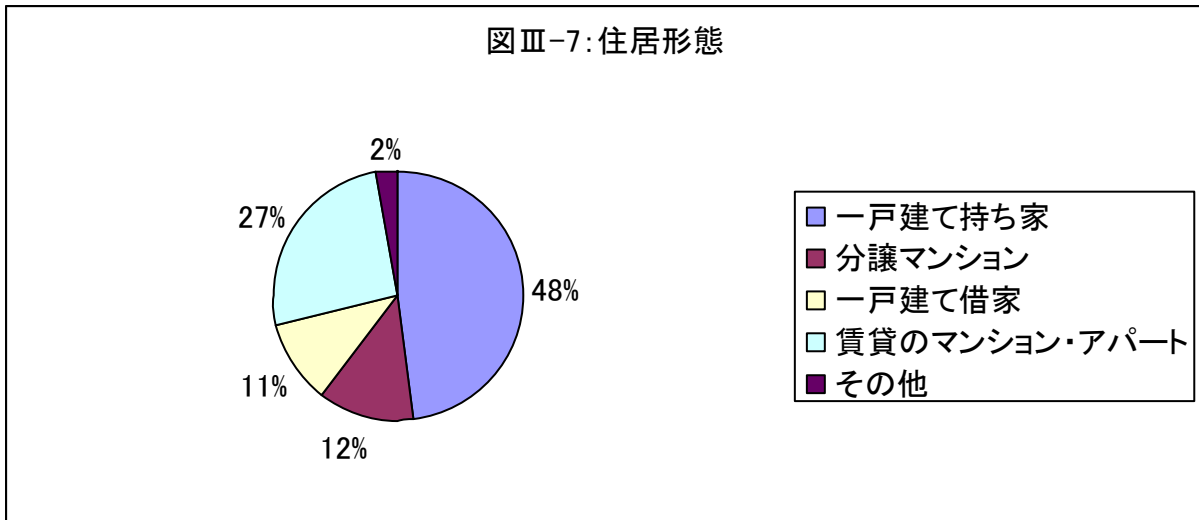
## 5. 世帯年収

先にも述べたように、本調査データには一組の夫婦が別個に回答している例があることから、重複を避けるために、女性回答者に限って「世帯年収」を概観してみた。中位域としての400～800万円という層に全体の半数が集中しているが、400万円以下の層をまとめると21%強のケースが存在し、また世帯収入が1000万を越える層でも17%強のケースがある。今回の調査回答者は、経済階層的に多様な人々を含んでいる。



## 6. 居住形態

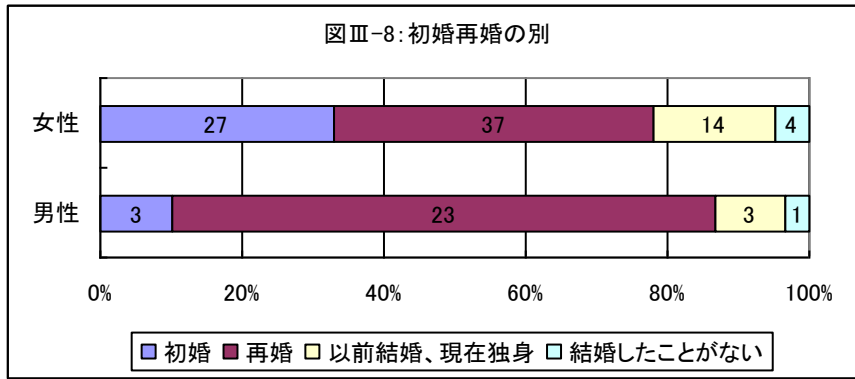
居住形態は「一戸建ての持ち家」が圧倒的に多い。男女サンプルが同一世帯の属する可能性があるため、図Ⅲ-7は女性データのみから作成した。



一戸建てと、分譲マンションを併せると 6 割が自身の持ち家を持っていることになる。この結果は平成 10 年度の総務庁統計局による住宅統計調査のデータとほぼ同値になっている。つまり、この点に関しては、今回の調査データはあまり偏りのない分布を示すデータであると言える。

## 7. 初婚・再婚の別

図Ⅲ-8からわかるように、男性回答者のうち、初婚でステップファミリーを形成したのは 1 割である。対して、女性が初婚でステップファミリーを形成したケースは 3 割を越える。また結婚経験はあるが現在は独身であるケースと結婚した経験がないケース（いずれも事実婚あるいはプレステップファミリーを含む）をあわせると、女性の場合は 22.9%を占める。



女性の回答に限って見ても、パートナー（男性）は6割以上が再婚であるが、本人（女性）は男性と比較して初婚であるケースが多い。

## 8. 結婚年数

対象者を男女別、結婚年数ごとに記載したのが次表である。ここでは便宜上、未婚者も含めて年数を5段階に分けている。調査対象者は結婚後0～2年までに集中しており、男女共にほぼこの範囲内で7割を占めている。結婚後5年以内に挙げれば、男女共に8割をカバーできる。今回の調査回答者が、全体にステップファミリーの初期段階にある人たちに偏っていることがわかる。

表Ⅲ-3: 本人の性別と結婚年数(5段階)のクロス表

	結婚年数(5段階)					合計	
	未婚(pre-stepfamily)	1年未満	1-2年未満	2-4年未満	4年以上		
本人の性別 男性	度数	4	6	6	8	5	29
	%	13.8	20.7	20.7	27.6	17.2	100.0
女性	度数	19	16	12	16	19	82
	%	23.2	19.5	14.6	19.5	23.2	100.0
合計	度数	23	22	18	24	24	111
	%	20.7	19.8	16.2	21.6	21.6	100.0

表Ⅲ-4: 本人の性別と同居しているかのクロス表

	同居しているか		合計	
	同居している	同居していない		
本人の性別 男性	度数	25	5	30
	%	83.3	16.7	100.0
女性	度数	62	21	83
	%	74.7	25.3	100.0
合計	度数	87	26	113
	%	77.0	23.0	100.0

## 9. パートナーとの同別居

有配偶者であったとしても、必ずしも同居しているとは限らない。それを示すのが上の表である。

女性のデータでも、25%におよぶ人々が（まだ）同居していないことがわかる。パートナーとの同別居を、初婚再婚の別とクロスしたのが次表である。同居していない、と答え



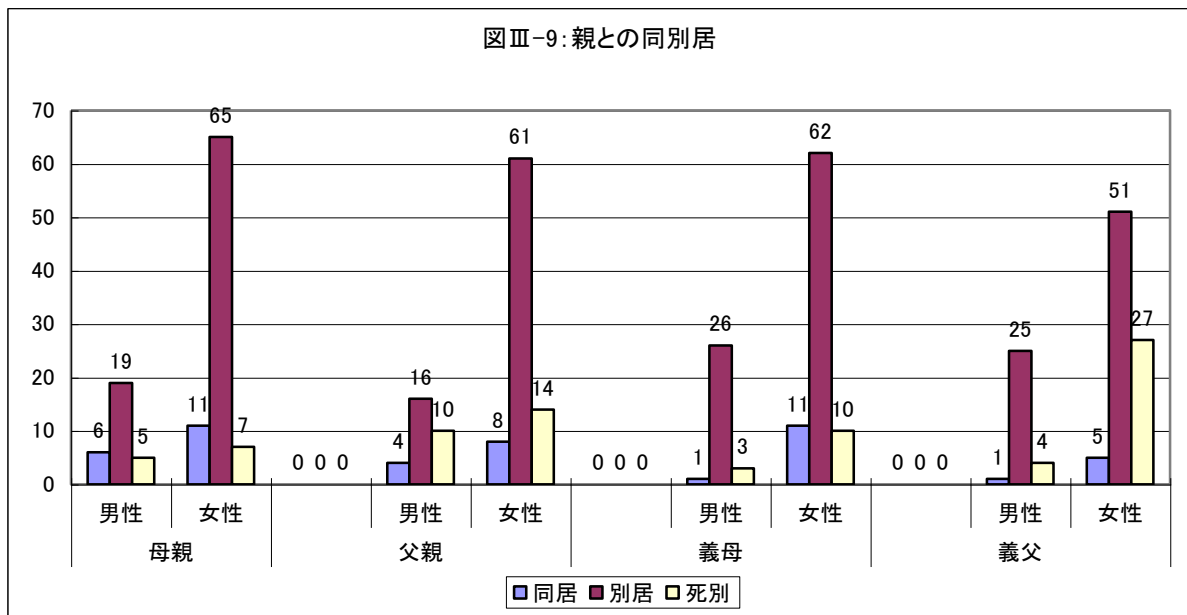
た人たちの多くは「以前結婚していたが現在していない」というケースの女性である。また、数は少ないが、初婚や再婚であっても現在別居中というケースも存在する。

表Ⅲ-5:同居しているかとあなたは初婚か再婚かと本人の性別のクロス表

性別		あなたは初婚か再婚か				合計
		初婚	再婚	以前結婚、 現在独身	結婚したこ とがない	
男性	同居している	3	21		1	25
	%	12.0	84.0		4.0	100.0
	同居していない		2	3		5
	%		40.0	60.0		100.0
合計	度数	3	23	3	1	30
	%	10.0	76.7	10.0	3.3	100.0
女性	同居している	23	33	4	2	62
	%	37.1	53.2	6.5	3.2	100.0
	同居していない	4	4	10	3	21
	%	19.0	19.0	47.6	14.3	100.0
合計	度数	27	37	14	5	83
	%	32.5	44.6	16.9	6.0	100.0

## 10. 親との同居

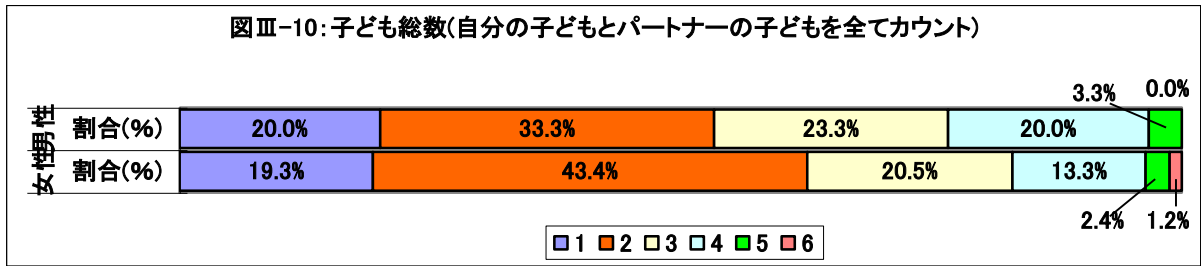
ここでは回答者自身またはパートナーの親との同居を見る。図Ⅲ-9で明らかなように、どちらの親とも、別居している率が非常に高くなっている。



## 11. 子ども関連

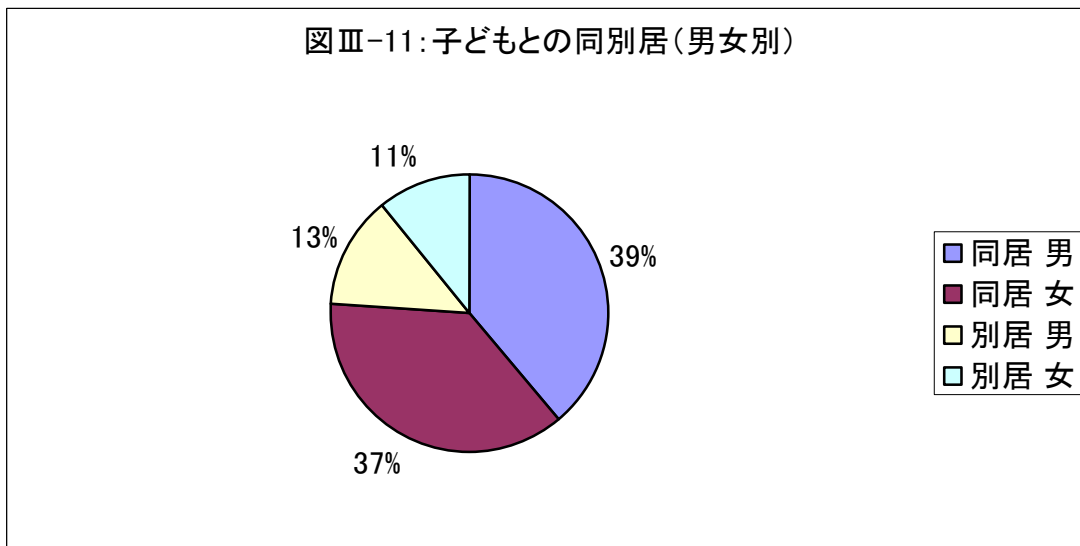
### (1)平均子ども数

回答者自身とパートナーの子どもをすべて合わせた数を尋ねたが、その結果を図Ⅲ-10に示した。単に子どもの数を見るならば、平均は2.4人で中央値は2人である。先にも述べたように、データの重複を鑑みて、女性データのみ限定してみても、分布は大きく異なることはない。



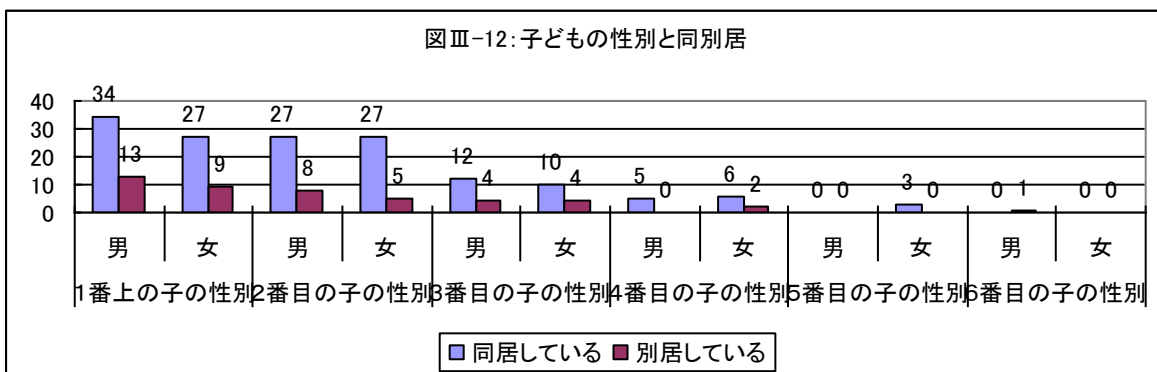
## (2) 子どもとの同別居

ここでは子どもに関するデータの重複を避けるため、女性のデータのみを用いている。なお女性データに限定した際の子ども総数は197人であった。



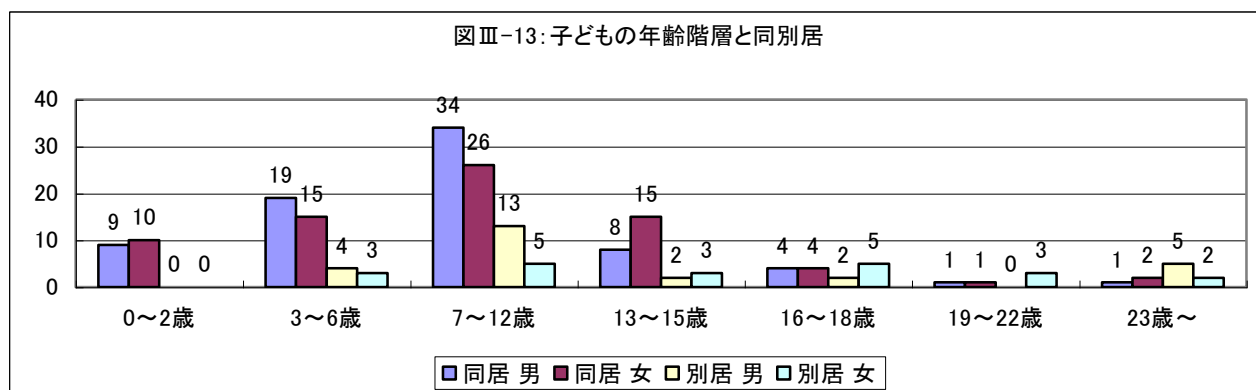
今回の調査における子どもを総数として扱うと、その76%が回答者本人と同居している。本調査の回答者と生活していないのは、男性13%と女性11%の合計24%に過ぎない。

この総数としての子どもを、第1子から第6子まで出生の順位として扱ったのが図Ⅲ-12である。



### (3) 子どもの年齢階層

次に総数としての子どもを、以下の年齢階層に区切って出力したのが図Ⅲ-13である。7歳から12歳、学齢で言うと小学生に対応する年齢階層のデータが最大値を示している。因みに、子どもの年齢の最年少は0歳であり、最年長は39歳であった。



以上、限られた視点ではあるが家族の概況について見てきた。なお、子どもとの関係についてはⅦ章で再び詳しく扱う。

## IV. ステップファミリーにおけるストレスとサポート・ネットワーク

この章では、①心理的なストレスの原因となる出来事の程度やその結果としての心理・身体的なストレス反応や家族関係満足度、②パートナーとの援助的および対立的な関係、③パートナー以外のサポート提供者のネットワーク特性について検討する。これら①～③が、性別、年齢、結婚・同居年数、家族類型などの個人・家族特性の違いによってどのような差異がもたらされるのか、つまりどのような個人や家族がストレスの影響を受けやすく、またそれを支えるサポートを得やすいのか、という条件を探索していきたい。さらに、①に含まれるストレス反応や家族関係満足度のような、家族生活状況への心理的な適応状態を示す指標が、②や③のサポート・ネットワークの条件によってどのように規定されているかを検討する。

ここで取り上げる個人・家族特性に関する変数は、回答者の性別、回答者とパートナーの年齢、結婚年数と同居年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無、の7変数である。日本の全国家族調査（NFR98）データに基づく分析は、離婚・再婚という経験が心理的なストレス反応（ディストレス）に与える影響には男女によって大きな違いがあり、男性に比べて再婚した女性あるいは継母のディストレスがとくに高いことを指摘している（稲葉, 2002; 西村, 2001）。この分析でも性別（ジェンダー）による差異はひとつの焦点になる。今回の調査回答者数が女性に偏っており（83人、全体の73.5%）、男性回答者（30人、26.5%）が少ない点で結果の一般化には注意しなければならないが、性別によって傾向が異なる場合には男女別に分析結果を提示することにしたい。

### 1. 家族生活とストレス状況

#### (1) 家族の内と外のストレス源

調査の対象となったステップファミリーの方々が、日常生活を営んでいく上で経験する人間関係上の出来事の中でストレス源となることが予想される9項目を想定して、過去1ヶ月間における経験頻度を4段階で回答してもらった（問13）。これらのストレス源は、内容的に2つのストレス源に分類することができる。

一つは、より狭い範囲の「家族」の人間関係から生じる「家族内ストレス源」である。問13の次の4項目、(a)家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと、(b)パートナーとの関係で悩んだこと、(d)子ども（継子を含む）との関係で悩んだこと、(e)自分が「家族に理解されていない」と感じたこと、がそれにあたる。この4項目に挙げたことが過去1ヶ月間にあった頻度に従って、「全くなかった」（1点）から「何度もあった」（4点）までの点数を与えて、その平均値を「家族内ストレス源」の尺度にした（信頼性係数 $\alpha = .78$ ）。

もう一つは、直接の家族を越えた、より広い範囲の人間関係から生じる「家族外ストレス源」である。問13のうち、(c)自分または現在のパートナーの元のパートナーとの関係で悩んだこと、(f)自分の親や親戚との関係で悩んだこと、(g)パートナーの親や親戚との関

係で悩んだこと、(h)近所の人や子どもの学校関係の人との関係で悩んだこと、(i)職場での人間関係で悩んだこと、の5項目がそれにあたる。それぞれ過去1ヶ月間にあった頻度に従って、「全くなかった」(1点)から「何度もあった」(4点)の点数を与え、その平均値を「家族外ストレス源」の尺度とした(信頼性係数 $\alpha=.58$ )。

家族内ストレス源と家族外ストレス源の記述統計量を表IV-1に示した(この2つの尺度の詳細についてはV章を参照)。

**表IV-1 家族内・家族外ストレス源の記述統計**

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
家族内ストレス源	112	1.00	4.00	2.30	.86
家族外ストレス源	112	1.00	3.80	1.80	.63

### ①家族内ストレス源

さて、現在のパートナーとの関係や、継子を含む子どもとの関係など、家族内役割に関わる「家族内ストレス源」の多寡と比較的強い関連があるのは、性別、パートナーの年齢、前の結婚での子どもの有無、である(以下、分散分析による検定結果が $p<.10$ であることを基準とした)。

男女別では、男性よりも女性の方が家族内のストレス源を多く感じている(表IV-2)。また、本人の年齢との関連はほとんどないが、パートナーの年齢との関連はかなり強い(表IV-3)。パートナーが最若年層の20歳代で家族内ストレス源の経験度がもっとも低く、パートナーが40歳代前半層でもっとも高い。だが、45歳以上ではやや低くなる。また、前の結婚での子どもが自分とパートナーのどちら(あるいは両方)にあるかという違い別に比較しても、家族内ストレス源の経験度に差がある(表IV-4)。前の結婚での子どもが、パートナーにだけある場合に家族内ストレス源はもっとも高くなり、自分にだけある場合にもっとも低くなる。双方にある場合には、そのほぼ中間の値になる。

男女別に分析してみると、前の結婚での子どもの有無の影響に関しては性別との交互作用があることがわかった(図IV-1)。この男女別のグラフを見ればわかるように、男性においては自分が結婚時に継父・実父どちら(あるいは両方)の立場であっても家族内ストレス源の高さはほとんど変わらないが(分散分析による検定 $F=.15, n.s.$ ; 相関比 $\eta=.10$ )、女性は結婚時に継母であって実母ではなかった場合にとくにストレス源が高くなる傾向がある( $F=3.9, p<.05$ ;  $\eta=.30$ )。つまり、この傾向は女性に特有のものであるようだ。

**表IV-2 男女別・家族内ストレス源の平均値**

本人の性別	平均値	度数	標準偏差
男性	1.99	30	.78
女性	2.41	82	.86
合計	2.30	112	.86

注) 分散分析による検定  $F=5.56, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$

**表IV-3 パートナーの年齢別・家族内ストレス源の平均値**

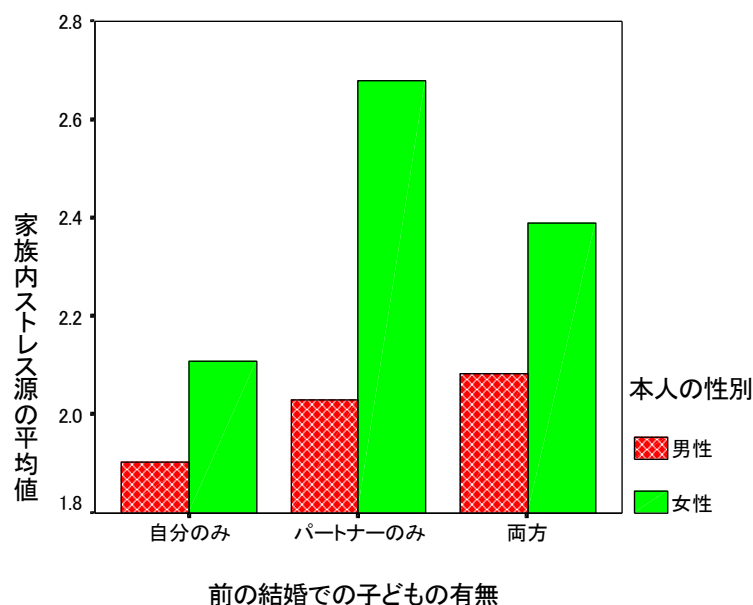
パートナーの年齢	平均値	度数	標準偏差
20-29 歳	1.80	15	.68
30-34 歳	1.98	31	.76
35-39 歳	2.56	31	.83
40-44 歳	2.72	25	.81
45 歳以上	2.20	10	.91
合計	2.30	112	.86

注) 分散分析による検定  $F=5.39, p<.01$ ; 相関比  $\eta=.41$

**表IV-4 前の結婚での子どもの有無別・家族内ストレス源の平均値**

前の結婚での子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
前の結婚の子は自分のみ	2.05	43	.82
前の結婚の子はパートナーのみ	2.56	44	.85
前の結婚の子が両方にある	2.28	25	.83
合計	2.30	112	.86

注) 分散分析による検定  $F=4.17, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.27$



**図IV-1 男女別・前の結婚での子どもの有無別・家族内ストレス源**

## ②家族外ストレス源

家族外のストレス源に関してはどうだろう。直接の家族関係の外側にある人間関係に関するストレスは、性別をはじめとする上記の3変数との関連は小さかった。一方、同居年数と現在のパートナーとの間に子どもがあるかどうかに関連を持っているという点で、家族内ストレスとの違いを見せている。

同居年数の影響について見てみよう(表IV-5)。自分やパートナーの親や親戚、前のパー

トナーとの関係などから生じるストレスフルな出来事は、まだパートナーと完全に同居する段階に至っていない場合にもっとも多く経験される。そして、同居することになって間もない段階（1年未満）ではそれが減少し、その後1年から4年くらいの間に微増したのち、4年目以降にやや少なくなる。基本的には、同居に至るまでの間に、当事者以外の親族・非親族との関係がストレス源となることが多いということがわかる。逆にいえば、こうした周囲との関係をうまく調整することができて初めて同居に至ることができるのだろう。

家族外のストレス源は、現在のパートナーとの間に子どもが生まれている場合の方が、そうでない場合よりも少ないと感じられている（表IV-6）。夫妻のどちらかが子どもを連れて再婚したのちにその夫婦に生まれる子どもを「セメント・ベイビー」と呼ぶことがあり、それによって家族関係が強化されると言われることがある。少なくとも、家族の外側にある人間関係が生み出すストレス源が減退するという面では、そうした効果を認めることができそうだ。

**表IV-5 同居年数別・家族外ストレス源の平均値**

同居年数	平均値	度数	標準偏差
未同居／半同居	2.14	25	.76
1年未満	1.60	21	.55
1-2年未満	1.85	15	.53
2-4年未満	1.86	25	.64
4年以上	1.52	24	.44
合計	1.80	110	.64

注) 分散分析による検定  $F=3.90, p<.01$ ; 相関比  $\eta=.36$

**表IV-6 パートナーとの間の子どもの有無別・家族外ストレス源の平均値**

パートナーとの間の 子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
なし	1.90	74	.64
あり	1.61	38	.56
合計	1.80	112	.63

注) 分散分析による検定  $F=5.70, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$

## (2) ストレス反応と家族関係満足度

ここでストレス反応と言っているのは、抑鬱、不安、身体的症候などの具体的な指標によって測定される、「不快な主観的状态」のことであり、ディストレス (distress) という用語で呼ばれることもある。問 28 の 16 項目に関して、この 1 週間にどのくらい経験したかという質問に対する回答によって測定されている。「全くなかった」(1点) から「ほとんど毎日」(4点) の 4 段階の点数を 16 項目について平均したものである ( $\alpha=.90$ )。

一方、家族関係満足度は、問 29 の 3 項目、(a)自分と子ども(継子を含む)との生活、(b)

パートナーと子ども（継子を含む）との関わり、(c)自分とパートナーとの関係、についての満足度を「不満である」（1点）から「満足している」（4点）までの4段階で尋ね、4項目の平均値を尺度としたものである（ $\alpha = .79$ ）。

ストレス反応と家族関係満足度の記述統計量を表IV-7に示した。これら2つの尺度は、現在の生活への適応状態の程度を、前者は個人の心理・身体の否定的な側面から、後者はとくに家族関係についての肯定的（満足）の側面から測定している。したがって、両者には強い負の相関がある（相関係数  $r = .58, p < .001$ ）。（これら2つの尺度の詳細についてもV章を参照。）

### ①ストレス反応

個人・家族特性に関わる変数のうち、ストレス反応に関わるのは、性別と本人の年齢であった。性別に関しては、家族内ストレス源の場合と同様に、女性の方がストレス反応もやや高い（表IV-8）。また、本人の年齢に関しては、年齢が低い人ほどストレス反応が高く、年齢が高い人ほどストレス反応が低いという傾向が見られた（表IV-9）。

### ②家族関係満足度

家族関係満足度は、ストレス反応とは逆に、女性よりも男性の方が高い（表IV-10）。このほかに、家族関係満足度に影響を与えている個人・家族特性変数は、パートナーの年齢、前の結婚での子どもの有無、の2変数である。この2変数は、前出の家族内ストレス源の場合ときわめて対照的な関連を示している。パートナーの年齢がもっとも若い層で家族関係満足度がもっとも高く、年齢が高くなるにしたがって満足度は低下するが、45歳以上の層では再び満足度が高くなっている（表IV-11）。一方、前の結婚での子どもが自分にだけある場合に家族関係への満足はもっとも高く、パートナーにだけ子どもがある場合にもっとも低くなる傾向がある（表IV-12）。この変数は、家族内ストレス源と裏表の関係にあるようだ（相関係数  $r = -.71, p < .001$ ）。

男女別の分析からは、以前の結婚での子どもの有無の効果は女性のみに見られるものであることがわかった。図IV-2のグラフを見ると、男性の家族関係満足度は、前の結婚での子どもがどちらにいてもほとんど関わりなく一貫して高い（ $F = .35, n.s.; \eta = .16$ ）のに対して、女性は結婚前にパートナーにのみ子どもがいた場合にとくに低くなる（ $F = 4.06, p < .05; \eta = .31$ ）。これは、家族内ストレス源に関する分析結果と平行な、女性のみに関連する顕著な現象だと言えるだろう。

**表IV-7 ストレス反応・家族関係満足度の記述統計**

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
ストレス反応	106	1.00	3.63	1.96	.59
家族関係満足度	108	1.00	4.00	2.91	.83



**表IV-8 男女別・ストレス反応の平均値**

本人の性別	平均値	度数	標準偏差
男性	1.79	29	.55
女性	2.03	77	.60
合計	1.96	106	.59

注) 分散分析による検定  $F=3.64, p<.10$ ; 相関比  $\eta=.18$

**表IV-9 本人の年齢別・ストレス反応の平均値**

本人の年齢	平均値	度数	標準偏差
20-29 歳	2.24	18	.67
30-34 歳	2.02	38	.54
35-39 歳	1.89	26	.56
40-44 歳	1.78	16	.53
45 歳以上	1.66	8	.68
合計	1.96	106	.59

注) 分散分析による検定  $F=2.19, p<.10$ ; 相関比  $\eta=.28$

**表IV-10 男女別・家族関係満足度の平均値**

本人の性別	平均値	度数	標準偏差
男性	3.24	29	.81
女性	2.78	79	.81
合計	2.91	108	.83

注) 分散分析による検定  $F=6.72, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.24$

**表IV-11 パートナーの年齢別・家族関係満足度の平均値**

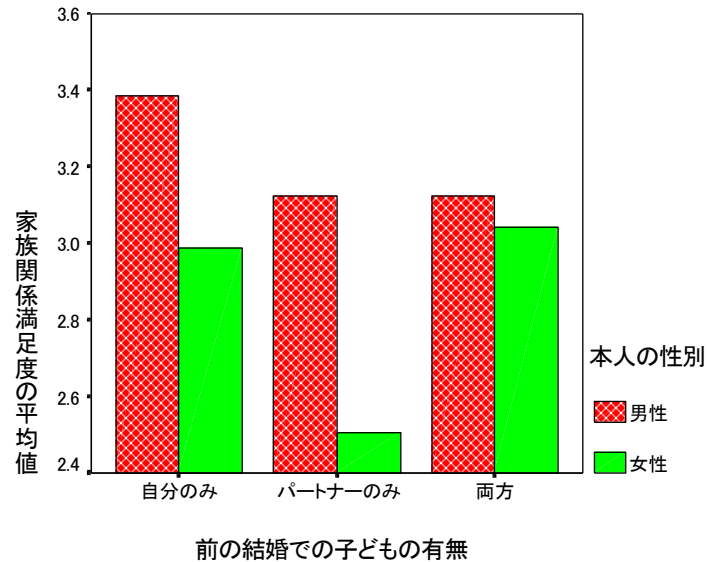
パートナーの年齢	平均値	度数	標準偏差
20-29 歳	3.53	15	.59
30-34 歳	3.08	30	.75
35-39 歳	2.63	31	.82
40-44 歳	2.52	22	.84
45 歳以上	3.17	10	.72
合計	2.91	108	.83

注) 分散分析による検定  $F=5.53, p<.001$ ; 相関比  $\eta=.42$

**表IV-12 前の結婚での子どもの有無別・家族関係満足度の平均値**

前の結婚での子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
前の結婚の子は自分のみ	3.11	41	.81
前の結婚の子はパートナーのみ	2.62	43	.87
前の結婚の子が両方にある	3.07	24	.68
合計	2.91	108	.83

注) 分散分析による検定  $F=4.56, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.28$



図IV-2 男女別・前の結婚での子どもの有無別・家族関係満足度

### (3) まとめ

最近の全国調査データの分析からは、男性の再婚者はストレス反応が低い、女性の再婚者はストレス反応が高いこと（稲葉, 2002）や、継子との関係をもつ場合でも女性にだけ家族生活ストレイン（緊張）が高いこと（西村, 2001）が示唆されている（Ⅱ章の表Ⅱ-1を参照）。継父に比較して継母のストレスがとくに高いことは米国の諸研究からも明らかになっており、母性を強調する社会規範が根強いこと、継父よりも継母の方が継子の実親との競合関係に巻き込まれやすいことなどがその要因と考えられている（Nielsen, 1999）。今回の調査からもこの点でのジェンダー差（男女差）が確認された。家族関係から生じるストレスや満足に関する分析は、現在のパートナーとの関係以前に出産や子育ての経験がない女性が継母という役割を担うことが、もっとも大きなストレス状況（家族関係に関する悩みや不満）を生み出すことを示唆している。男性にはこのような傾向はみられない。

家族関係のストレスや満足はパートナーの年齢とも関係している。ただし、パートナーが40歳前後で家族関係のストレスが高まり、満足が低下するのはステップファミリーに固有の現象なのかどうかは検討の余地がある。

もうひとつ興味深いのは、現在のパートナーとの間に子どもがいることが、自分を取り囲むやや広い社会的関係のネットワーク（親族、近隣・子どもの学校、職場、元配偶者を含む）との関係から生じるストレス（悩み）を減少させるようにみえる点である。現在のパートナーとの間に子どもが生まれることは、少なくとも親の立場から見れば、社会（あるいは「世間」と言い換えてもいいだろう）に対する家族の安定をもたらすようだ。もちろん、一時点の調査データによって子どもの出産がもたらす家族内・家族外の人間関係の変容過程を捉えることはできない。この点は、時系列データや個別インタビュー・データなどによってさらに追究すべき論点である。

## 2. パートナーとの関係 — サポート・葛藤・同伴行動 —

次に、パートナーとの関係について、①パートナーからのサポート、②パートナーとの葛藤、および③パートナーとの同伴行動という3側面から検討してみたい。

ここでパートナーからのサポート（support=支援・支持）と呼んでいるのは、パートナーが「心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」、「能力や努力を高く評価してくれる」、「助言やアドバイスをしてくれる」（問10）の3項目について、自分のパートナーについての回答を、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）までの4段階で得点化し、それを平均したものである（信頼性係数 $\alpha=.80$ ）。この点数が高いことは、情緒的・心理的にパートナーに支えられ、肯定されていると認知していることを示している（これら3つの変数については、VI章を参照）。

一方、パートナーとの葛藤（conflict=対立・衝突）とは、パートナーが「イライラさせる」、「いろいろと面倒をかける」、「文句や小言をいう」（同じく問10）の3項目について、「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（4点）までの4段階で得点化し、それを平均したものである（ $\alpha=.72$ ）。この尺度の得点が高いことは、パートナーとの関係が自分にとって否定的な側面をもつと認知されていることを示している（しかし、その関係が重要でないという意味ではなく、むしろ重要であるからこそこの得点が高くなるという場合もあるだろう）。

同伴行動は、パートナーと一緒に行動したり、何かを楽しんだりする程度、つまりコンパニオンシップ（companionship=伴侶性）の程度を示す測度である。ショッピング、旅行・ドライブ、友人とのカップル単位の交際、共通の趣味という、問11の4項目について「そのようなことはない」（1点）から「よくある」（4点）までの4段階で点数化してその平均値を求めた（ $\alpha=.77$ ）。

**表IV-13 パートナーとの関係についての変数の記述統計**

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
パートナーからのサポート	113	1.00	4.00	3.32	.70
パートナーとの葛藤	113	1.00	4.00	2.27	.77
パートナーとの同伴行動	112	1.00	4.00	2.98	.69

以上3つの変数についての記述統計量を表IV-13に示した。ステップファミリーメンバーのうち、パートナーからの（情緒的な）サポート、パートナーとの葛藤、パートナーとの同伴行動が多いのはどのような条件にある人たちなのだろうか。先の7つの要因（性別、本人とパートナーの年齢、同居年数、結婚年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無）を検討してみた。その結果、パートナーからのサポートは、同居年数、結婚年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無の4つの変数と関連があった。また、パートナーとの同伴行動は、同居年数、前の結婚での子どもの有無、現在のパートナーとの子どもの有無の3つの変数と関連があった。ただし、

パートナーとの葛藤についてはどの変数ともほとんど関連がみられなかった。パートナーとの葛藤の程度は、取り上げた個人・家族特性とは別の要因に規定されているようだ。そこで以下では、パートナーからのサポートと同伴行動についてのみ詳しく取り上げよう。

### (1) パートナーからのサポート

まず、同居年数別に、パートナーからのサポートについて見てみよう（表IV-14）。パートナーからのサポートの程度は、（まだ）同居生活をしていないグループと同居年数1年以上2年未満のグループでやや低く、1年未満と4年以上のグループで高くなるというM字形の変化を見せる。一方、結婚年数による違いに関しては（表は示さないが）、未入籍・非入籍のグループではサポートが高くなっている点が異なるが、結婚1～2年でパートナーからの情緒的サポートが減少し、その後再度上昇したのちにさらに減少に転じる点は同居年数のパターンと同様である（ $F=2.68, p<.05; \eta=.30$ ）。いずれにしても、結婚前後の時期には、（同居していない場合を除いて）パートナーからの支えを感じることが多いが、その直後に減少、さらに増加というように、変化の波を経験するように見える。

また、パートナーからのサポートの程度は、以前の結婚での子どもや現在のパートナーとの子どもがいるかどうかという（継）親子関係の差異によっても変化する。パートナーからのサポートの程度は、前の結婚での子どもが自分にはなく相手にだけある場合にもっとも低く、自分とパートナーの双方にある場合にもっとも高い（表IV-15）。ただし、この傾向は女性だけにあてはまるものであり、男性にはあてはまらない。図IV-3のグラフを見ると、男性の場合は、前の結婚での子どもが自分のみにある場合にパートナーからのサポートがもっとも少なく、双方にある場合にもっとも多いと知覚されている（ $F=2.67, p<.10; \eta=.41$ ）。女性では、相手にのみ前の結婚での子どもがある場合にパートナーからのサポートがもっとも少ないと感じられ、双方にある場合にもっとも多いと認知されている（ $F=3.84, p<.05; \eta=.30$ ）。つまり、カップルの男女双方に前の結婚での子どもがある場合にはパートナー間の情緒的サポートが相対的に高くなるが、男性側にのみ子どもがいるカップルの組み合わせでは相互の情緒的支え合いは低くなる傾向にある。女性側にのみ子どもがいる場合はその中間に位置づけられる。

現在のパートナーとの間に子どもがあるかどうかという点も、男女で傾向が異なる。回答者全体で見ると、現在のパートナーとの間に子どもがいるグループの方が、いないグループよりもサポートが多い（表IV-16）。しかし、男女別に比較したグラフ（図IV-4）を見ると、男性ではパートナーとの間の子どもの有無にかかわらずパートナーからの情緒的サポートの程度にあまり差異がないが（ $F=.64, n.s.; \eta=.15$ ）、女性ではパートナーとの間に子どもがあるグループの方がパートナーからのサポートが少ないと感じる傾向が顕著である（ $F=14.3, p<.001; \eta=.39$ ）。この結果から見る限り、現在のパートナーとの間の子どもの存在は男性パートナーからのサポートをむしろ減じているようだ。この点も女性に特有の現象であり、ジェンダー差が確認された。

**表IV-14 同居年数別・パートナーからのサポートの平均値**

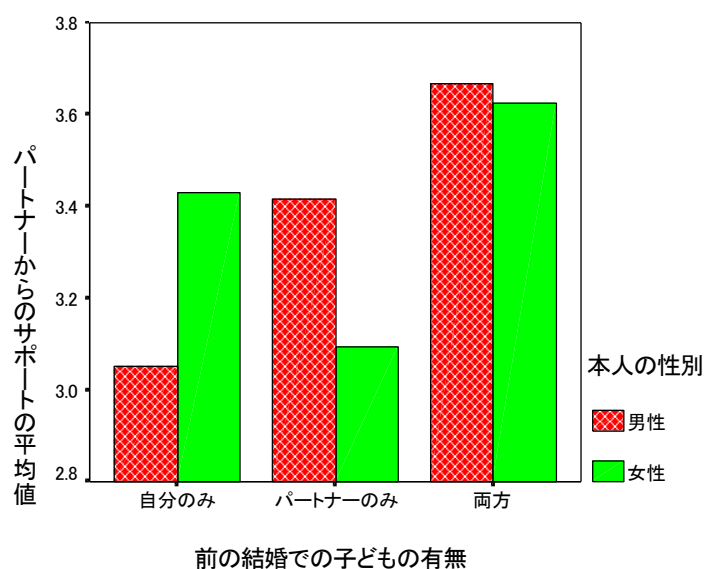
同居年数	平均値	度数	標準偏差
未同居／半同居	3.22	26	.84
1年未満	3.57	21	.58
1-2年未満	2.98	15	.61
2-4年未満	3.56	25	.52
4年以上	3.18	24	.76
合計	3.32	111	.70

注) 分散分析による検定  $F=2.82, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.31$

**表IV-15 前の結婚での子どもの有無別・パートナーからのサポートの平均値**

前の結婚での子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
前の結婚の子は自分のみ	3.32	44	.68
前の結婚の子はパートナーのみ	3.15	44	.79
前の結婚の子が両方にある	3.64	25	.43
合計	3.32	113	.70

注) 分散分析による検定  $F=4.07, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.26$

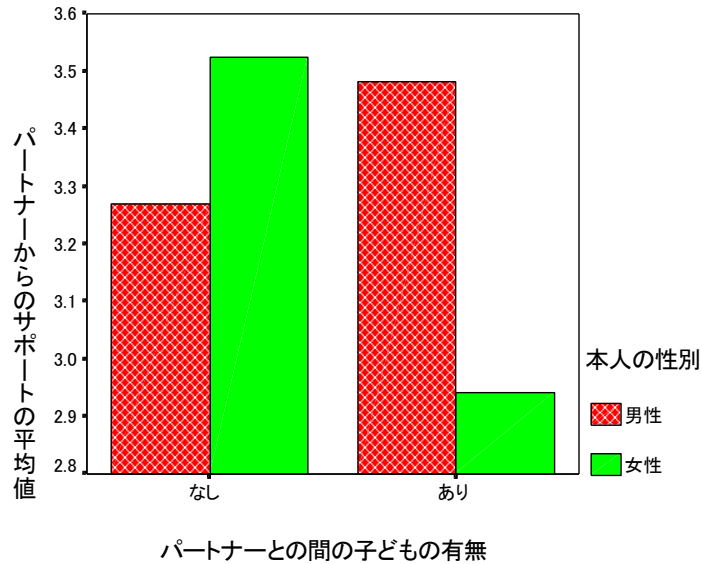


**図IV-3 男女別・前の結婚での子どもの有無別・パートナーからのサポート**

**表IV-16 パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーからのサポートの平均値**

パートナーとの間の子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
なし	3.45	75	.60
あり	3.07	38	.82
合計	3.32	113	.70

注) 分散分析による検定  $F=7.98, p<.01$ ; 相関比  $\eta=.26$



図IV-4 男女別・パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーからのサポート

## (2) パートナーとの同伴行動

パートナーとの同伴行動も、同居年数と関連があった。同居年数の違いによって M 字形をなしていたパートナーからのサポートの場合と比較すると、パートナーとの同伴行動は、同居年数 1～2 年グループの谷間はなくなり、非同居グループと同居 4 年以上グループで同伴行動がやや少なくなるという台形状の変化を示している（表IV-17）。

子どもの構成別では、パートナーには前の結婚での子どもがいたが自分にはいなかったグループで同伴行動がもっとも少なく、自分とパートナーの両方に前の結婚での子どもがいるグループでもっとも多い（表IV-18）。ただし、この点についても男女間に異なるパターンが表れる。男女別に前の結婚での子どもが夫婦のどちらにあるかによってパートナーとの同伴行動がどう違うかを比較した図IV-5 のグラフは、男女間に見られる傾向が対照的であることを示している。男性の場合、パートナーにのみ以前の結婚での子どもがあるグループでもっとも同伴行動が多くなっているが、3つのグループ間の差は大きくない（ $F=.52, n.s.; \eta=.19$ ）。それに対して女性の場合は、逆にパートナーにのみ以前の結婚での子どもがあるグループでもっとも同伴行動が少なくなっており、他の2つのグループとは統計的にも有意な差がある（ $F=4.75, p<.05; \eta=.33$ ）。

さらに、現在のパートナーとの間に子どもがいないグループの方が、いるグループよりも同伴行動が多いという傾向も見出された（表IV-19）。そして、この点も女性のみにも顕著な傾向である。図IV-6 のグラフに見られるように、男性では現在のパートナーとの間の子どものあるかないかによる同伴行動の違いはほとんどないが（ $F=.13, n.s.; \eta=.07$ ）、女性ではパートナーとの間に子どもがないグループの方が同伴行動の平均値が高くなっている（ $F=6.48, p<.05; \eta=.27$ ）。

これらは、いずれもパートナーからのサポートに関する分析結果（前述）と共通する傾向である。とくに女性で、パートナーのみに前の結婚の子どもがいるグループ、およびパートナーとの間に子どもがいるグループが、パートナーとの共同的な関係がやや弱いという回答をしがちであった。父子関係がすでに存在しているところに、既存の親子関係を持たずに後から加わることになる継母の場合には、パートナーとのカップル単位の行動の機会が十分に作れないという問題に直面しやすいのかもしれない。新しいパートナーとの間に子どもが生まれることも、単純にステップファミリーの家族の絆を強めるというわけではないようだ。そして、カップルの間に子どもが誕生し、その子の子育てに関わっていくことによる家族関係の変化の影響を受けやすいのも女性の方であることが示唆されている。

**表IV-17 同居年数別・パートナーとの同伴行動の平均値**

同居年数	平均値	度数	標準偏差
未同居／半同居	2.67	25	.63
1年未満	3.19	21	.47
1-2年未満	3.15	15	.68
2-4年未満	3.15	25	.58
4年以上	2.82	24	.93
合計	2.98	110	.70

注) 分散分析による検定  $F=2.77, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.31$

**表IV-18 前の結婚での子どもの有無別・パートナーとの同伴行動の平均値**

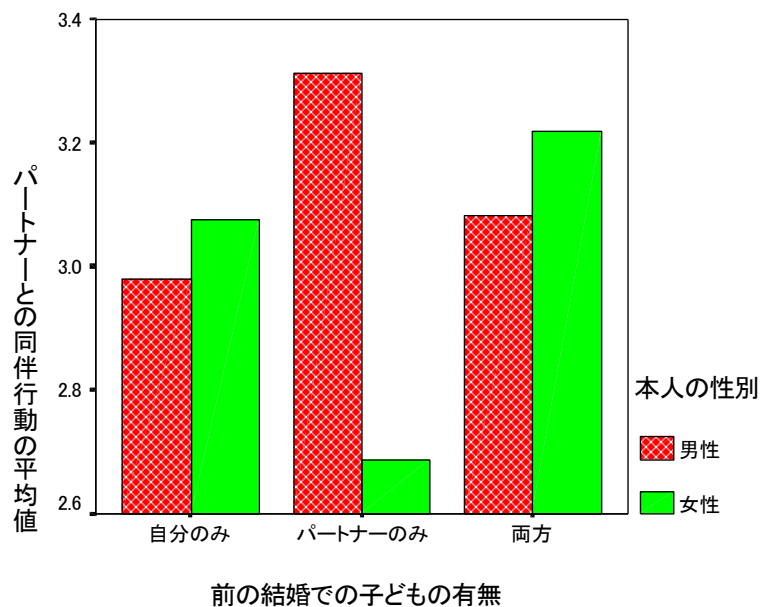
前の結婚での子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
前の結婚の子は自分のみ	3.05	43	.71
前の結婚の子はパートナーのみ	2.80	44	.74
前の結婚の子が両方にある	3.17	25	.50
合計	2.98	112	.69

注) 分散分析による検定  $F=2.68, p<.10$ ; 相関比  $\eta=.22$

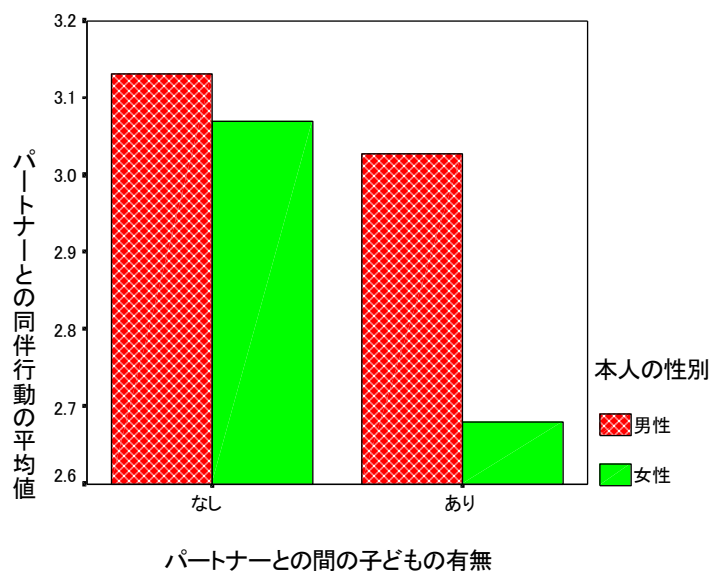
**表IV-19 パートナーとの間の子どもの有無別・パートナーとの同伴行動の平均値**

パートナーとの間の子どもの有無	平均値	度数	標準偏差
なし	3.09	74	.54
あり	2.76	38	.89
合計	2.98	112	.69

注) 分散分析による検定  $F=5.75, p<.05$ ; 相関比  $\eta=.22$



図IV-5 男女別・前の結婚での子どもの有無別・同伴行動



図IV-6 男女別・パートナーとの間の子どもの有無別・同伴行動

### (3) まとめ

パートナーからのサポートや同伴行動の程度自体は、男女によって差は見られなかった。しかし、(家族内ストレス源や家族関係満足度と同様に) パートナーからの肯定的なサポートや同伴行動の程度は、前の結婚での子どもの有無に関連している。現在のパートナーとの関係以前に子どもを持った経験がなく、初めて継母となった女性回答者は、パートナー



からの情緒的なサポートが少なく、同伴行動も少ないと認知する傾向がある。だが、同じ立場の男性（継父）にはそのような傾向は見られない。そこに男女差が存在する。

これまでの分析結果を総合すると次のように言えるだろう。ステップファミリーには多様な家族状況がありえるが、父子関係がすでに存在しているところに新たに継母という立場で未経験の子育てに直面する状況がもっとも大きな困難を生じやすい。その場合に、パートナーにもその困難が理解されず、支援されていないと感じる傾向が強い。少なくとも今回の調査データからは、継母子関係およびそのパートナー関係にもっとも大きな心理的負荷が課されることが示されている。一方、現在のパートナーとの間に新たに子どもが生まれることは、パートナー間の葛藤を増やすことはないにせよ、家族関係から生じるストレスを軽減することにもならない。むしろ、再婚後、新たに子どもをもった女性たちは、パートナーからの情緒的サポートや同伴行動が少ないと感じるようになる可能性がある。

同じような家族的位置についても、男性（継父）の場合には、家族関係において、それほど難しい立場に置かれることはあまりないように見える。少なくとも、ストレスを感じる程度は女性ほど強くない。子育てや家事など家庭内のことに関わる程度が男女で大きく異なっていることを反映しているのだろう。いずれにしても、家族の外側からのサポート（例えば、共通の経験をもつ当事者同士の情緒的なサポート）をもっとも痛切に必要としているのは、上記のような状況にある女性（継母）たちであると言えるだろう。

### **3. サポート・ネットワークとパートナー関係のストレスへの影響**

#### **(1) 家族についての悩み相談ネットワーク**

では次に、パートナー以外の人間関係（それが直接対面を基盤としたものであれ、主に電子メールのようなインターネットを使用して交流するものであれ）からの情緒的サポートに目を転じよう。問 15 では、家庭内の問題について悩みを相談したり、グチを言ったりする相手を 4 人まで想定してもらい、それらの相手（A さんから D さん）について、一連の質問をしている。

この相談ネットワークについては、まず次の 2 変数を取り上げる。①最大 4 人まであげてもらった相談相手の数を表すネットワーク規模、②A さんから D さんの 4 人相互に知り合い関係があるかどうかによって算出した「ネットワーク密度」<sup>1</sup>である。ネットワーク密度は、4 人全員が相互に知り合いならば 1、知り合いが一人もいなければ 0 の値をとる。つまり、回答者にとって悩みの相談相手となっている（最大）4 人の人たち同士が、回答者本人との関係とは別に、相互にどの程度連結しているかを示す尺度である（詳しくは、安田, 1997 および野沢, 1999a 参照）。

ネットワークの規模と密度については、男女別の平均値などを表 IV-20 に示した。最大 4 人までのネットワークの規模は、調査回答者の中の女性の平均値の方が男性の平均値よりも大きく（ $F=37.29$ ,  $p<.001$ ;  $\eta=.50$ ）、女性は男性の 2 倍に近い相談相手をもっている。すでに見たように、対象となった女性は家族に関する悩み（家族内ストレス源）も多いが、

悩みの相談相手（サポート源）も多いのである。ネットワークの密度自体は、男女間に差がない。しかし、女性に関してはネットワーク規模と年齢とが負の相関（相関係数  $r=-.25$ ,  $p<.05$ ）を示し、年齢が低いほど家族関係の悩みを相談する相手が多いという傾向があるのに、男性に関してはそのような傾向は弱い（ $r=-.12$ , n.s.）という点に男女差が存在する。

4人の相談相手に関しては、①血縁関係がある、②長距離（2時間以上かかる場所）に住んでいる、③同性である、④ほぼ同年齢（上下3歳程度）である、⑤週1回以上話す（電話を含む）、⑥再婚家族経験者である（本人か親が再婚した）、⑦家族観が似ている、⑧週1回以上メールをやりとりする、という8つの条件に合う人が何人含まれているかを算出し、8つの変数を作った。こうした相談相手ネットワークを構成する人々の特性についても、男女で差が見られる（表IV-21）。全体に相談相手が多いので、いずれのタイプの相談相手も女性の方が多く保持している。

**表IV-20 男女別・ネットワーク規模と密度の平均値**

本人の性別	ネットワーク	
	規模(4人まで)	密度
男性	平均値	1.83
	度数	30
	標準偏差	1.58
女性	平均値	3.37
	度数	83
	標準偏差	1.01
合計	平均値	2.96
	度数	113
	標準偏差	1.36

注) ネットワーク規模：分散分析による検定  $F=37.29$ ,  $p<.001$ ; 相関比  $\eta=.50$   
 ネットワーク密度：分散分析による検定  $F=.33$ ,  $p=.57$ (n.s.); 相関比  $\eta=.07$

**表IV-21 男女別・相談相手（4人まで）に含まれる諸特性保持者数の平均値**

	男性	女性	F 値	
相談相手(A-D)のうち血縁者数	.27	.70	7.97	**
相談相手(A-D)のうち長距離者数	.37	1.13	10.51	**
相談相手(A-D)のうち同性数	.77	3.04	86.13	***
相談相手(A-D)のうち同年齢数	.90	2.20	32.48	***
相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数	.97	1.45	2.71	
相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数	.37	.81	4.75	*
相談相手(A-D)のうち家族観類似数	.77	2.18	31.02	***
相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数	.50	1.39	11.21	**

注) 分散分析による検定結果 \*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ .

## (2) 相談ネットワークの特性とパートナー関係

では、相談相手のネットワークとパートナー間のサポートとの間にはどのような関連があるのだろうか。多くの相談相手をもつ人は、パートナーからも情緒的なサポートを多く得ているのだろうか。それとも、パートナーと支援的な関係が築けていない人ほどそれ以外の相談相手が多いのだろうか。パートナー関係に関する3変数とネットワークに関する10変数との関連（相関係数）を男女別に検討してみた。

女性に関する結果（表IV-22）をみると、ネットワーク規模およびメールによる高頻度接触者数、同性者数、同年齢者数、再婚家族経験者数という（相談相手の同質性を示す）一連の変数とパートナーとの同伴行動との間に正の相関がある。このような特徴の相談相手をもつ回答者ほどカップル単位の行動が多くなっている。メールによる高頻度接触者数、同性者数が多い人は、パートナーからの情緒的サポートが多い人でもある。逆に、パートナーとの葛藤が多い人は、同性の相談相手が少ないという傾向もある。

**表IV-22 ネットワーク特性とパートナー関係変数の相関（女性のみ）**

	パートナーからのサポート	パートナーとの葛藤	パートナーとの同伴行動
ネットワーク規模（4人まで）	.09	-.07	.28*
ネットワーク密度	.05	.17	.08
相談相手(A-D)のうち血縁者数	.07	-.05	-.05
相談相手(A-D)のうち長距離者数	.11	-.10	.07
相談相手(A-D)のうち同性数	.19 <sup>†</sup>	-.23*	.27*
相談相手(A-D)のうち同年齢数	-.01	-.10	.25*
相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数	.11	.16	.18
相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数	.10	-.10	.19 <sup>†</sup>
相談相手(A-D)のうち家族観類似数	.06	.01	.12
相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数	.19 <sup>†</sup>	-.04	.32**

\*\*相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

<sup>†</sup>相関係数は 10% 水準で有意（両側）

**表IV-23 ネットワーク特性とパートナー関係変数の相関（男性のみ）**

	パートナーからのサポート	パートナーとの葛藤	パートナーとの同伴行動
ネットワーク規模（4人まで）	.09	-.27	.17
ネットワーク密度	.57 <sup>†</sup>	-.56 <sup>†</sup>	.10
相談相手(A-D)のうち血縁者数	.10	-.08	.14
相談相手(A-D)のうち長距離者数	-.09	.03	.01
相談相手(A-D)のうち同性数	.10	-.39*	-.03
相談相手(A-D)のうち同年齢数	-.10	-.32 <sup>†</sup>	.12
相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数	.06	-.32 <sup>†</sup>	.16
相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数	-.12	.02	.20
相談相手(A-D)のうち家族観類似数	.29	-.09	.38*
相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数	-.07	-.01	.25

\*相関係数は 5% 水準で有意（両側）

<sup>†</sup>相関係数は 10% 水準で有意（両側）

一方、男性に関しては、異なる傾向が表れている（表Ⅳ-23）。密度が算出可能な有効ケース数が少ない（ $n=10$ ）ことには留意しなければならないが、ネットワーク密度がパートナーからの情緒的サポートとの間に強い正の相関があり、逆にパートナーとの葛藤の間には強い負の相関があるという点が男性に特徴的である。そして、女性回答者に特徴的だった一連のネットワーク特性と同伴行動との正の相関は、男性にはほとんど見られない。男性の場合には、それらに代わって、家族観が類似している相談相手を多く持っているほどパートナーとの同伴行動が多くなるという独自の傾向がある。そして、同性・同年齢で会話頻度の高い（同質的で強い関係にある）相談相手を多く持つ回答者は、パートナーとの葛藤のレベルが低いという、負の相関が顕著である。

男女ともに、パートナー間の援助性がそれ以外の情緒的サポート・ネットワークと競合しているのではない、という点で共通している。つまり、パートナーがサポートしてくれないからそれ以外の人たちに相談のネットワークを広げるというわけではない。むしろ両者は相互に促進し合っているとと言える。ただし、女性は同質的で大きな強い紐帯のネットワークを持つことが「パートナーとの同伴行動の高さ」と関連するのに対して、男性では同質的で連帯した強い紐帯のネットワークを持つことが「パートナーとの葛藤の少なさ」に関連する。このジェンダー差も興味深い。

### (3) パートナー関係とネットワークとストレス

最後に、パートナーとのサポート関係および相談ネットワーク特性が、回答者のストレス状況にどのように関連しているかを検討してみたい。これも男女別に相関係数を見てみよう。

女性に関する結果（表Ⅳ-24）は、パートナー関係の3変数であるサポート、葛藤、同伴行動のいずれもが、心理的適応状態に関する3変数（家族外ストレス源を除く）と関連が強いことを示している。パートナーからの情緒的サポートや同伴行動が多く、葛藤が少ないほど、家族内ストレス源やストレス反応が小さく、家族関係満足度が大きくなる傾向が顕著である。つまり女性に関しては、パートナーとの肯定的・否定的関係性が全体的に家族関係の悩みや不満を規定している。

それ以外では、相談ネットワークに再婚家族経験者が多く含まれているほど、家族内ストレス源が少なく、家族関係満足度が高いという傾向が存在する。年齢・性別などの一般的な同質性ではなく、特別な家族経験を共通に持っているという点での同質性を基盤とした相談相手を多く持つということこそが、ステップファミリーの女性たちの心理的適応を促進しているようにみえる。さらに、ネットワーク密度と家族内ストレス源との弱い負の相関、頻繁にメール交換する相談者の数と家族関係満足度との弱い正の相関もある。要するに、パートナーとの間に支援的・伴侶的な関係を築き、ステップファミリー的家族経験をもつ人を含む、より連帯した（相互連結した）相談相手のネットワークを持っている女性たちが、現在の家族状況にうまく適応している。

**表IV-24 パートナー・ネットワーク特性とストレス関連変数の相関（女性のみ）**

	家族内 ストレス源	家族外 ストレス源	ストレス 反応	家族関係 満足度
パートナーからのサポート	-.36**	-.14	-.33**	.54**
パートナーとの葛藤	.35**	.20 <sup>†</sup>	.25*	-.39**
パートナーとの同伴行動	-.37**	-.07	-.34**	.54**
ネットワーク規模（4人まで）	.01	.09	-.07	.14
ネットワーク密度	-.23 <sup>†</sup>	-.16	-.10	.11
相談相手(A-D)のうち血縁者数	.02	-.01	.04	.08
相談相手(A-D)のうち長距離者数	.02	.13	-.05	.01
相談相手(A-D)のうち同性数	-.01	-.07	-.13	.13
相談相手(A-D)のうち同年齢数	-.06	.02	-.18	.09
相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数	-.09	.03	-.09	.17
相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数	-.23*	-.08	-.11	.23*
相談相手(A-D)のうち家族観類似数	-.10	.04	-.17	.05
相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数	-.13	.15	.06	.19 <sup>†</sup>

\*\* .相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\* .相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

<sup>†</sup> .相関係数は 10% 水準で有意 (両側)

**表IV-25 パートナー・ネットワーク特性とストレス関連変数の相関（男性のみ）**

	家族内 ストレス源	家族外 ストレス源	ストレス 反応	家族関係 満足度
パートナーからのサポート	-.31 <sup>†</sup>	-.11	-.20	.28
パートナーとの葛藤	.55**	.37*	.57**	-.37 <sup>†</sup>
パートナーとの同伴行動	-.16	.25	.12	-.07
ネットワーク規模（4人まで）	-.13	-.06	.04	.08
ネットワーク密度	-.64*	-.35	-.16	.45
相談相手(A-D)のうち血縁者数	-.23	-.22	.28	.15
相談相手(A-D)のうち長距離者数	.15	-.13	-.13	-.10
相談相手(A-D)のうち同性数	-.21	-.07	-.11	.36 <sup>†</sup>
相談相手(A-D)のうち同年齢数	.02	.10	-.11	-.17
相談相手(A-D)のうち週1回以上話す数	-.04	-.16	-.12	.05
相談相手(A-D)のうち再婚家族経験者数	.19	.09	.17	-.24
相談相手(A-D)のうち家族観類似数	-.02	.01	-.02	.06
相談相手(A-D)のうち週1回以上メールする数	.01	.23	.09	-.17

\*\* .相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

\* .相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

<sup>†</sup> .相関係数は 10% 水準で有意 (両側)

男性についての分析結果に眼を転じてみると、ここでも女性との差異が存在する（表IV-25）。パートナーとの関係については、パートナーとの葛藤の程度のみが、4つのストレス関連変数のすべてととくに強い相関を示している。パートナーとの葛藤の程度が高いと、家族内ストレス源、家族外ストレス源、ストレス反応が高くなり、家族関係満足度は低くなる。しかし、女性の場合と比較すると、パートナーからの情緒的サポートや同伴行動との相関は相当に小さくなっている。つまり、男性回答者の場合は、家族関係の悩みや不満

の大きさが、パートナーからの否定的な評価や対立的な働きかけによって規定されており、パートナー間の援助性・共同性など肯定的な側面それ自体はあまり影響していない。

男性は、ネットワーク密度が家族内ストレス源の程度と強い負の相関を示している点も特徴的である。やはりネットワーク密度を算出できるケース数が少ない（ $n=10$ ）ことから確定的なことは言えないが、ネットワーク密度と同性（男性）相談相手数との間に強い正の相関がある（ $r=.67, p<.05$ ）ことを考慮に入れば、男同士の相談仲間のような連帯が生まれることが、家族内の悩み（ストレス）を軽減する効果をもつのかもしれない。

ネットワーク密度と家族内ストレス源との間の負の相関は、男性ほどではないが女性の場合にも存在していた（表IV-24）。ネットワーク密度の心理的効果については、離婚を経験した女性を対象とした米国の研究が、密度の低いネットワークを持っていると離婚後の生活への適応が促進されることを示唆している（Wilcox, 1981）。また、一般の母親を対象とした最近の日本の研究は、リスクを抱えた子育て状況にある場合、ネットワークの密度が中程度のときにストレス（育児不安）が軽減されるという知見を導いている（松田, 2001）。しかし、そのようなメカニズムは、非通念的・非伝統的な家族構造・家族状況にある親たちには必ずしもあてはまらないのかもしれない（春日, 1989; 石川, 1995 を参照）。つまり、ステップファミリーのように社会的に少数派である場合には、特別な家族経験の共有・理解ができる連帯した相談相手のネットワークを形成し、そのメンバー間で独自の家族意識や価値観を創出し共有することこそが重要であり、心理的適応効果をもたらすのではないだろうか（野沢, 2001）。しかし、このような効果が生み出される詳しいメカニズムについては、さらなる探究が必要である。

#### (4) まとめ

アメリカの全国調査データ（NSFH 1987-88）を分析した研究（Marks & McLanahan, 1993）は、ステップファミリーの母親や父親たちが親族や非親族（友人など）と交換するサポートの量は伝統的な家族の場合とさほど変わらないことを示唆している。今回の私たちの調査設計では他のタイプの家族形態（家族構造）との比較はできない。しかし、相対的に強いストレス下にあると見られる今回の女性回答者の場合も、約3人に2人（63.9%）が4人以上の相談相手を持っており、情緒的サポート・ネットワークは比較的大きいように思える（ただし、男性は4人に1人が相談相手を全く持っていない）。また、今回の調査の回答者は、他の一般的な調査データ（日本家族社会学会・全国家族調査研究会, 2000; 石原 1999）と比べると、男女ともパートナー（配偶者）からの情緒的サポートがかなり高い人たちでもある。調査の対象となったステップファミリー・メンバーは、決して社会的孤立者ではなく、一定のサポート源を保持している人たちである。

本章での分析によれば、ステップファミリーのパートナー同士の援助的・同伴的な関係は、パートナー以外の相談ネットワークと競合するわけではない。その点、既婚女性一般を対象とした調査結果（野沢, 1999b）と概ね一致している。むしろ、より大きく、連帯性

と同質性が高いネットワークは、パートナー間の援助的・伴侶的関係の強さと両立しているように見える。そうしたネットワークをもつ場合、女性ではパートナーとの間に同伴行動が多く、男性ではパートナーとの葛藤が少ない。

やはりアメリカの既存研究 (Kurdek, 1989) が示唆しているように、初婚・再婚の別を問わず、心理的ストレス (ディストレス) に対して一貫して大きな影響をもつのがパートナーからのサポートであることは、今回の分析でも確認された。ただし、男性と女性では、影響の仕方が異なるようだ。女性の場合は、パートナーとの肯定的・否定的関係性と同伴行動のすべてが、家族内ストレス源の多さやストレス反応の大きさ、家族関係満足度に影響を与えているが、男性の場合は、とくにパートナーとの葛藤という否定的な関係性のみが、ストレス源の多さ、ストレス反応の高さ、家族関係満足度に影響を与えていた。男性にとっては、パートナー間の衝突や対立こそが心理的ストレスと深く関連している。

さらに相談ネットワークについての分析結果は、(とくに女性に関して) 同じような家族経験をしている同質的な相談相手がいるという紐帯の質に関わる要因が、そして (とくに男性に関して) 密度というネットワークの構造に関わる要因が、ステップファミリーにおける親たちの心理的適応状態に影響を与えていることを示唆している。再婚家族を経験している相談相手が多く、ネットワーク密度が高いほど、家族内ストレス源が低減し、家族関係満足度が高まる傾向があった。サポート・ネットワークの同質性と連帯性が、どのような意味で、どのようなプロセスによって、ステップファミリーの家族生活適応に効果をもたらすのかという問題は、今後の重要な研究課題のひとつである。

### 【注】

<sup>1</sup> ネットワーク密度 (density) は、実際に存在する関係数を最大可能な関係数で除して求める。具体的には、問 15 で「家族についての悩みやグチを話せる方」として挙げた人数 (最大 4 人) を  $n$  人とし、問 16 でその  $n$  人相互の組み合わせのうち「交流がある」または「親しく交流している」と回答された数 (実際に存在する関係数) を  $t$  とすると、ネットワーク密度  $= t / \{ n ( n - 1 ) / 2 \}$  という計算式によって求められる。ただし、ネットワークの規模 ( $n$ ) が極端に小さいと密度の意味概念が捉えにくくなるので、今回の分析からは  $n$  が 2 以下のケースを除外している。

### 【参考文献】

稲葉昭英 (2002) 「結婚とディストレス」『社会学評論』53 (2), 69-83.

石原邦雄 (編) (1999) 『妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク』東京都立大学都市研究所 [復刻版: 東京都立大学出版会 2001].

石川准 (1995) 「障害児の親と新しい『親性』の誕生」井上真理子・大村英昭 (編) 『ファミリーリズムの再発見』世界思想社, 25-59.

春日キスヨ (1989) 『父子家庭を生きる—男と親の間』勁草書房.

Kurdek, L. A. (1989). Social support and psychological distress in first-married and remarried newlywed husbands and wives. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 1047-1052.

- Marks, N. F., & McLanahan, S. S. (1993). Gender, family structure, and social support among parents. *Journal of Marriage and the Family*, 55, 481-493.
- 松田茂樹 (2001) 「育児ネットワークの構造と母親の Well-Being」『社会学評論』 52, 33-49.
- Nielsen, L. (1999). Stepmothers: Why so much stress? a review of the research. *Journal of Divorce & Remarriage*, 30, 115-148.
- 日本家族社会学会・全国家族調査 (NFR) 研究会 (2000) 『家族生活についての全国調査 (NFR98)』 No.1.
- 西村純子 (2001) 「家族構造と家族生活ストレイン—ひとり親、ふたり親、ステップ・リレイション」 渡辺秀樹 (編) 『現代日本の親子関係』 文部省科学研究費基盤研究 (A) : 家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No.2-2, 91-110.
- 野沢慎司 (2001) 「ネットワーク論的アプローチ—家族社会学のパラダイム転換再考」 野々山久也・清水浩昭 (編) 『家族社会学の分析視角』, ミネルヴァ書房, 281-302.
- 野沢慎司 (1999a) 「家族研究と社会的ネットワーク論」 野々山久也・渡辺秀樹 (編) 『家族社会学入門』 文化書房博文社, 162-191.
- 野沢慎司 (1999b) 「夫の援助とネットワークの援助は競合するか? —東京郊外と地方都市における妻たちの援助動員」 石原邦雄 (編) 『妻たちの生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク』 東京都立大学都市研究所 [復刻版: 東京都立大学出版会 2001], 239-261.
- Wilcox, B. L. (1981). Social support in adjusting to marital disruption: A network analysis. In Gottlib, B. (ed.), *Social Networks and Social Support*. Sage, 97-115.
- 安田雪 (1997) 『ネットワーク分析』 新曜社.



## V. ステップファミリーのストレス源とストレス

### 1 調査対象者のストレス特性

本調査の対象者のストレス特性について検討するため、ストレス源の特徴に関する問 13、ストレス反応としての心身の状態に関する問 28、家族関係満足度に関する問 29 への回答を分析した。

#### (1) ストレス源の特徴

問 13 は、9 項目からなる。それぞれの項目に記されたストレス源となりうる出来事などを、調査対象者が最近 1 カ月ほどの間にどれくらい経験したかについて「全くなかった」(1 点)、「ごくまれにあった」(2 点)、「時々あった」(3 点)、「何度もあった」(4 点)の 4 段階で評定するよう求めた。

この問 13 への回答について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果を表 V-1 に示す。なお、因子数決定の基準は固有値 1 以上とした。

表から明らかなどおり、第 1 因子はパートナーや子どもなどの家族成員との間で生じるストレスフルな出来事を表す項目に高く負荷している。よってこの因子を「家族内ストレス源」因子とする。一方、第 2 因子は親や親戚、近所の人たちなど、家族以外の人々との間で生じたストレスフルな出来事を表す項目に高く負荷している。よってこの因子を「家族外ストレス源」因子とする。なお、これら 2 つの因子間の相関は.38 であった。

**表 V-1 調査対象者のストレス源についての因子分析結果**

項目	因子	
	I	II
家族内ストレス源		
自分が「家族に理解されていない」と感じたこと	.816	-.124
家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと	.754	-.176
子ども（継子を含む）との関係で悩んだこと	.699	.099
パートナーとの関係で悩んだこと	.473	.280
家族外ストレス源		
自分の親や親戚との関係で悩んだこと	.077	.592
近所の人や子どもの学校関連の人との関係で悩んだこと	-.018	.507
自分もしくは現在のパートナーの元のパートナーとの関係で悩んだこと	-.007	.412
パートナーの親や親戚との関係で悩んだこと	.355	.368
職場の人間関係で悩んだこと	-.125	.347

## (2) ストレス反応と家族関係満足度の特徴

問 28 は、16 項目からなる。それぞれの項目に記されたストレス反応を、調査対象者が最近 1 週間でどれくらい経験したかについて「全くなかった」(1 点)、「週に 1～2 日」(2 点)、「週に 3～4 日」(3 点)、「ほとんど毎日」(4 点) の 4 段階で評定するよう求めた。

この問 28 への回答について因子分析を行ったところ、固有値 1 以上の基準で 1 因子が見出された(表 V-2)。よって、ストレス反応については「ストレス反応」因子のみからなる 1 因子構造とした。

**表 V-2 調査対象者のストレス反応についての因子分析結果**

項 目	因子 I
ストレス反応	
家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと	.843
物事に集中できなかったこと	.801
ゆううつだと感じたこと	.789
悲しいと感じたこと	.753
ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと	.747
何をするのも面倒と感じたこと	.722
ふだんより口数が少なくなったこと	.718
一人ぼっちでさびしいと感じたこと	.698
何かおそろしい気持ちがしたこと	.669
「毎日が楽しい」と感じたこと	-.627
食欲が落ちたこと	.591
生活について不満なく過ごせたこと	-.564
なかなか眠れなかったこと	.513
仕事が手につかなかったこと	.511
他の人と同じ程度の能力があると思ったこと	-.216
これから先のことについて積極的に考えたこと	-.145

また、家族関係への満足の程度について尋ねる問 29 は 3 項目からなる。それぞれの項目に記された家族成員間の関係について「不満である」(1 点)、「どちらかという不満」(2 点)、「どちらかという満足」(3 点)、「満足している」(4 点) の 4 段階で評定を求めた。この問 29 はわずか 3 項目ではあるけれども、構造の確認のため因子分析を行ったところ、1 因子構造が確認された(表 V-3)。

**表 V-3 調査対象者の家族関係満足度についての因子分析結果**

項 目	因 子
	I
パートナーと子ども（継子を含む）との関わりについて	.886
自分と子ども（継子を含む）との関わりについて	.727
自分とパートナーとの関係について	.635

## 2 調査対象者のストレス源とストレス反応、家族関係満足度の関連

### (1) ストレス源とストレス反応、家族関係満足度の特徴

上で見出された、家族内ストレス源、家族外ストレス源、ストレス反応ならびに家族関係満足度の4つの因子それぞれに高く負荷した項目群の平均値を算出し、それらをそれぞれの因子の意味するストレス特性得点とした。それぞれのストレス特性についての記述統計量を表 V-4 に示す。

**表 V-4 調査対象者のストレス特性についての記述統計**

	n	$\alpha$	平均	標準偏差
家族内ストレス源	113	.78	2.32	.87
家族外ストレス源	112	.58	1.80	.63
ストレス反応	113	.90	1.95	.59
家族関係満足度	113	.79	2.90	.84

表から明らかなおおり、家族外ストレス源以外の3特性の $\alpha$ 係数は高く、十分な内的整合性を有している。家族外ストレス源の $\alpha$ 係数が低い理由として、家族外のストレス源となる対象が親や親戚、子どもの学校関係、職場の人間関係というように多岐にわたっており、また、調査対象者によっては子どものいない者や職業を持たない者がいることが考えられる。本来であれば、これらの対象者特性を考慮した分析が必要ではあるけれども、今回は調査対象数の少なさを考慮して、この家族外ストレス反応についてはここで得られた5項目の平均値をそのまま用いることとする。

既述のとおり、これらのストレス特性はいずれも4段階で評定を求めたものである。したがって、表 V-4 からは、今回の調査対象者のストレス特性の全体的な特徴として次のようなものが読み取れる。まず家族内ストレス源については、必ずしも頻繁にそれを感じているわけではないものの、まれに、あるいは時々を感じているようである。一方、家族外ストレスについては、それを感じることは概して少ないといえる。またストレス反応については、さほど頻繁に感じてはいないものの、週に1～2日は何らかの心身の不調を感じていることがうかがわれる。また、家族関係に対する満足度は比較的高い。

## (2) ストレス源とストレス反応、家族関係満足度との関連

次にこれら4つのストレス特性間の関連について、得点間の相関を表V-5に示した。また、ストレス反応得点を基準変数、2種類のストレス源得点を説明変数とした重回帰分析の結果を表V-6に、家族関係満足度を基準変数、2種類のストレス源得点を説明変数とする重回帰分析の結果を表V-7に、それぞれ示した。

これら3つの表から次のことが分かる。まず、家族内ストレス源、家族外ストレス源ともにストレス反応と密接に関連している。とりわけ、家族内ストレスとストレス反応との関連が強い。横断的なデザインによって得られたデータの分析結果であるため、因果関係の同定には慎重であるべきだけれども、ここでの結果は、調査対象者が家族内外で感じているストレスが、彼ら／彼女らのストレス反応をかなりの程度規定していることを推察させる。

次いで家族関係満足度については、0次相関を見ると家族内ストレス源、家族外ストレス源ともに家族関係満足度と有意な相関を示している。しかし、重回帰分析の結果は家族内ストレス源のみが家族関係満足度と関連することを示している。家族内ストレス源と家族外ストレス源との相関が統制されたため、家族外ストレス源と家族関係満足度との間の見かけの相関が消えたことによると考えられる。

要するに、今回の調査対象者の心身のストレス反応に対しては、家族内ストレス源、家族外ストレス源の双方ともに密接な関連を示すけれども、家族関係満足度に対しては、家族内ストレスのみが関連しているといえる。

**表V-5 ストレス特性間の相関**

	1	2	3
1. 家族内ストレス源			
2. 家族外ストレス源	.36**		
3. ストレス反応	.66**	.46**	
4. 家族関係満足度	-.71**	-.26**	-.58**

\*\* p<.01

**表V-6 ストレス反応得点を基準変数とした重回帰分析の結果**

	$\beta$	t	p<
家族内ストレス源	.56	7.41	.001
家族外ストレス源	.26	3.38	.001
$R^2$	.50		

**表V-7 家族関係満足度を基準変数とした重回帰分析の結果**

	$\beta$	t	p<
家族内ストレス源	-.70	9.48	.001
家族外ストレス源	-.03	.38	ns.
$R^2$	.50		

## VI. インターネットでのサポートの交換

### 1. インターネット・サポートの特徴

#### (1) インターネット・サポートとは

インターネットでは様々なコミュニケーションが可能であるが、ソーシャル・サポート（社会的支援）を交換しあうメディアとしては、電子メールとオンライン・コミュニティがある。電子メールは、友人や家族など強い紐帯の関係、既存の関係の間で利用され、サポートの交換を通じて紐帯を保持・強化することができる。一方、不特定多数の人々が自分の関心に合わせて集いコミュニケーションをしている電子掲示板やメーリングリストはオンライン・コミュニティと呼ばれている。そこでは、今まで知り合いではなかった多種多様な人々が、時には匿名で自由に参加して意見を交換することを通じてお互いに助け合うサポートの交換をしている。つまり、オンライン・コミュニティは知り合いといった程度の弱い紐帯の関係、新しい対人関係を取り結ぶ場と考えられている。セルフヘルプ・グループ<sup>1</sup>では、同じ立場の人と出会いたいと願ってグループに参加し、同じ悩みを持つ人同士で話ができてうれしいと感じ、状況の類似性の認知による共感の喚起が自尊心の回復を促す効果と、自己開示による苦痛の軽減が自尊心の回復を促す効果があるという（高木, 2000）。これと同じような効果がサポートティブなオンライン・コミュニティにはあると予想される。

#### (2) インターネット・サポートの特徴

このようなオンライン・コミュニティで交換されるサポートをここではインターネット・サポートと呼ぶことにするが、このインターネット・サポートには以下のような特徴がある。

第1に、インターネット・サポートは弱い紐帯との交換が多いので、サポート・ネットワーク（サポートを交換する人々のネットワーク）の多様性が高く、サイズが大きい（Walther & Boyd, 2002）。すなわち、サポートを交換するようなオンライン・コミュニティには参加している人々の数と多様性が高いために、従来ならば居住地域が異なるために知り合う機会がないような人とも知り合いになったり、従来の友人関係や地域社会では入手不可能だったサポートを得ることができる。また、同じ悩みを持つ人に出会うことができることは、とりわけ一般的ではない悩みの場合に重要である（Wallace, 1999）。ただし、サポート提供者の人数が多くなれば、かならずしも役立つサポートが増え、自分の問題解決ができやすくなるわけではない。オンライン・コミュニティの有効性は、参加者数より、参加者の多様性（Wellman & Gulia, 1999）や、優れたリソースを提供している人にどれくらいコンタクトしているかに依存している（Constant et al., 1996）。つまり、参加者が多くても同質で同じようなサポートしか提供してくれないオンライン・コミュニティよりは、いろいろな種類のリソースを持っている多様な人々が参加している方が、その中から自分の必

要とするサポートを見つけやすいであろう。また、「自分は知らないけれど、あの人ならばあなたが求めている情報を知っていると思うわ」と教えてくれるような、優れたリソースを持っている参加者が含まれているオンライン・コミュニティの方が有効だと考えられている。

第2に、オンライン・コミュニティでは密度が中程度のネットワークであることが多いので、有効なサポートを得やすいと考えられる。参加者間でお互いに知り合いである程度を密度というが、密度が高くなるに連れて、ネットワーク・パワーが創発し、ニーズを把握するためのコミュニケーションが活発化して適切な頻度のソーシャル・サポートを動員することが可能となる(Wellman & Gulia, 1999)。しかし、密度が高くなり過ぎると、ネットワークの自律性が減少し、かえってサポート力は低下する。また、密度が高すぎるネットワークは思考力・生活スタイルなどが同質となるため、多様性が減少し、情報の冗長性が高くなるので、得られる情報の有効性が低下すると思われる。

第3に、離脱可能性が高いことが挙げられる。ネットワークは資源ともなるが、制約にもなりうる(野沢, 1999)。サポートを提供してくれることもあるが、煩わしさもある。しかし、オンライン・コミュニティは境界が不明確で参入も離脱も対面の対人関係に比べると容易であるため、制約になりにくいと思われる。

第4に、オンライン・コミュニティでは匿名でもコミュニケーションができる。そのために自己開示をしやすく、その結果、ストレス解消に役立つ情報を得る「道具的サポート」だけではなく、ストレスに苦しむ人の情緒や自尊心、自己評価を高めるように働きかける「社会情緒的サポート」さえも得ることが可能である。また、相手の属性が見えないことで対等の関係を保証し、求めに応じやすくなる(Wellman & Gulia, 1999)。また、スティグマについてのサポートを求めることができる。隠蔽可能なスティグマを持つ人、とくわけカミングアウトしていない人は日常生活空間で同じスティグマを持つ人を見つけて話をする可能性は非常に低い。しかし、オンライン・コミュニティならば、匿名だからカミングアウトしやすいので、同じスティグマの人を探しやすい(Wallace, 1999)。すなわち、匿名だからこそ、危険性の高いトピックスについての危険性の低い議論ができる(Walther & Boyd, 2002)。

第5に、即応性が高いという特徴がある。誰かが質問やコメントをつけるとすぐに情報を受け取れるというメディアの性質がこのソーシャル・サポートを支えている。たとえば、阪神大震災の直後の電子掲示板で正確に早く負傷者の名前がリストアップされていたように、効率とスピードが必要とされる場合、このことは重要である。しかしながら、インターネットはスピードがあつて多くの人アクセスし、情報の広がり加速されるので、間違つたアドバイスや情報も広がりやすい点は注意が必要である(Wellman & Gulia, 1999)。

第6に、アクセスしやすさが挙げられる(Walther & Boyd, 2002)。たとえば、オンライン・コミュニティに参加するには移動する必要性がないため、どこからでもいつでも参加することができる。また、インターネットにアクセスする端末が工夫されるにつれ、いろ

いゝなハンディキャップがある人でも参加できるような機会が拡大しつつある。

第7に、従来の対面型のサポートの交換に比べると、インターネット・サポートの交換にはコストがかからない (Walther & Boyd, 2002)。たとえば、サポートを提供する場合、多くのネットワークを持ち支援的な人ほど大きなストレスを経験しているという。サポートの範囲が拡大すると、提供者が抑うつになったり不安になるといった燃え尽き症候群を示すのかもしれない。しかしながら、オンライン・コミュニティでは弱い紐帯で密度も中間的という構造的な特徴や、匿名でアクセスしやすいといったコミュニケーションの特徴から、サポートの交換のコストが低いと思われる。

### (3) インターネット・サポートの限界

ただし、オンライン・コミュニティで知らない人から受けるサポートの有効性には以下の問題がある。

第1に、サポート提供者が信頼できるのか、どの程度専門性を持っている人なのか、さらにはサポートが求められる状況についての知識をもっているのかといったことを、受領者が評価することが難しい (Constant et al., 1996)。

第2に、サポート受領者が、サポート提供者をサポートしてあげたいという動機付けをコントロールできない。つまり、受領者はサポート要求をするだけで、実際にどのようなサポートが得られるかはサポート提供者に依存している。

第3に、サポート提供者はサポートを求めている人についてほとんど情報がないので、彼らからのアドバイスの要求を誤解したり、会話の文脈を理解しにくい。そのため、提供者が適切なサポートを与えにくい。

第4に、だれでも自由に参加できるように集団サイズが曖昧であり、そのためにオンライン・コミュニティではサポートを提供することに対する責任の分散が生じることが心配される。サポートを求める呼びかけが多くの人に読まれていることがわかる、あるいはそう予想できる場合、「私がサポートしなくても他の誰かがするだろう」と考え、援助の責任は確実に弱まるであろう。しかしながら、オンライン・コミュニティでは、実際に書き込みを見ている人数ではなく頻繁に投稿をする人の人数で参加者数を推測する傾向があるため、実際の参加者数よりもサイズを過小評価しやすい。そのため、他の対面集団の場合に比べて、多少サポートに対する強い責任を参加者が感じるという意見もある (Wallace, 1999)。

第5に、家族や親友のような強い紐帯と異なり、インターネット上の弱い紐帯では特定の領域に限定したソーシャル・サポートを得られるようになるだけである。インターネット上にはあらゆる種類のサポートを見つけることが可能だが、1つの関係性を通じて有効なサポートのほとんどは、特定のなものである。つまり、どんなことに対してもサポートを交換する関係ではなく、特定の問題についてサポートを交換する関係にすぎない点は、オンライン・コミュニティの限界といえよう (Wellman & Gulia, 1999)。

## 2. インターネットの利用実態

### (1) インターネット利用率

仕事以外でインターネットの利用頻度(電子メールの送受信も含む)を質問したところ、利用していない人は 13.3%、めったに利用していない人は 3.5%であった。一方、1 週間に 1 回程度が 6.2%、1 週間に数回程度が 15.9%であった。それに対して、毎日利用している人は 61.1%に達していた。

これと比較して、内閣府生活局が全国に居住する 15 歳以上 70 歳未満の男女 3,500 人を対象に 2001 年に行った郵送調査をみると、全国的には仕事も含めてのインターネット利用者は 43%であり、ほぼ毎日利用している人は約 18%にすぎなかった(表VI-1 参照)<sup>2</sup>。したがって、本調査回答者は非常にインターネット利用率が高い人々であることがわかる。

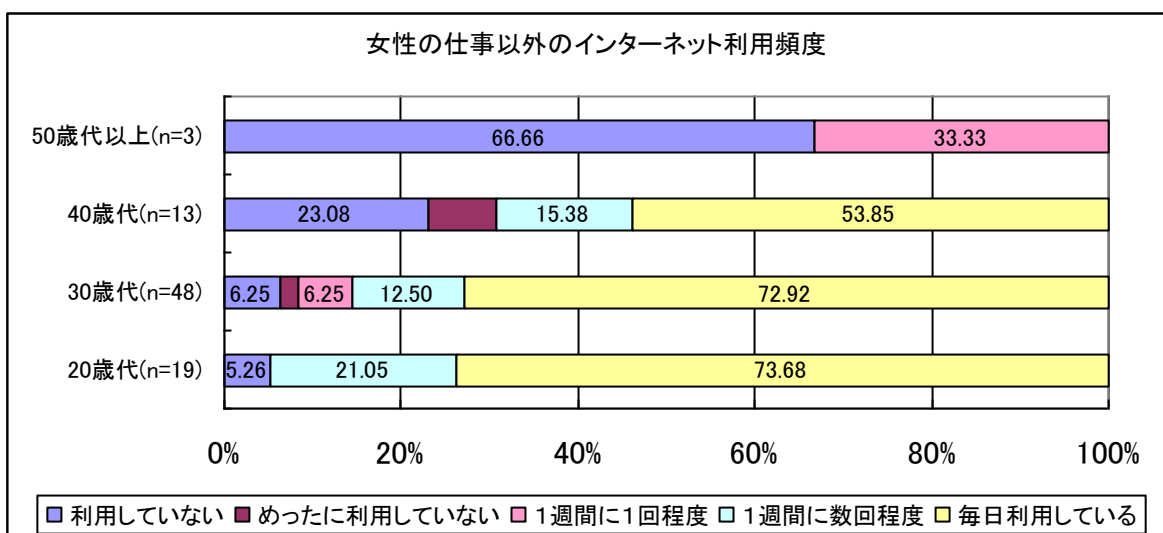
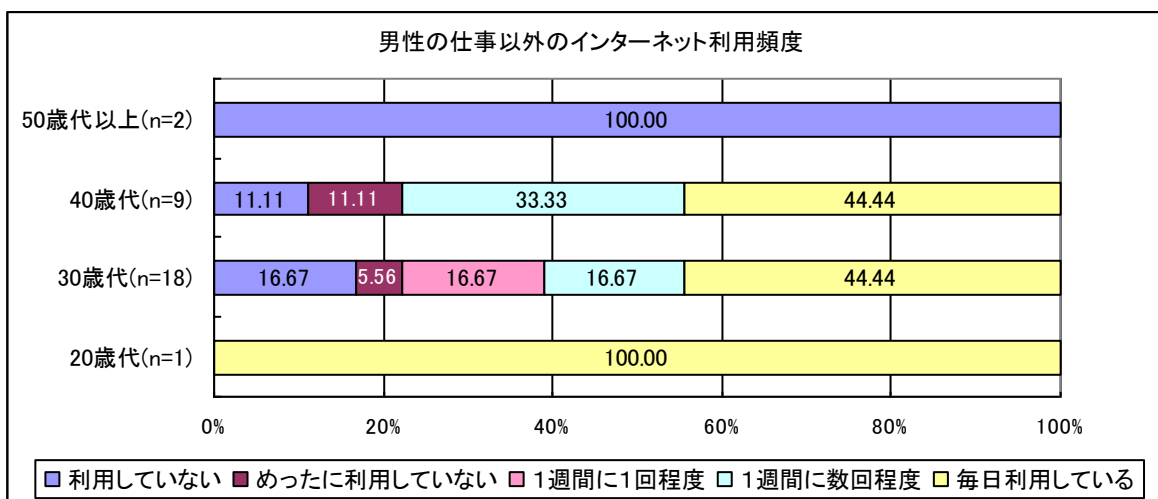
表VI-1 インターネット利用実態の比較(全国調査と本調査)

内閣府生活局による全国調査結果			本調査結果		
	人数	%		人数	%
ほぼ毎日	240	17.92	毎日利用している	69	61.1
週に 3~5 日	165	12.32	1 週間に数回程度	18	15.9
週に 1~2 日	112	8.37	1 週間に 1 回程度	7	6.2
月に 1~2 日程度	34	2.54	めったに利用していない	4	3.5
月に 1~2 日以下	25	1.87	利用していない	15	13.3
利用していない	763	56.98	総計	113	100
総計	1339	100			

出典)内閣府生活局「平成 13 年度ITによる家族への影響実態調査」

利用頻度を男女別・年齢別に見たのが図VI-1 であるが、前述の全国調査に比べて、20~30 歳代の女性では毎日利用しているヘビーユーザーが 7 割強もいることが特徴的である。





図VI-1 男女別年齢別に見た仕事以外のインターネットの利用頻度

次に、利用者 98 人にインターネットのアクセス方法を「自宅のパソコン」「職場のパソコン」「公共施設のパソコン」「携帯電話や PHS」「その他の携帯端末」の中から複数選んでもらったところ、男女ともに自宅のパソコンからのアクセスが最も多く、女性では約 8 割、男性では約 7 割であった。また、職場のパソコンからのアクセスは男性の方が多いが、これは男性の有職率が高いためと思われる。なお、男女とも約 4 割が携帯電話や PHS からのアクセスを行っていたが、全体的に見るとインターネットを自宅のパソコンからアクセスしている人が多いことがわかる。

## (2) インターネットの利用内容

次に、インターネットの利用内容をみると、特に女性では仕事以外でのメールの送受信が多いことがわかる。

1週間に受信する仕事以外のメールは、女性では3~5通が最も多く約3割を占めるが、6通以上受信する人も46%に達している。中には20通以上受信する人が12.2%いる。男性は女性に比べるとメールの受信数が少なく、6通以上受信する人は約1/4に留まっている。ただし、20通以上受信する男性も16.7%存在しており、その割合は女性より若干多かった。

受信数に比べると少ないものの、同様の傾向はメールの発信についても認められる。1週間に仕事以外で発信するメール数が6通以上という女性は43.3%を占めており、20通以上という人も1割近く存在する。それに比べると、男性の発信数は少なく、6通以上発信している人は25%であった。ただし、20通以上発信する男性も12.5%いた。

このように、メールの送受信数は女性の方が多いが、男女ともにメールの送受信が1週間に20通以上というヘビーユーザーが1割程度いる。そして、ヘビーユーザーの割合は男性の方が若干高いことがわかる。

次に、電子掲示板・電子会議室・ニュースグループ・チャットはどの程度利用されているだろうか。全く見ない人が全体の2割強、1ヶ月に1回以下という人が1割であった。一方、毎日一回以上見る人も全体で36%に達しており、インターネット利用者の中でも、ほとんど見ないグループ、1ヶ月数回見るという中程度利用者のグループ、毎日見るヘビーユーザーのグループがそれぞれ約1/3ずついることがわかる。

### (3) ステップファミリーに関連したオンライン・コミュニティの利用

では、ステップファミリーに関連した電子掲示板・電子会議室・ニュースグループ・チャットの利用者は、どの程度いるのだろうか。

全く見ない人が全体の3割弱、1ヶ月に1回以下という人が1割強であった。一方、毎日1回以上見る人も全体で27.5%であった。一方、これらのオンライン・コミュニティは書き込みを見ているだけの参加者が書き込みもする積極的な参加者よりも極端に多いのが特徴であるが、全く書き込まない人が約半数、1ヶ月に1回以下が2割であり、約7割の人々が過去1ヶ月間には書き込みをしていないことがわかる。一方、毎日1回書き込みをする人は約7%であり、見ている人の方が書き込みをする人より多いことがわかる。

この点をより詳しく見たのが、表VI-2である。全く書き込みもしなければ見もしない人が27.4%いることがわかる。これに見るのも書き込みも1ヶ月に1回以下の12.7%を加えた約4割がほとんど見ないし書かないグループである。1ヶ月に数回以上は見るけれどもほとんど書き込まない人が、28.5%、1ヶ月数回以上見て書き込む人が22%、毎日1回以上見てかつ書き込みをするヘビーユーザーは、7.4%にすぎなかった。

表VI-2 ステップファミリー関連オンライン・コミュニティでの活動

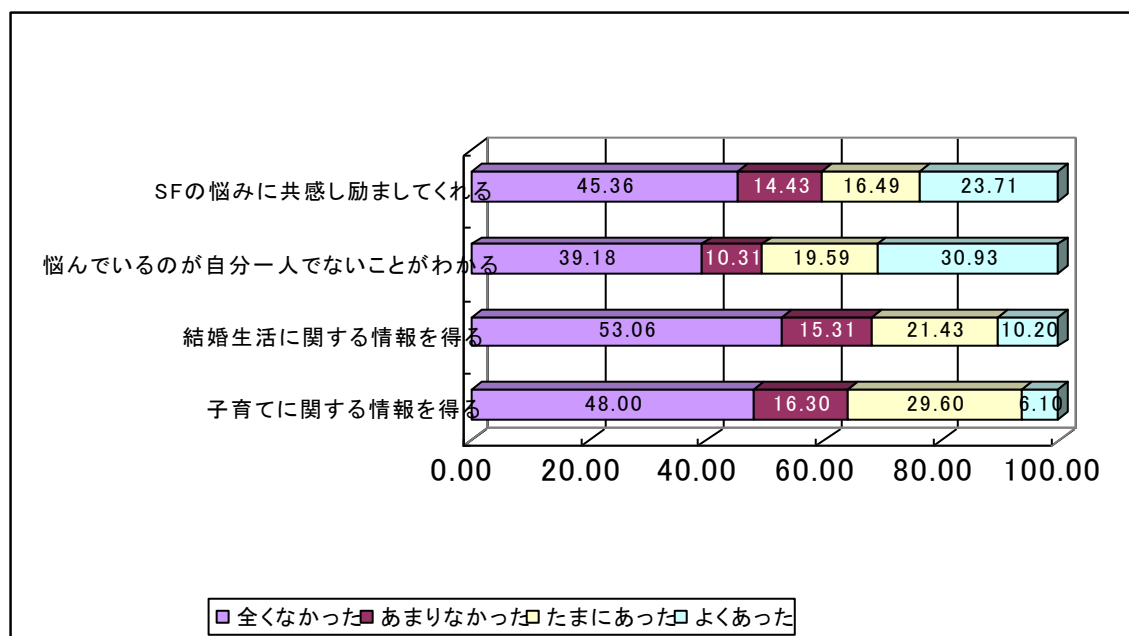
		ステップファミリーに関する電子掲示板などに書き込む頻度						合計
		全く書き込まない	1ヶ月1回以下	1ヶ月に数回	1週間に数回	1日1回くらい	1日数回以上	
見る頻度	全く見ない	27.4%(26)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	27.4%(26)
	1ヶ月1回以下	7.4%(7)	5.3%(5)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	12.6%(12)
	1ヶ月に数回	8.4%(8)	7.4%(7)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	15.8%(15)
	1週間に数回	6.3%(6)	5.3%(5)	3.2%(3)	2.1%(2)	0.0%(0)	0.0%(0)	16.8%(16)
	1日1回くらい	1.1%(1)	0.0%(0)	5.3%(5)	4.2%(4)	0.0%(0)	0.0%(0)	12.6%(12)
	1日数回以上	0.0%(0)	0.0%(0)	3.2%(3)	4.2%(4)	5.3%(5)	2.1%(2)	14.7%(14)
	合計	50.5%(48)	20.0%(19)	11.6%(11)	10.5%(10)	5.3%(5)	2.1%(2)	100%(95)

( )内の数字は人数

### 3. インターネット・サポートの受領

#### (1) どのようなサポートを受けているのか

インターネット利用者 98 人に、調査の前の一ヶ月にどのようなサポートをオンライン・コミュニティで受領しているか、その頻度を評定してもらった（図VI-2 参照）。



図VI-2 インターネット・サポートの受領

その結果、情緒的サポートのほうが情報的サポートよりも多く受領していることがわかった。特に、「ステップファミリーで悩んでいるのは自分一人でないことをわからせてくれる」ことがよくあったと答えた人は31%であり、たまにあったと答えた20%を加えると、約5割の人がこのようなサポートを受領していたことがわかる。また、「ステップファミリーであることのつらさや悩みに共感してくれたり励ましてくれたりする」ことを経験した人も約4割であった。それに比べると、「親子関係・しつけ・教育問題などの子育てに

関する情報を与えてくれる」経験をした人は約36%、「離婚・再婚問題など結婚に関する情報」は約32%であり、情動的サポートの受領は情緒的なサポートほどは多くないことがわかる。これは、子育て中の母親を対象に子育て関連のオンライン・コミュニティでのサポートの受領を調べた結果（宮田・浦・長谷川, 2001）とも一貫しており、オンライン・コミュニティでは情動的サポートの受領が情動的サポートより多いことがわかる。従来のマスメディアやインターネットのウェブページに比べて、オンライン・コミュニティでは自分が質問したことに対する回答として情報を得られるので、自分のニーズにあったカスタマイズされた情報が得られる利点がある（池田, 1997）が、それ以上に情緒的なサポートへのニーズが高く、そのようなサポートの受領が行われているのであろう。

## **(2) だれがインターネット・サポートを受領しているのか**

では、どのような人がインターネット・サポートを多く受けているのだろうか。何か共通する特徴はあるのだろうか。

前述の4項目のインターネット・サポートについて4段階で評定してもらった数値を合計してインターネット・サポート受領得点を算出した。具体的には、各項目毎に「よくあった」人には4点、「たまにあった」には3点、「あまりなかった」には2点、「全くなかった」には1点を与えた。そして、4項目の得点を合計して各個人のインターネット・サポート受領得点とした。得点は4～16点であり、数値が高いほどインターネット・サポートを受領していることを示している。そして、ステップファミリー関連のオンラインコミュニティを利用している69人の点数の分布をみて、ほぼ半数になるように回答者を2分割した。つまり、この得点が11点以上と高い『インターネット・サポート受領高群』（今後略して『受領高群』）と10点以下の低い『インターネット・サポート受領低群』（略して『受領低群』）である。この他に、インターネットは利用しているがステップファミリー関連のオンライン・コミュニティは見えていない29人を『非利用者群』として、先の2つのグループと比較をしてみよう。

ここでは、①インターネット利用、②パートナーを含む他者からのサポート、③本人の心理的状态、④本人のコミュニケーション傾向の4側面で、『受領高群』『受領低群』『非利用者群』の間にどのような違いがあるかを検討する。

### **① インターネット利用**

まず、仕事以外にインターネットを利用している人98名だけを選び、その利用頻度に3群で差があるかを見たのが、表6-3-1である。「めったに利用していない」を2点、「月に1回程度」を3点、「1週間に1回程度」を4点、「1週間に数回程度」を5点、そして、「毎日利用」を6点として、それぞれの群毎に平均値を算出した。すると、『インターネット・サポート受領高群』が平均5.86で最も高く、続いて、『ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティの非利用者群』、『受領低群』となった。インター

ネット・サポートを多く受ける人の方が私的にインターネットをよく利用していることがわかる。

メーリングリストからのメールを除いて、知り合いに仕事以外のメールを1週間に平均して何通ぐらい受信したり発信するかを、「ない」「1-2通」「3-5通」「6-10通」「11-20通」「20通以上」の6段階で評定してもらった。その結果、受信・送信ともに3群間では統計的に有意差は見られなかった。

これに対して、オンライン・コミュニティの閲覧回数、ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティの閲覧回数と、その書き込み回数を、「全くなし」「1ヶ月1回以下」「1ヶ月に数回」「1週間に数回」「1日1回くらい」「1日数回以上」の6段階で評定してもらったところ、『受領高群』が最も多く、次いで『受領低群』、『非利用者群』という順番であり、これは統計的に有意であった。

このように、インターネット・サポートを多く受けている人はステップファミリーだけではなく他のオンライン・コミュニティの活動にも積極的であり、かつインターネットの私的利用にも積極的であり、ヘビーユーザーであることがわかる。

表VI-3 3群間のインターネット利用の違い

	平均値			一元分散分析
	SF関連オンラインコミュニティの非利用	インターネットサポート受領低群(N=34)	インターネットサポート受領高群(N=35)	F 値
仕事以外のインターネット利用頻度 a	5.45	5.21	5.86	4.49 *
電子メール受信数 b	3.38	3.03	3.49	0.82
電子メール送信数 b	3.34	3.06	3.40	0.54
オンライン・コミュニティ閲覧回数 c	2.31	3.79	4.56	15.67 **
ステップファミリー関連コミュニティの閲覧回数 c	1.00	3.50	4.49	79.94 **
ステップファミリー関連コミュニティの書き込み回数 c	1.00	2.09	2.88	20.07 **

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

a 2~6の数値を取り、数値が高いほど利用頻度が高いことを表す

b 1~6の数値を取り、数値が高いほど数が多いことを表す

c 1~6の数値を取り、数値が高いほど頻度が高いことを表す

d 1~6の数値を取り、数値が高いほど数が多いことを表す

## ② パートナーを含む他者からのサポート

まず、パートナーとの関係からみると、『受領高群』は『受領低群』や『非利用者群』に比べて、パートナーからのサポートの受領が少ないことがわかる。具体的には、「助言やアドバイスをしてくれる」「心配・悩み事を聞いてくれる」「能力や努力を高く評価してくれる」という項目のそれぞれの経験頻度を「よくあった=4点」、「たまにあった=3点」、「あまりなかった=2点」、「全くなかった=1点」の4段階で評定してもらい、『受領高群』『受領低群』『非利用者群』の3群の平均値を算出したのが、表VI-4である。

表VI—4 3群間のパートナー等からのサポートの違い

	平均値			一元分散分析 F 値
	SF関連オンラ インコミュニティ の非利用者	インターネット サポート受領低 群(N=34)	インターネット サポート受領高 群(N=35)	
1 心配・悩み事を聞いてくれる a	3.55	3.56	3.09	3.67 *
2 能力や努力を高く評価してくれる	3.59	3.26	3.20	2.11
3 助言やアドバイスをしてくれる a	3.48	3.38	3.11	1.92
パートナーからのサポート b	10.62	10.21	9.40	3.05 †
4 いろいろ面倒をかける a	2.14	2.12	2.34	0.55
5 文句や小言をいう a	2.00	2.06	2.14	0.16
6 イライラさせる a	2.13	2.47	2.57	1.74
パートナーとの葛藤 c	6.28	6.65	7.06	0.84
7 一緒にショッピング a	3.54	3.65	3.37	1.39
8 一緒に旅行やドライブ a	3.32	3.38	3.11	0.97
9 夫婦一緒に友人交際 a	2.32	2.24	2.31	0.07
10 共通の趣味 a	3.14	3.18	2.94	0.62
パートナーとの同伴行動 d	12.32	12.44	11.74	0.67
オンライン上で悩みやグチを話せる相 手の数 e	1.46	1.85	2.50	8.17 **
ネットワーク規模 e	3.97	5.65	5.37	2.32
専門機関への相談 f	1.48	1.32	2.23	1.51

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

a 1～4の数値をとり、数値が高いほど経験頻度が高いことを意味している。

b 項目1～3の合計値であり、数値は3～12をとり、数値が高いほどサポートが多いことを表す

c 項目4～6の合計値であり、数値は3～12をとり、数値が高いほど葛藤が多いことを表す

d 項目7～10の合計値であり、数値は4～16をとり、数値が高いほど同伴行動が多いことを表す

e 数値が高いほど家族の話ができる友人・知人のネットワークが大きいことを表す

f 0～12の数値を取り、数値が高いほど相談経験が多いことを表している

3種類のサポートの受領経験を合計したパートナーからのサポートの得点は、『非利用者群』の平均値が最も高く 10.62、『受領低群』が 10.21 であるのに対して、『受領高群』は 9.40 と、パートナーからのサポートが最も少なかった。特に、「心配・悩み事を聞いてくれる」というサポートについては、『受領低群』の平均が 3.56、『非利用者群』が 3.55 であったのに対して、『受領高群』は 3.09 と、統計的に有意なほど低かった。つまり、パートナーからのサポート受領が少ない方が多くのインターネット・サポートを受領していることがわかる。

この結果については、以下の3つ解釈が考えられる。

第1に、現実の日常生活空間ではパートナーに対して、「自分の悩みを話すことで心配をかけたくない」「話をしてもわかってもらえない」という気持ちを持っている人が、パートナーよりステップファミリー関連のオンライン・コミュニティにサポートを求めていると考えられる。このようなオンライン・コミュニティでは同じ悩みを持つ人を見つけることや、匿名で悩みをうち明けることができるために、サポート、特に情緒的サポートを求めやすく、実際に受けていると考えられる。障害児の親(Mickelson, 1997)やガン患者(Turner et al., 2001)や聴覚障害者(Cummings et al., 2002)を対象にした調査でも、本結果と同様に、家族や友人からのサポートが少ないほどインターネット・サポートを多く受領する傾向が

認められた。障害児の親たちは日常生活空間で同じストレス源を持つ人を見つけられる確率が低いため、インターネットを通じてサポートを求めていると考えられる。いろいろな理由からパートナーが「分かち合える人」でないときに、分かち合える人を求めてオンライン・コミュニティに参加しサポートを受領しているのであろう。

第2には、パートナーからのサポートが少ない人は、サポートの多い人に比べて、ストレス源が高くなり、このストレス源を低減するためにインターネット・サポートを求めているのかもしれない。そこで、インターネット利用者をパートナーからのサポート量で高低の2つのグループにした。具体的には、パートナーからのサポート（3～12点）が10点以下の低いグループと11点以上の高いグループにわけた。また、ストレス源（9～36点）<sup>3</sup>も17点以下の低群と、18点以上の高群に分けた。そして、2×2の4つのグループでインターネット・サポートの受領に差があるかを見たのが、表VI-5である。これを見ると、パートナーからのサポートが低くストレス源が高い人々が最も多くのインターネット・サポートを受けていることがわかる。たとえ、ストレス源が高くても夫からのサポートがあれば、インターネット・サポートを求める量は少なくなると考えられる。

**表VI-5 パートナーからのサポートとストレス源が  
インターネット・サポートに及ぼす影響（MANOVA）**

	ストレス源	
	低(17点以下)	高(18点以上)
パートナーからのサポート低群 (10点以下)	8.00 (N=17)	10.83 (N=30)
パートナーからのサポート高群 (11点以上)	6.83 (N=29)	7.35 (N=17)
パートナーからのサポートの主効果	F=7.44**	
ストレス源の主効果	F=3.87†	
交互作用効果	F=1.83	

\*\* p<. 01 † p<.1

第3には、既存のリアルネットワークがサポートの資源ではなく、制約として働いているために、制約の少ないオンライン・コミュニティにサポートを求めている可能性もある。パートナーに家族問題や悩みを相談することで、かえって家族関係がうまくいかず煩わしい思いをすることもあるかもしれないが、匿名で話ができるオンライン・コミュニティであれば悩みをうち明けることのリスクが低いと思われる。

ただし、パートナーからのサポートが少ないからオンライン・コミュニティで多くのサポートを求め得ているのか、それともオンライン・コミュニティで多くのサポートを得るからパートナーからのサポートを受けなくなるのか、因果関係は不明である。

次に、「いろいろ面倒をかける」「イライラさせる」「文句や小言をいう」というパートナーとの葛藤が3群で異なるかを調べたところ、『受領高群』は『非利用者群』や『受領低群』に比べると葛藤が多い傾向が見られるが、これは統計的には有意ではなかった。

また、一緒に旅行やドライブ・共通の趣味・一緒にショッピング・夫婦一緒に友人交際というパートナーとの同伴行動も、3群で差はなかった。

このように、オンライン・コミュニティはソーシャル・サポートの受領に関してパートナーといったリアルな対人関係の代替として機能していると思われる。

続いて、パートナー以外からのサポートに違いがあるかを検討してみよう。まず、電子メールや電子掲示板、電子会議室、ニュースグループなどのオンライン上で、自分の家族についての悩みやグチを話せる特定の相手の数を5段階で聞いたところ(いない=1点、1-2人=2点、3-5人=3点、6-9人=4点、10人以上=5点)、『受領高群』が最も多く平均値が2.50、次いで『受領低群』が1.85、『非利用者群』が1.46であり、『受領高群』は他の2群に比べて統計的に有意に多くのネット友人を持っていることがわかる。ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティでサポートを多く受領している人は、積極的にコミュニティに参加し、そこで家族についての悩みを話せる友人を作っているであろう。

さらに、対面でコミュニケーションを含めて家族についての悩みやグチを話せる友人や知人等の人数(ネットワーク規模)を比較したところ、統計的には有意ではないものの、『受領低群』(5.65人)が最も多く、次いで『受領高群』が5.37人であり、『非利用者群』は平均3.97人と最も少なかった。ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティには同じ関心や悩みを持つ人が集まっているので、そこに積極的に参加することで、話せる友人・知人が増えることになるからだと推測される。他方、『非利用者群』は当然インターネット上ではそのような友人が少ないため、リアルを含めた全体数も少ないのであろう。このように、パートナーからのサポートと同様に、対面の既存の友人からのサポートが得られない人の方がオンライン・コミュニティに参加し、そこで同じ悩みを分かち合える友人を見つけ、オンライン・コミュニティの場や時には電子メールを使ってサポートを交換していると考えられ、インターネット・サポートはパートナーや友人とのリアル・サポートの代替として機能していると思われる。

では、専門機関からのサポートの受領は3群で差があるだろうか。子育てに関する問題・夫婦関係の問題、親子関係の問題、本人の精神的健康に関する問題の4種類の問題について、訪問相談・電話相談・インターネット相談の有無を質問した。そして、相談経験がある場合に1とし、4種類の問題について3種類の方法での相談の合計を算出した。すると、統計的には有意ではなかったものの、『受領高群』の相談経験の平均値は2.23であり、『受領低群』(1.32)や『非利用者群』(1.48)に比べて多い傾向が見られた。これは、『受領高群』がインターネットを使って専門機関に相談している人が多いことの表れだと考えられる。相談したことでサポートが得られるとは限らないが、オンライン・コミュニティで多くのサポートを受領している人は、サポートを受領していない人やこのようなオンライン・コミュニティを使っていない人に比べると、専門機関にも相談をしており、積極的にサポートを求めていることが推測される。



③ 本人の心理的状态

抱えているストレス源や家族関係への満足度といった心理的状态に差があるのだろうか。表VI—6を見てみよう。

表VI—6 心理状态の3群間の違い

	平均値			一元分散分析
	SF関連オンライン コミュニケー ティの非利用 者(N=29)	インターネット サポート受領 低群(N=34)	インターネット サポート受領 高群(N=35)	F 値
1 家族内で負担が大きすぎると感じた a	2.11	2.18	2.54	1.57
2 パートナーとの関係で悩んだ a	2.07	2.15	2.63	2.40 †
3 子ども／継子との関係で悩んだ a	2.48	2.62	2.89	1.01
4 家族に理解されていないと感じた a	1.79	1.71	2.23	2.60 †
家族内ストレス源 b	8.32	8.64	10.29	3.14 *
5 元のパートナーとの関係で悩んだ a	1.61	1.50	1.86	1.14
6 自分の親や親戚との関係で悩んだ a	2.39	1.64	2.20	3.63 *
7 パートナーの親や親戚との関係で悩んだ a	1.93	1.74	2.40	4.00 *
8 近所や学校の人との関係で悩んだ a	2.07	1.56	1.74	1.86
9 職場の人間関係で悩んだ a	1.64	1.38	1.51	0.67
家族外ストレス源 c	9.64	7.85	9.71	4.30 *
10 パートナーと子ども 継子を含む)との関わり d	3.07	2.82	2.54	2.08
11 自分と子ども 継子を含む)との関わり d	2.90	2.68	2.68	0.47
12 自分とパートナーとの関係 d	3.29	3.06	3.00	0.69
家族関係満足度 e	9.33	8.56	8.21	1.52

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

- a 1～4の数値をとり、数値が高いほど悩んだ経験が多いことを表す
- b 項目1～4の合計値であり、数値は4～16をとり、数値がストレス源が高いことを表す
- c 項目5～9の合計値であり、数値は5～20をとり、数値が高いほど数値がストレス源が高いことを表す
- d 1～4の数値をとり、数値が高いほど満足度高いことを表す
- e 数値が高いほど家族の話ができる友人・知人のネットワークが大きいことを表す
- f 16～64の数値を取り、数値が高いほどストレス反応が強いことを表している

「自分が家族に理解されていないと感じたこと」「家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと」「子ども（継子を含む）との関係で悩んだこと」「パートナーとの関係で悩んだこと」の経験頻度を、それぞれ「何度もあった＝4点」、「時々あった＝3点」、「ごくまれにあった＝2点」、「全くなかった＝1点」の4段階で評定してもらった。この4項目の合計値を家族内ストレス源とし、インターネット・サポート受領によって違いがあるかを調べた。すると、『受領高群』が10.20であり、『受領低群』（8.64）や『非利用者群』（8.32）に比べて多い傾向が見られた。特に、「パートナーとの関係で悩んだこと」と「自分が家族に理解されていないと感じたこと」は、統計的にも有意に『受領高群』が他の2群よりも高く、ストレス源が高いことがわかる。つまり、家族内でのストレス源が強いほど、インターネット・サポートを求め、多く受領していた。

この傾向は、家族外ストレス源についても認められた。家族外ストレス群は、「自分の

親や親戚との関係で悩んだこと」「近所の人や子どもの学校関連の人との関係で悩んだこと」「自分もしくは現在のパートナーの元のパートナーとの関係で悩んだこと」「パートナーの親や親戚との関係で悩んだこと」「職場の人間関係で悩んだこと」について、それぞれ4段階で評定してもらい、この5項目の合計値を家族外ストレス源として算出した。すると、『受領低群』が7.85と最も低く、『受領高群』(9.71)や『非利用者群』(9.64)よりも統計的に有意なほど低かった。個別の項目で見ても、自分の親や親戚との関係や、パートナーの親や親戚との関係で悩んだ経験は『受領低群』が他の2群に比べて低い傾向が統計的にも認められた。家族外でのストレス源が弱いほど、インターネット・サポートを求めず、受領していないことがわかった。

また、パートナーと子ども（継子を含む）との関わり・自分と子ども（継子を含む）との関わり・自分とパートナーとの関係についての満足度を4段階で評定をしてもらったが、これらの家族関係満足度は3群で差がなかった。

#### ④ コミュニケーション傾向

インターネットの利用、特にオンライン・コミュニティへの参加は対人コミュニケーションを好む人が積極的であることがわかっているが、ステップファミリーのコミュニティでサポートを受ける人にはそのような特徴があるのだろうか。

3つの意見に対して4段階で当てはまるかどうかを聞いた結果が、表VI—7である。統計的に有意であったのは、人と話すことが好きだという対人コミュニケーション嗜好であり、『受領高群』の対人コミュニケーション嗜好が最も高かった。オンライン・コミュニティでは参加者が積極的にコミュニケーションを行わなければ、他の参加者からどのようなサポートを求めているのかわからないので、結果として多くのサポートを受けにくいという特徴がある。したがって、対人コミュニケーション嗜好が高いほど、積極的にオンライン・コミュニティでコミュニケーションをするので、結果として多くのサポートを受領することになるのであろう。

表VI—7 コミュニケーション傾向の3群間の違い

	平均値			一元分散分析 F 値
	SF関連オンライ ンコミュニティ の非利用者	インターネット サポート受領低 群(N=34)	インターネット サポート受領高 群(N=35)	
家族の問題は家族の中で解決すべき である a	2.69	2.91	3.11	1.67
人と話すのが好きだ b	2.72	3.24	3.31	4.20 *
あまり親しくない人とでも会話を続け られる b	2.34	2.71	2.77	1.49

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

a 1~4の数値を取り、数値が高いほど反対であることを表している

b 1~4の数値を取り、数値が高いほど当てはまることを表している

⑤まとめ

最後に、どの要因が最も強くインターネット・サポート受領を規定しているのかを明らかにするために、インターネット利用者の中で、インターネット・サポート受領（問 25 合計）を目的変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、パートナーからのサポート、家族に関して話ができる友人などのネットワーク規模、家族内ストレス源、家族外ストレス源、家族関係満足度、「家族の問題は他の人に頼らず家族の中で解決すべきである」という意見への反対度（4段階評定、「そう思う」=1点、「どちらかといえばそう思う」=2点、「どちらかといえばそう思わない」=3点「そう思わない」=4点）、対人コミュニケーション嗜好（「人と話すのが好き」と「あまり親しくない人とでも会話を続けられる」への評定値の合計）、ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティの閲覧頻度（4段階評定）である。結果は、表VI—8の通りである。すなわち、①パートナーからのサポートが少ないほど、②家族内ストレス源が多いほど、③対人コミュニケーションが好きほど、④ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティをよく閲覧するほど、多くのインターネット・サポートを受けていた。

育児中の母親を対象とした調査（宮田・浦・長谷川，2001）でも、閲覧頻度やストレス源が強い影響力を持っており、閲覧回数が多いほど、また育児関連ストレスが高いほど育児関連のオンライン・コミュニティで多くのサポートを得ていたが、同じ傾向がステップファミリーに関しても認められる。ただし、育児中の母親は夫や家族、友人から多くのサポートを受けている人ほどインターネットでもサポートを多く受けており、「サポートを多く受ける人は、ますます多く受ける」という傾向が見られた。それに対して、ステップファミリーではパートナーからのサポートの少ない人ほどインターネット・サポートを求める傾向があり、インターネットがサポートの補完的機能を果たしている点が大きな違いである。また、家族の問題を家族の中で解決すべきであると思う人、つまり内部的解決を重要視する人は、サポート量が少ないが、そういった人々はオンライン・コミュニティで自分の悩みについて自己開示ができないために、オンライン・コミュニティで得られるサポ

表VI—8 インターネット・サポート受領を従属変数とした重回帰分析

	標準化係数ベータ
パートナーからのサポート	-0.173 *
ネットワーク規模	-0.108
家族内ストレス源	0.254 *
家族外ストレス源	0.112
家族関係満足度	0.170
家族の問題は家族の中で解決すべき	0.109
対人コミュニケーション嗜好	0.148 †
ステップファミリーに関する電子掲示板などを見る頻度	0.629 **
R <sup>2</sup>	0.633
調整済みR <sup>2</sup>	0.597

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

ートが少ないと考えられる。オンライン・コミュニティでは他者の書き込みを見ているだけでも、同じ悩みを持つ人がいることを知り、情緒的なサポートを受けることにはなるが、積極的にサポートを受けたいと思うならば、やはり自己開示が必要であることが推測される。自分の悩みや問題を皆の前に書くことで、自分に適したアドバイスをしてくれる人や同じ経験をしている人をさがすことができるのだから。

#### 4. サポートの受領とストレスとの関連

ここでは、本調査の対象者のソーシャル・サポートの授受とストレス特性との関連を検討する。そのため、まずパートナーとの関係性に関する2つの設問と、インターネット上でのサポート関係に関する2つの設問について構造的な把握を行う。次いで、それらの関係特性と、第5章で検討したストレス特性との関連についての仮説的なパス・モデルを提示し、その妥当性を検証する。そして、その関連性に及ぼす家族外ストレス源の調整効果についての分析を行う。これらの検討を通じて、ステップファミリー・メンバーのストレス状況への適応と、パートナーとの関係性、インターネットでの対人関係との関連を明らかにすることがここでの目的である。

##### (1) パートナーとの関係についての構造的な把握

パートナーとの関係性に関する設問の1つめは問10である。これは、現在のパートナーとの関係の特質について問うものであり、表VI-9に示した6項目からなる。これら6つの項目に示されたことがらについてパートナーがどれくらい当てはまるのかを「あてはまらない」(1点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「ややあてはまる」(3点)、「あてはまる」(4点)の4段階で評定するよう求めた。

パートナーとの関係性に関する設問の2つ目は問11である。これはパートナーと一緒に行動についてその主観的な頻度を問うものであり、表VI-10に示した4項目からなる。これら4項目に示されたことがらをパートナーと一緒にすることがどれくらいあるのかについて「そのようなことはない」(1点)、「あまりない」(2点)、「時々ある」(3点)、「よくある」(4点)の4段階で評定するよう求めた。

これら2つの設問への解答について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果を下に示す。なお、いずれの分析においても因子数決定の基準は固有値1以上とした。

問10への回答についての因子分析の結果を表VI-9に示した。第1因子は、これに高く負荷している項目の内容から、パートナーから得られるサポートの程度を表す因子であると解釈できる。よって、この因子を「パートナーからのサポート」因子とする。第2因子は、これに高く負荷する項目の内容からパートナーとの葛藤の程度を表す因子であると解釈できる。よってこの因子を「パートナーとの葛藤」因子とする。なお、これら2因子の間の因子間相関は-.514であった。

次に問11への回答についての因子分析の結果を表VI-10に示した。分析の結果、固有値が1以上の因子は1つであり、また1因子だけで全分散の60.17%を説明していたため、問11は1因子構造とみなすこととした。表に明らかなとおり、いずれの項目もパートナーと一緒に時を過ごすことのできる行動を表すものである。よって、この1因子を「パートナーとの同伴行動」因子とする。

**表VI-9 パートナーとの関係特性についての因子分析結果**

項 目	因子	
	I	II
パートナーからのサポート		
助言やアドバイスをしてくれる	.842	.009
心配・悩み事を聞いてくれる	.733	-.065
能力や努力を高く評価してくれる	.685	.012
パートナーとの葛藤		
いろいろ面倒をかける	.114	.892
イライラさせる	-.127	.593
文句や小言をいう	-.010	.526

**表VI-10 パートナーとの同伴行動についての因子分析結果**

項 目	因子
	I
一緒に旅行やドライブに行く	.871
共通の趣味(スポーツ・音楽・映画など)を楽しむ	.665
一緒にショッピングに行く	.634
夫婦一緒に友人を招いたり、招かれたりする	.571

## (2) インターネット上でのサポート関係についての構造的な把握

インターネット上でのサポート関係についての設問は問25と問26の2つである。いずれも、ステップファミリーに関連する電子掲示板、電子会議室、チャットなどでのサポートのあり方に関するものであり、問25は種々のサポートをどれくらい受けたか、問26は種々のサポートをどれくらい提供したかを、それぞれ問うものである。

これら2つの設問について、上記と同様の因子分析を行った結果が表VI-11と表VI-12である。いずれの分析においても抽出された因子は1つであり、問25に関しては1因子で全体の84.8%、問26に関しては1因子で全体の87.0%を説明していた。よって、問25の項目は「インターネット・サポート受領」因子を、問26の項目は「インターネット・サポート提供」因子をそれぞれ表すものとする。

**表VI-11 インターネットでのサポート受領についての因子分析結果**

項 目	因子
	I
インターネット・サポート受領	
ステップファミリーの悩みに共感し励ましてくれる	.940
ステップファミリーで悩んでいるのが自分一人 でないことをわからせてくれる	.927
子育てに関する情報を与えてくれる	.916
結婚生活に関する情報を与えてくれる	.787

**表VI-12 インターネットでのサポート受領についての因子分析結果**

項 目	因子
	I
インターネット・サポート提供	
ステップファミリーで悩んでいるのが自分一人 でないことをわからせる	.947
ステップファミリーの悩みに共感し励ます	.942
結婚生活に関する情報を与える	.884
子育てに関する情報を与える	.864

### (3) 調査対象者のパートナーとインターネットをめぐる関係性の特徴

上で見出された、パートナーからのサポート、パートナーとの葛藤、パートナーとの同伴行動、インターネット・サポート受領、インターネット・サポート提供の5つの因子に、それぞれ高く負荷する項目群の平均値を算出し、それらをそれぞれの因子の意味する関係特性得点とした。それぞれの関係特性についての記述統計量を表VI-13に示す。

またこの表VI-13には、仕事以外でのメール受信頻度(問20)、仕事以外でのメール送信頻度(問21)、電子掲示板等の閲覧頻度(問22)、ステップファミリー関連の電子掲示板等の閲覧頻度(問23、表ではSF掲示板等の閲覧)、ステップファミリー関連の電子掲示板等への書き込み頻度(問24、表ではSF掲示板等への書き込み)の平均値と標準偏差も示した。これらの設問はいずれも6段階で主観的な頻度を問うものであり、メールの送受信については1週間の平均として「受信(発信)しない」(1点)、「1~2通」(2点)、「3~5通」(3点)、「6~10通」(4点)、「11~20通」(5点)、「20通以上」(6点)の6段階、掲示板等の閲覧、書き込みについては、「全く見ない(書き込みをしない)」(1点)、「1ヶ月に1回以下」(2点)、「1ヶ月に数回」(3点)、「1週間に数回」(4点)、「1日1回くらい」(5点)、「1日に数回以上」(6点)の6段階とした。なお、この表でインターネット・サポートの授受やメールの

送受信、掲示板との閲覧、書き込みについての調査対象者数が 98 名（あるいは 97 名）となっているのは、仕事以外でインターネットを利用していない対象者を分析から除外したためである。

表から、関係特性についてはいずれの測定項目群の  $\alpha$  係数も高く、十分な内的整合性を有していることが分かる。既述のとおり、これらのパートナーとの関係特性ならびにインターネット・サポートの授受は、いずれも 4 段階で評定を求めたものである。したがって、表 VI-13 から調査対象者の全体的な特徴として次のようなものが読み取れる。まず、パートナーとの関係については相手からのサポートはかなり多く受けていると評価しており、同伴行動についてもある程度高く評価している。しかしパートナーとの葛藤は必ずしも低いとはいえない。また、インターネット上でのサポートの授受に関しては、それを受け取ることは少しはあるものの、それを提供することは極めて少ない。

**表 VI-13 パートナーとインターネットをめぐる関係性についての記述統計**

	n	$\alpha$	平均	標準偏差
パートナーからのサポート	113	.80	3.32	.70
パートナーとの葛藤	113	.72	2.27	.77
パートナーとの同伴行動	112	.77	2.98	.69
インターネット・サポート受領	95	.94	2.08	1.06
インターネット・サポート提供	95	.95	1.61	.85
メール送信	98	—	3.30	1.53
メール発信	98	—	3.27	1.44
電子掲示板等の閲覧	97	—	3.62	1.83
SF 掲示板等の閲覧	98	—	3.14	1.79
SF 掲示板等への書き込み	97	—	2.08	1.37

インターネットの利用状況についての平均値を見ると、メールの送受信や電子掲示板等の閲覧については、ある程度活発に行われている様子が見られるけれども、掲示板等への書き込みはあまり行われていないといえるだろう。

次にこれら諸変数間の相関を表 VI-14 に示した。この相関関係において興味深い点は、パートナーからのサポートとインターネット・サポート受領との間に負の相関、パートナーとの葛藤とインターネット・サポート受領との間に正の相関が、それぞれ認められる点である。パートナーからのサポートが十分でない場合に、インターネットを通じて積極的にサポートを得ようとするという、補償的な関係の存在が示唆される。また、パートナーとの関係が葛藤を含むものになった場合に、インターネットで得られるサポートへの依存が高まる可能性も示唆される。

さらに、パートナーからのサポートもパートナーからの葛藤も、インターネット利用頻

度に関連する 5 変数とはほとんど相関を持たない。そして、パートナーとの同伴行動は電子掲示板等の閲覧頻度と正の有意な相関を示している。このことは、インターネット利用そのものは、パートナーとの関係が望ましいものではないことの補償行為として現れたものではないことを示唆する。つまり、パートナーとの関係がサポートティブなものではなかったり、葛藤を含むものであったりするため、インターネットで提供されるバーチャルな世界へと逃げ込んだ結果として、見かけ上パートナーとの関係変数とインターネット・サポート受領との相関が高まったということではない。そうではなく、パートナーからのサポートの欠如を補償するものとしてインターネット・サポートが捉えられていることが示唆されるということである。

**表VI-14 パートナーとインターネットをめぐる関係性についての相関**

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. パートナーからのサポート									
2. パートナーとの葛藤		-.44 **							
3. パートナーとの同伴行動		.49 **	-.15						
4. インターネット・サポート受領		-.29 **	.24 *	-.08					
5. インターネット・サポート提供		-.09	.10	.04	.60**				
6. メール受信		.01	.01	.13	.10	.20			
7. メール発信		.13	-.07	.14	.06	.22 *	.90 **		
8. 電子掲示板等の閲覧		-.06	.04	.24 *	.48**	.55 **	.22	.20	
9. SF 掲示板等の閲覧		-.15	.08	.12	.70**	.70 **	.16	.14	.77**
10. SF 掲示板等への書き込み		-.11	.07	.03	.55**	.74 **	.11	.11	.54** .77 **

このような示唆のより直接的な検討のため、インターネット利用に関連する 5 変数の影響をコントロールした上で、パートナーからのサポート、パートナーとの葛藤とインターネット・サポート受領との偏相関を求めた結果が表VI-15である。表に明らかなおとおり、どの偏相関も有意な傾向を示している。パートナーからのサポートが少ないと感じたり、パートナーとの葛藤を強く感じたりしている調査対象者は、インターネット・サポートを積極的に求めようとすることが示唆されたといえる。

**表VI-15 パートナーからのサポート、パートナーとの葛藤とインターネット・サポート受領との偏相関**

	インターネット・サポート受領
パートナーからのサポート	-.20 <sup>+</sup>
パートナーとの葛藤	.19 <sup>+</sup>



#### (4) 各要因間の関連についてのパス・モデル

以上に見てきた調査対象者の対人関係特性と、第5章で検討したストレス特性との間にはいかなる関連があるのだろうか。この点を明らかにするため、まず両特性群間の相関を求めた。その結果を表VI-16に示す。そして、この相関関係に基づいて、各要因間の関連性について図VI-3に示したパス・モデルを想定した。このモデルは、パートナーとの関係性変数が家族関係満足度を仲介してストレス反応に影響を及ぼし、さらにこれら諸変数がインターネット・サポート受領に影響するという一連の過程を示している。

**表VI-16 調査対象者の対人関係特性とストレス特性との間の相関**

	家族内 ストレス源	家族外 ストレス源	家族関係 ストレス反応	満足
パートナーからのサポート	-.35**	-.14	-.25**	.46**
パートナーとの葛藤	.37**	.22*	.31**	-.36**
パートナーとの同伴行動	-.33**	-.01	-.22*	.38**
インターネット・サポート受領	.30**	.21*	.27*	-.19
インターネット・サポート提供	.17	.20*	.18	.02

インターネット・サポート受領が家族関係満足度やストレス反応に影響を及ぼすのではなく、これらから影響されると考える根拠として2つのものをあげることができる。第1に、この変数がソーシャル・サポートの利用可能性ではなく、実行されたサポートの程度を表すものである点である。従来、この実行されたサポートはストレス反応と正の相関を示すことが多くの研究で報告されており、それはストレス反応の程度が高くなるにつれてより多くのサポートを周囲に求めようとするものの現れであると考察されている(浦, 1992)。第2に、表VI-14と表VI-15に示されたように、パートナーからのサポートとインターネット・サポート受領との間に負の関連が認められている点である。先述のとおり、この負の関連性はパートナーからのサポートが期待できない場合に、インターネット・サポートへの依存が高まることを示しているものと考えられる。これら2つの理由から、本研究ではインターネット・サポート受領は、ここで想定する一連の影響過程の最終的な変数として位置づけることとした。

またここでは、家族外ストレス源の程度を、想定された一連の影響過程の外生変数として各変数間の関連の強さを調整する働きをするものと捉えた。そして、調査対象者を家族外ストレス源得点の低群と高群に分類し、それぞれの群でパス・モデルを検討することとする。

なお、家族内ストレス源については、ここではそれをパス・モデルの中に組み込むことも、外生変数として扱うこともしていない。その理由は、これが家族関係満足度とかなり

近い変数であるからである。もちろん、ストレス源としての家族関係のあり方と結果として生じる家族関係満足度とは、概念レベルでは異なったものである。しかし、家族内ストレス源の程度が高ければ家族関係満足度が低下することは自明のことであり、検証するまでもない。実際、表VI-2-5には両者の間に極めて高い負の相関が認められることが示されている。また、同様の理由で、この家族内ストレス源の程度をここで検証しようとする一連の影響過程の外生変数として扱うことにも無理がある。よって、ここでは家族内ストレス源得点の高低群別のパス・モデルの検証は行わない。

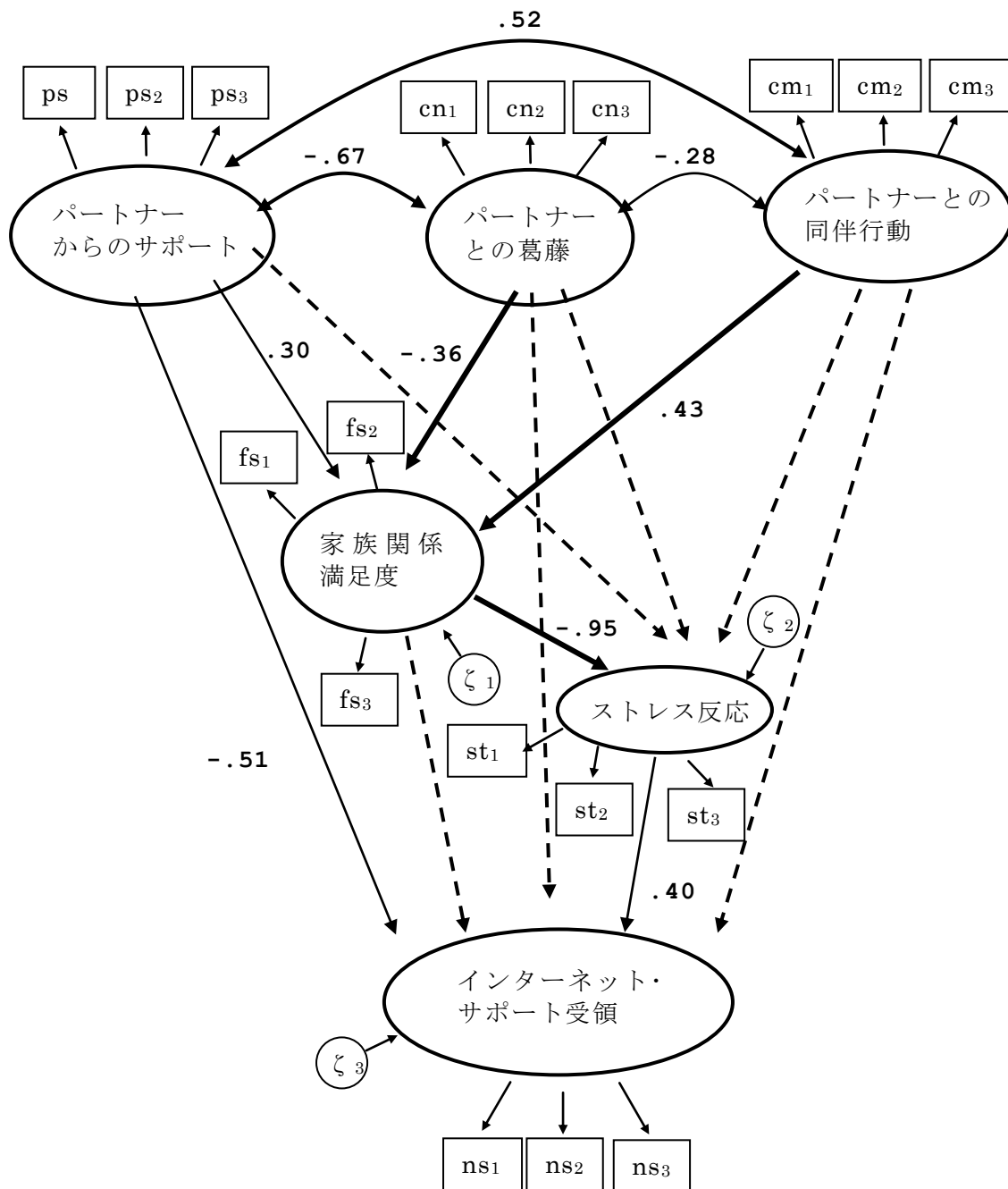
#### (5) パス・モデルの妥当性の検証

想定されたパス・モデルの妥当性の検証のため、全調査対象者のデータに関して潜在変数を含む構造方程式モデルを用いた分析を行ったところ、このモデルのデータとの適合性指数はCFI=.948、RMSEA=.062であり、十分な適合性を持つことが示された。

各潜在変数間の関連については、図VI-3に矢印で示した。図中太線の矢印はそのパス係数が有意であることを、細線の矢印はそのパス係数が有意な傾向にあることを、破線の矢印はそのパス係数が有意ではないことをそれぞれ示している(以下、同様の分析結果では同じ表記法)。

図から明らかのように、パートナーとの関係特性は、調査対象者の家族関係満足度に密接に関連する。パートナーからのサポートをより高く認知するほど、パートナーとの葛藤をより低く認知するほど、さらにパートナーとの同伴行動をより多く認知するほど、調査対象者は家族関係に高い満足を感じていることが示唆される。そしてこの家族関係満足度は調査対象者のストレス反応を抑制し、さらにこのストレス反応を仲介してインターネット・サポート受領の程度に関連を持つ。すなわち、家族関係への満足度が高いほどストレス反応が低くなりそれがインターネット・サポートへの依存を弱める可能性が示唆される。逆にいえば、パートナーとの関係性が悪化するほど、家族関係満足度が低下し、ストレス反応が増加し、インターネット・サポートへの依存性が高まるという一連の影響過程の存在が示唆されているといえる。

さらに興味深い点が、パートナーからのサポートとインターネット・サポート受領との直接的な関連が、家族関係満足度とストレス反応を仲介させてもなお有意な傾向を示したことである。調査対象者が、パートナーからのサポートの不足をインターネット・サポートで補おうとしていることをより直接的に示す結果であるといえる。

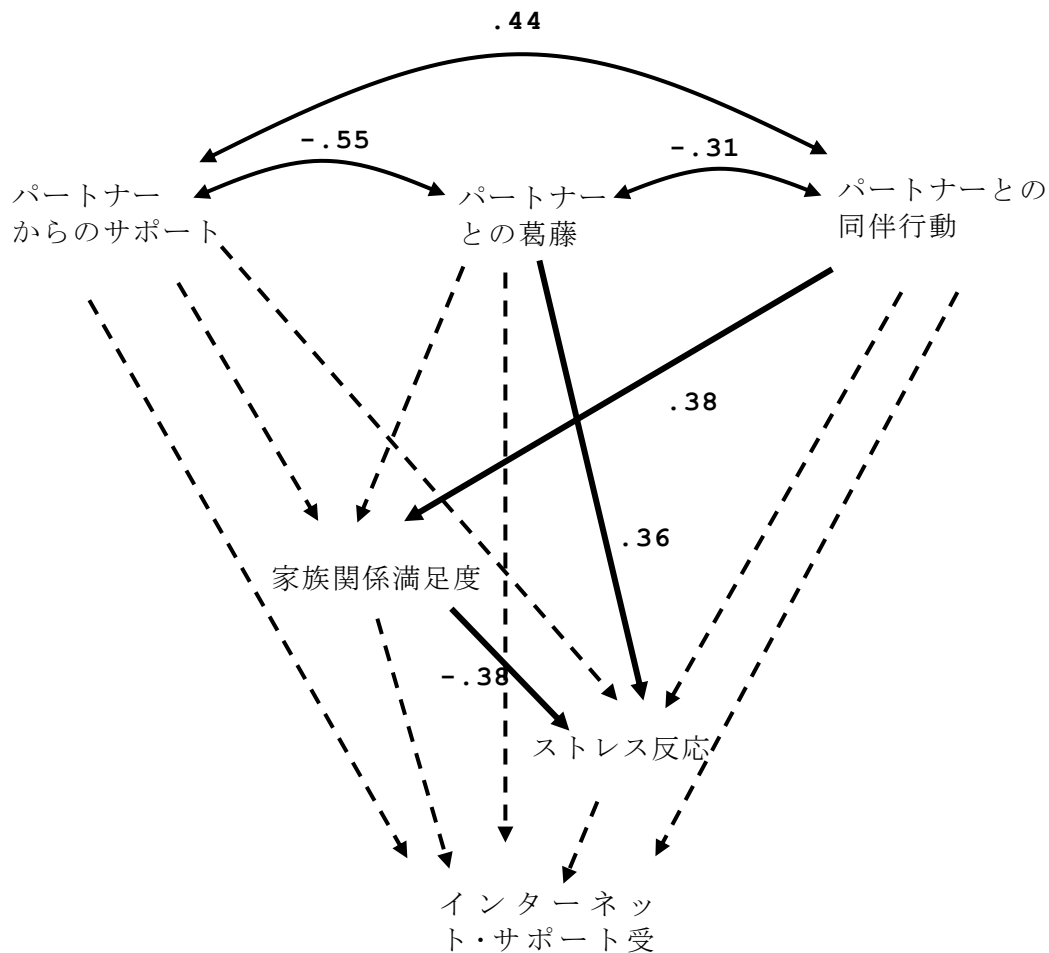


図VI-3 関係特性とストレス特性との間のパス・モデル

### (6) 家族外ストレス源の調整効果

上でその妥当性が確認されたパス・モデルに基づき、次いで、家族外ストレスの高い被験者群とそれの低い被験者群別に、諸変数間のパス解析を行った。なお、この検証においてはそれぞれの要因を潜在変数としてではなく顕在変数として扱った。その理由は、調査対象者を2群に分けた結果、分析対象となった調査対象者数が、家族外ストレス低群で5





図VI-5 家族外ストレス源高群における関係特性とストレス特性との間のパス・モデル

### (7) インターネット・サポート受領についてのさらなる検討

上述の結果は、インターネット・サポートとパートナーからのサポートとの間に補償的な関係のあることを示唆している。しかし上述の分析では、家族内ストレス源の影響は考慮されていない。それは、すでに述べたように、これが家族関係満足度との間に高い相関を持つ変数であることから、パス・モデルの検証には不適切なものであると考えられたからである。

とはいえ、表VI-16には家族内ストレス源とインターネット・サポート受領との間に正の有意な関係のあることが示されている。したがって、インターネット・サポートのあり方を検討しようとする際、この家族内ストレス源の影響を無視するわけにはいかない。そのため、ここでは家族内ストレス源、家族外ストレス源、パートナーからのサポート、ならびにインターネット・サポート受領の4変数だけを取り上げ、これら4変数間の関連を検討する。

上で検討したパス・モデルの結果から、本研究の調査対象者は、パートナーから十分なサポートが得られない場合にインターネット・サポートへの依存を高める可能性が推察さ

れた。しかしながら、このパートナーからのサポートとインターネット・サポートとの間には直接的なトレード・オフ関係があるというよりも、むしろ、パートナーからの十分なサポートが得られない場合に、ストレス源からの悪影響から逃れるために、インターネット・サポートへの依存を高めるという関係性があるものと予測される。そこで、ここでは調査対象者をパートナーからのサポートの高低によって2群に分け、それぞれの群でインターネット・サポート受領に及ぼす家族内ストレス源と家族外ストレス源の影響を検討することとした。

パートナーからのサポート低群と高群のそれぞれにおいて、インターネット・サポート受領を基準変数、家族内・外のストレス源を説明変数とした重回帰分析の結果を表VI-17に示した。

**表VI-17 インターネット・サポート受領を基準変とした重回帰分析の結果**

	全対象者(n=95)			パートナーからのサポート低群(n=47)			パートナーからのサポート高群(n=48)		
	$\beta$	t/F	p<	$\beta$	t/F	p<	$\beta$	t/F	p<
家族内ストレス源	.26	2.48	.05	.32	2.12	.05	-.02	.13	ns.
家族外ストレス源	.23	1.21	ns.	.13	.88	ns.	.12	.74	ns.
R <sup>2</sup>	.11	5.42	.01	.15	3.76	.05	.01	.28	ns.

表VI-17に示された結果は、家族内ストレス源に関して、上述の予測を支持するものである。パートナーからのサポート低群においては、家族内ストレス源が高まるほどインターネット・サポート受領が高まるという関係性が認められるのに対して、パートナーのサポート高群においてはそのような関係性が認められていない。パートナーから十分なサポートが得られない場合に、高まるストレスに対処するため人はインターネットから得られるサポートへの依存を高めるのである。

このように、家族内ストレス源に関しては予測が支持された一方で、家族外ストレス源に関しては予測を支持する結果は得られていない。パートナーからのサポートの程度によって、インターネット・サポート受領に差は認められなかったのである。その一方で、(6)の家族外ストレス源の調整効果における分析結果を見ると、家族外ストレス源低群においてパートナーサポートとインターネット・サポート受領との補償関係が認められているのに対して、家族外ストレス源高群ではこのような補償関係が認められていない。これらの結果は、インターネット・サポート受領に及ぼす、家族内ストレス源、家族外ストレス源ならびにパートナーからのサポート受領の3要因の交互作用効果を予測させる。この点についての検討は今後の課題である。

## (8) 総合考察—ステップファミリー・メンバーの対人関係、ストレスとインターネット

以上を示してきた結果から、今回調査対象となったステップファミリーメンバーの対人関係とストレスとの関係について、いくつかの興味深い点が示唆される。

まず第1に、パートナーとの同伴行動の重要性である。表VI-10に示された項目から明らかのように、この行動は直接的なサポート行動を全く含んでいない。にもかかわらず、パートナーとの同伴行動が家族外ストレス源の高い対象者においても家族関係満足度に対して有意な説明力を持ち、さらにはそれを仲介する形でストレス反応とも関連を示している。この結果は、直接的なサポート行動を含むパートナーからのサポートが、家族外ストレス高群では有意な説明力を失ったことと対照的である。家族外ストレスの影響の緩和にとってはパートナーからの直接的なサポートよりも、パートナーとともに過ごす時間が大きな意味を持つことを示す結果であるといえる。

興味深い第2の点は、パートナーとの葛藤と家族関係満足度との関連がさほど強いものではないことである。全被験者を対象とした分析におけるパス係数は有意な傾向にあるものの、さほど高い値を示していない。また家族外ストレスの低群と高群に分類した上での分析においては、どちらの群でもパートナーとの葛藤は家族関係満足度に直接的な関連を示していない。上で触れたように、パートナーからのサポートも常に大きな影響力を持つとはいえないことと考えあわせるならば、パートナーからのサポートやパートナーとの葛藤は普段から日常的に生じやすいものであり、家族関係への満足に影響するほどのインパクトを持たないといえるかもしれない、

第3に、家族関係満足度への影響力の低さの一方で、パートナーとの葛藤は家族外ストレス高群においてストレス反応に対して直接的な関連を示している点が挙げられる。既述のとおり、ストレス反応は最近1週間ほどの心身の状態を表すものであり、パートナーとの日常的なやりとりから生じる葛藤が反映されやすいと考えることができる。そのようなパートナーとの葛藤が、家族外での種々の葛藤の高まりとの間で相乗的な悪影響を生じさせる可能性が示唆される。

さらには第4の点として、パートナーとの葛藤とパートナーとの同伴行動との関連がさほど高くないことが挙げられる。図VI-3から図VI-5のどれを見ても、この2変数の相関はかなり低い。

これら第1から第4までの点を考え合わせるならば、今回の対象となったステップファミリーメンバーのパートナーとの関係性とストレス反応との関連について次のような推察が可能となる。まず、パートナーとの間で日常的に生じる葛藤はストレス反応を高めるものの、それが家族関係満足度に及ぼす影響はさほど大きくない。また、そのような日常的な葛藤は必ずしもパートナーとの同伴行動の頻度を低める働きをするわけではない。言い換えれば、パートナーとの同伴行動はかなり安定的に推移するといえる。そして、そのような同伴行動が安定的に高い水準で維持されるならば、そのことが家族関係満足度を高め、それが結果として、パートナーとの葛藤によって高められたストレス反応を抑制する働き

をすると考えることができる。

最後に興味深い第5の点として、一連の検証結果によってパートナーからのサポートの低さがインターネット・サポートへの依存を促す可能性が示唆された点をあげておきたい。全被験者を対象とした分析と家族外ストレス低群での分析において、これら2つの要因間に負の関連が見出されている。また、パートナーからのサポートが十分に得られない対象者においては、家族内ストレス源の高まりにつれて、インターネット・サポート受領も高まることが示された。パートナーからのサポートが十分に得られず、また家族内ストレス源も高まるということは、調査対象者にとって家族内にサポート資源を求めることは不可能あるいはきわめて困難な状況であるということである。そのようないわば四面楚歌の状況において、調査対象者はインターネットから得られるサポートへの依存を高めることで問題解決を図ろうとしているのかもしれない。

先述のとおり、本研究ではインターネット・サポートを実行されたサポートとして測定しており、また今回の調査が横断的なデザインでデータを得たものである。そのため、これらのサポート獲得行動がストレス反応の抑制にいかなる効果を持つかについて現段階では明快な答えは得られない。

しかしながら、インターネット・サポートの受領がネット利用者の自尊心の高揚を促す結果、長期的には抑うつ傾向を抑制する働きを示す先行研究がある(宮田・浦・長谷川, 2001; 浦・宮田・長谷川, 2000)。その先行研究での調査対象者は就学前の子どもを持つ母親であり、今回の対象者とは経験するストレスの質や対人的な環境にかなりの違いのあることが予想される。したがって、その結果をステップファミリーメンバーにとってのインターネット・サポートの機能に敷衍することには慎重であるべきだろう。しかし、その研究においても育児関連ストレスの高い対象者ほど多くのインターネット・サポートを受領するという結果が得られており、今回得られた結果との類似点も指摘できる。したがって、より長期的な縦断的デザインによって、ステップファミリーメンバーにとってのインターネット・サポートの機能を検討するならば、そのストレス抑制効果が確認される可能性は低くないといえるだろう。この点についての検討は今後の重要な課題である。

## 5. インターネット・サポートの提供

### (1) インターネット・サポート提供の意義

オンライン・コミュニティは物理的な報酬がなく、境界が曖昧で、関係の拘束性が低いので、組織や集団に比べて帰属意識を強化する要因は少ない。そのため、サポートは求めるが自分からはサポートを提供しないと言うフリーライダーの問題が生じやすい。しかし、提供されるサポートが少なければ、オンライン・コミュニティのサポート機能は成立しなくなり、結局参加者全員が利益を受けられないことになる。

では、どういう動機付けがあれば、サポートを提供するのであろうか。以下の4つの動



機が考えられる。

#### ①期待された互惠性 (Kollock, 1999)

自分が情報やサポートを提供することと引き替えに有効な情報やサポートを得られるだろうことを期待して、提供することがある。つまり、お返しを期待してサポートを提供することもある。たとえば、定期的にアドバイスや情報を提供する人は、助けを求めた場合により多くの助けをより早く受容することがわかっているが(Rheingold, 1993)、これは以前に助けられた人が互惠性に基づいて助けるようになるからであろう。ただ、自分がサポートを提供して利益を受けた特定の相手からではなく、コミュニティの誰かからお返しをしてもらうことを期待している場合もある。たとえば、諺の「天に徳を積む」に示されるように、「自分がだれかにサポートを提供すると、いつかは自分にも他の人がサポートを提供してくれるだろう」という一般的な互惠性の規範に基づいてサポートを提供することが考えられる。特に、オンライン・コミュニティにはどこにいても関われるというコストの低さ、サポートの交換が他の参加者からも見えるという技術的・構造的条件がこのような一般的な互惠性の規範を生じさせていると考えられる(Wellman & Gulia, 1999)。

#### ②アイデンティティの表出 (Kollock, 1999)

自分の評判を高めたい、尊敬されたい、地位を獲得したいという動機付けによりサポートを提供することもある。オンライン・コミュニティでサポートを提供して貢献することはコミュニティの参加者に見え、それが認められる限りにおいて、コミュニティでの自分のプレステージを高めたいという動機付けが高められ、サポートを提供すると考えられる。

#### ③自己効力感

自分が環境に何らかの効果を及ぼしたという感覚を得るために価値あるサポートを提供する場合もある。規則的に質の高い貢献をオンライン・コミュニティに行うことで、人は自分がオンライン・コミュニティに影響を与えていると信じやすくなり自分が役立つ人間だという自己イメージを支持することを助けることになる。この効力感が動機付けを高め、自分が貢献したことでコミュニティの変化を観察できる範囲内で貢献しようとする気持ちが増加する。オンライン・コミュニティのサイズが大きくなると参加者(自分の貢献を見ている人)が増え自分の行動の潜在的な影響力が大きくなるので、人間はより貢献したいと動機づけられる。

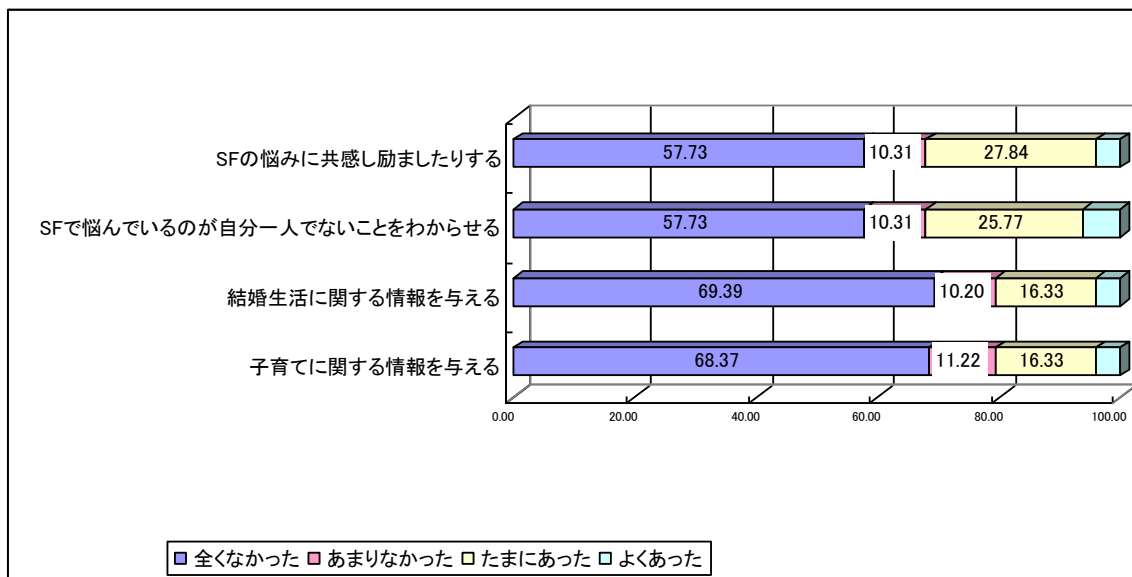
#### ④オンライン・コミュニティへの愛着や関与 (池田, 1997)

「コミュニティの一員だ」というコミュニティへの関与が強いと、サポートを提供しやすい。オンライン・コミュニティでは、匿名でコミュニケーションができる点やコミュニケーションの相手との間に距離があることから、物理的な安全を感じ、画面の向こう側にいる未知の相手に隣人以上の親近感を抱くことがある。そうした人々にさらに自己開示をしたり、強い魅力を感じる。また、キーボードに向かうと、自分自身や伝えようと言う感情に集中できる。さらに、相手のペルソナを理想化し続けることもできる(Walther, 1994)。こういった特徴からオンライン・コミュニティに対する関与や愛着が高まりやすく、その

故にサポートの提供が生じると考えられる。

## (2) インターネット・サポート提供の実態

インターネット利用者 98 人に、調査の前の一ヶ月にどのようなサポートをオンライン・コミュニティで提供したか、その頻度を評定してもらった（図VI—6 参照）。情緒的サポートでは5割強、情動的サポートでは6割強が全く提供していなかった。受領に比べて提供する人が少ないことがよくわかる。中でも、サポートの受領と同様に、情動的サポートの提供が少ないことがわかる。一般的にどのようなオンライン・コミュニティであっても、サポートの提供は受領よりも少ない傾向があるが、ステップファミリーのオンライン・コミュニティも同じ傾向を示している。



図VI—6 インターネット・サポートの提供

## (3) だれがサポートを提供しているのか

子育て中の母親を対象にした調査では、当該オンライン・コミュニティでの発言頻度が高いほど、またオンライン・コミュニティのメンバーであるというアイデンティティが高いほど、インターネット・サポートを提供する傾向があった。また、サポート提供理由 9 項目から 1 つを選択してもらい、理由別のサポート提供量を分析したところ、「以前オンライン・コミュニティのメンバーが私にサポートを与えてくれたので今度は私が誰かのために役立ちたいと思うから」を理由とした人のインターネット・サポート提供量が最も多く、次に「他の人と情報を共有したことで自分も得をするから」、「オンライン・コミュニティに愛着があるから」と続いた。このように、オンライン・コミュニティに関与の高い人が一般的互恵性や情報共有の意味を理解しているとインターネット・サポートの提供が促進

されるようだ（宮田・浦・長谷川, 2001）。

では、ステップファミリーのオンライン・コミュニティの場合はどうだろうか。

ステップファミリーのオンライン・コミュニティを見たことがあると回答した人々に前述の提供したインターネット・サポートの4項目について4段階で評定してもらった数値を合計してインターネット・サポート提供得点を算出した。数値は4～16点であり、数値が高いほどインターネット・サポートを提供していることを示している。そして、インターネット利用者の回答の点数の分布をみて、ほぼ半数になるように回答者を2分割した。つまり、この得点が7～16点の高いグループ（高群、35人、全体の50.7%、平均値10.54）と4～6点の低いグループ（低群、34人、全体の49.3%、平均値4.18）である。この他に、ステップファミリーのオンライン・コミュニティは見えていない人を1つのグループとして、先の2つのグループと比較をしてみよう。

ここでは、①インターネット利用、②パートナーを含む他者からのサポート、③本人の心理的状态、④本人のコミュニケーション傾向の4側面で、『提供高群』『提供低群』『非利用者群』の間にどのような違いがあるかを検討する。

#### ①インターネット利用

まず、仕事以外のインターネット利用頻度に3群で差があるかを見たのが、表VI—18である。『インターネット・サポート提供高群』が最も高く、続いて、『ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティの非利用者群』、『提供低群』となった。インターネット・サポートを多く提供している人の方が私的にインターネットをよく利用していることがわかるが、これはインターネット・サポートと同じ傾向である。

表VI—18 3群間のインターネット利用の違い

	平均値			一元分散分析 F 値
	SF関連オンラ インコミュニティ の非利用者	インターネット サポート提供低 群(N=34)	インターネット サポート提供 高群(N=35)	
仕事以外のインターネット利用頻度	5.45	5.21	5.86	4.49 **
電子メール受信数 b	3.38	2.82	3.69	2.89 †
電子メール送信数 b	3.34	2.85	3.60	2.46 †
オンライン・コミュニティ閲覧回数 c	2.31	3.39	4.91	24.30 **
ステップファミリー関連コミュニティの 閲覧回数 c	1.00	3.21	4.77	116.03 **
ステップファミリー関連コミュニティの 書き込み回数 c	1.00	1.62	3.35	52.77 **

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

a 2～6の数値を取り、数値が高いほど利用頻度が高いことを表す

b 1～6の数値を取り、数値が高いほど数が多いことを表す

c 1～6の数値を取り、数値が高いほど頻度が高いことを表す

メーリングリストを除いたメールの送受信数も、インターネットの私的利用頻度と同様に、『提供高群』、『非利用者群』、『提供低群』という順で多くの数を送受信していた。

これに対して、オンライン・コミュニティの閲覧回数、ステップファミリー関連のコミュニティの閲覧回数と、その書き込み回数は、『提供高群』が最も多く、次いで『提供低群』、『非利用者群』という順番であり、これは統計的に有意であった。

このように、インターネット・サポートを多く提供している人はステップファミリーだけではなく他のオンライン・コミュニティの活動にも積極的であり、かつ電子メールの送受信を含むインターネットの私的利用にも積極的である。つまり、インターネットを介した弱い紐帯の新規形成と既存の強い紐帯の維持の両方を行っていることがわかる。

#### ① パートナーを含む他者からのサポート

他者からのサポートに3群で差があるのかを見た結果が、表VI—19である。

まず、パートナーとの関係からみると、『提供高群』、『提供低群』、『非利用者群』の3群間で、パートナーからのサポートの受領には統計的に有意な差がなかった。

一方、オンライン上で、自分の家族についての悩みやグチを話せる特定の相手の数は、『提供高群』が最も多く平均値 2.83 が、次いで『提供低群』が 1.48、『非利用者群』が 1.46 であり、『提供高群』は他の2群に比べて統計的に有意に多くのネット友人を持っていることがわかる。さらに、対面でのコミュニケーションを含めて家族についての悩みやグチを話せる友人や知人等の人数（ネットワーク規模）を比較したところ、『提供高群』（平均 6.34 人）が最も多く、次いで『提供低群』が 4.65 人であり、『非利用者群』は平均 3.97 人と最も少なかった。

表VI—19 3群の対人関係や本人の心理的状態の比較

	平均値			一元分散分析
	SF関連オンライ ンコミュニティ の非利用者	インターネット サポート提供低 群(N=34)	インターネット サポート提供 高群(N=35)	F 値
パートナーからのサポート	10.62	9.85	9.74	1.66
オンライン上で悩みやグチを話せる 相手の数	1.46	1.48	2.83	25.53 **
ネットワーク規模	3.97	4.65	6.34	4.79 **

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

インターネット・サポートを多く受けている人の場合はネット上の友人は多くても日常生活での家族について話ができる人が少ない傾向があったが、自らがサポートを積極的に提供する人々はネット上だけではなく、日常生活でも家族の問題について話ができる相手が多いことがわかる。また、インターネット・サポート受容高群と比較しても、提供高群の方がオンライン上の友人・日常生活空間での友人が多いことから、インターネットでサポートを提供する人は積極的にコミュニケーションをし、対人関係を形成・維持していると思われる。

② 本人の心理的状态

表VI—20を見るとわかるように、家族内ストレス源については、『提供高群』が最も高く、10.20であり、『提供低群』(8.74)や『非利用者群』(8.32)に比べて多い傾向が見られた。それに対して、家族外ストレス源では『提供高群』が9.91と最も高く、次いで、『非利用者群』(9.64)、『提供低群』(7.65)という順であった。自分のストレス源が低いから、他者を助けるという心理的余裕があってサポートを提供していると思われがちであるが、ステップファミリーのオンライン・コミュニティで積極的にサポートを提供する人たちは自分自身も高いストレス源を持っていることがわかる。自分も高いストレス源を持っているからこそ、他の人の家族問題を理解し、適切なサポートができるのかもしれない。

また、家族関係満足度は3群で差がなかった。

表VI—20 3群による本人の心理状態の違い

	平均値			一元分散分析 F 値
	SF関連オンラ インコミュニティ の非利用者	インターネット サポート提供低 群(N=34)	インターネット サポート提供 高群(N=35)	
家族内ストレス源	8.32	8.74	10.20	2.71 †
家族外ストレス源	9.64	7.65	9.91	6.19 **
家族関係満足度	9.33	8.36	8.40	1.36

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

③ コミュニケーション傾向

ステップファミリーのオンライン・コミュニティで積極的にサポートを提供する人には、何か共通のコミュニケーション傾向があるのだろうか。

表VI—21 3群間のコミュニケーション傾向の違い

	SF関連オンラ インコミュニティ の非利用者	インターネット サポート提供低 群(N=34)	インターネット サポート提供 高群(N=35)	F 値
家族の問題は家族の中で解決すべき a	2.69	2.79	3.24	3.29 *
人と話すのが好きだ b	2.72	3.24	3.31	3.16 *
あまり親しくない人とでも会話を続けられる b	2.34	2.76	2.71	1.47

\* p<.05

a 1~4の数値を取り、数値が高いほど反対であることを表している

b 1~4の数値を取り、数値が高いほど当てはまることを表している

3つのコミュニケーション嗜好に対して4段階で当てはまるかどうかを聞いた結果が、表VI—21である。人と話すことが好きだという対人コミュニケーション嗜好は、『提供高群』が最も高く、次いで『提供低群』、『非利用者群』という順であった。また、『提供高群』が最も「家族の問題は家族で解決すべきである」という意見への反対が強く、次いで『提供低群』、『非利用者群』という順であった。このように、サポートを積極的に提供してい

る人は対人コミュニケーション嗜好が強く、家族の問題でも家庭外の人々も一緒になって考えようというコミュニティ・ソリューションを志向しているようだ。

#### ⑤ まとめ

最後に、どの要因が最も強くインターネット・サポート提供を規定しているのかを明らかにするために、インターネット利用者の中で、インターネット・サポート提供を目的変数とした重回帰分析を行った。説明変数は、パートナーからのサポート、家族に関して話ができる友人などのネットワーク規模、家族内ストレス源、家族外ストレス源、家族関係満足度、「家族の問題は他の人に頼らず家族の中で解決すべきである」という意見への反対度、対人コミュニケーション嗜好、ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティでの書き込み頻度（4段階評定）である。すると、結果は、表VI—22の通りである。すなわち、ステップファミリーに関するオンライン・コミュニティでよく書き込みをするほど、多くのインターネット・サポートを提供をしていた。

この結果は、2つのことを意味している。まず、オンライン・コミュニティに書き込みをするには一定のコンピュータ・スキルが必要であり、そのようなスキルが高い人がサポートを提供していることを表している。第2には、セルフヘルプ・グループではサポート受領者が段階を経て提供者になっていくというプロセスが考えられる（高木, 2000）ので、ステップファミリーのオンライン・コミュニティで書き込みが多い人ほど、そのオンライン・コミュニティに長く積極的に参加していることを意味し、既に受領者ではなくサポート提供の段階にあることを意味しているのかもしれない。

**表VI—22 インターネット・サポート提供を従属変数とした重回帰分析**

	標準化係数ベータ
パートナーからのサポート	0.076
ネットワーク規模(全体)	0.039
家族内ストレス源	0.158
家族外ストレス源	0.083
家族関係満足度	0.034
家族の問題は家族の中で解決すべき	0.121
対人コミュニケーション嗜好	0.057
ステップファミリーに関する電子掲示板などに書き込む頻度	0.670 **
R <sup>2</sup>	0.588
調整済みR <sup>2</sup>	0.547

\*\* p<.01

#### (4) インターネット・サポートの受領と提供の相互作用

育児中の母親を対象とした調査では、ネット・サポートを受けることがリアルな世界での他者に対するサポート提供を短期的にも長期的にも促すことが示された（宮田・浦・長谷川, 2001）が、ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティ参加者ではどうだろうか。インターネット・サポートの受領量と提供量の相関を算出したところ、

r=0.600(p<.01)で、有意な関連が見いだされた（表VI—23）。つまり、インターネット・サポートを多く受領しているほど多く提供している傾向が見られ、サポートの交換には互換性があることがわかる。

これは、セルフヘルプ・グループに見られるヘルパー・セラピー原則と一致する。すなわち、「援助をする人が最もよく援助を受け取る」という原則(Riessman, 1965)が本調査でも認められた。

ただ、本調査は1回限りの調査だったために、長期的にこのような傾向が続くのかどうかは明らかではない。また、生活空間で友人や家族からどの程度のサポートを受けているのか、またはサポートを提供しているのかを質問していないため、インターネット・サポートと生活空間でのリアル・サポートの授受の関連性を見ることができなかった。ステップファミリーに関連するオンライン・コミュニティへの参加年数が長くなるにつれて、インターネット・サポートを提供する側にもなったり、それがオンライン・コミュニティ内だけではなく、生活空間にまで拡大するようになるのかどうか、など今後のより詳しい検討が必要であろう。

**表VI—23 インターネット・サポートの受領・提供に関連する相関係数**

	インターネット・サポート受領	インターネット・サポート提供	パートナーからのサポート	パートナーとの葛藤
インターネット・サポート受領	1			
インターネット・サポート提供	0.60 **	1		
パートナーからのサポート	-0.29 **	-0.09	1.00	
パートナーとの葛藤	0.24 *	0.10	-0.51 **	1

\*\* p<.01 \* p<.05 † p<.1

### (5) インターネット・サポートを提供することの効果

オンライン・コミュニティにおいて互恵的な支援をしたり情報を提供することは、自尊心を向上させ、技術的専門性を示し、尊敬や地位を獲得し、お互いに助け合うという規範への反応を意味することになる(Wellman,1997)。

Maton(1988)は、多発性硬化症のグループと過食症匿名協会というセルフヘルプ・グループの研究から、サポートを受け取るのも与えるのも高い頻度を行う双方向的支援者(bi-directional supporters)が精神的健康がよいことを明らかにした。その理由として、以下の3つの解釈が考えられる。第1に、サポートを与えることにはサポートを受けるのと同じくらい利益がある。たとえば、他者を援助することを通じてサポートの社会的再強化、自己の価値が増大する感覚をもつことができる。第2に、他者へのサポートを与えることなくサポートを受領するばかりでは恩義や負い目を感じやすいが、双方向的支援者の場合はそのような恩義や負い目を感じなくて済む。第3に、精神的健康は双方向的支援の結果ではなく、双方向的支援を生み出す必須条件とも考えられる。つまり、双方向的支援をす

ることが原因で精神的健康が良くなるという結果になるのではなく、精神的健康が良いから双方向的な支援をするという因果関係が考えられる。

そこで、ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティにおいてインターネット・サポートを多く提供するほど、ストレス反応が低いと予想されたのだが、本調査の結果では、インターネット・サポート提供量とストレス反応との間には有意な相関が見られず( $r=0.179, n.s.$ )、統計的には無関係であった。

単純な関係は見られなかったので、表VI—24に示したように、インターネット・サポートの受容と提供で5つのグループに分け、それぞれのストレス反応を比較した。すると、受容と提供をともに積極的に行っている人々のストレス反応の平均値は36.83であり、他のグループに比べて高かった。

**表VI—24 受容と提供の高低によるグループ別のストレス反応の平均値**

	非利用者	提供低群	提供高群
非利用者	30.32(25人)		
受容低群		28.74(23人)	30.45(11人)
受容高群		29.00(10人)	36.83(23人)

2次元分散分析を行ったところ、統計的には有意味ではない(受容の主効果  $F=1.82, n.s.$ 、提供の主効果  $F=3.76, p<.1$ 、交互作用効果  $F=1.54, n.s.$ ) が、インターネット・サポートの受領と提供をともに積極的に行っている人々は、ストレスが高い傾向が見られた。

これは、先行研究とは反対の結果であった。ステップファミリーのオンライン・コミュニティにおいては、ストレス源、特に家庭内ストレス源が高いほどサポートを受容し、提供もしていることが明らかになったが、双方向的にサポートしている人は実際のストレスも高く、精神的健康も低い。

これらの人々は、ストレス源が高すぎるために、ストレス反応が低減するにはより長期的なサポートの交換が必要なかもしれない。また、ステップファミリー関連のオンライン・コミュニティは数の面でも、参加者数の面でもまだ少数であるため、積極的に双方向的サポートを行っている人々が限定されている。そのため、その人々に対して必要以上の精神的負担がかかっているのかもしれない。この点については、長期的な影響を検討するための縦断的研究が必要である。

さらには、ミドラルスキーは困難に直面してストレスを経験している人が他者にサポートを提供することによってそのストレスが低減される時、次の5つの機能のうちの1つ、あるいはいくつかが働いていると述べている。すなわち、①自分の困難にとらわれていたことから解放され、気を紛らわすことができる、②自分は有能で自分の人生は価値あるものだと感じさせる、③自分の能力が増進したと知覚させる、④気分を高揚・改善する、⑤自分と社会とのつながりを増す (Midlarsky, 1992)。本調査で用いた調査項目がこれらの機能を十分に測定できるものであったかどうか、今後、検討する必要がある。



ただし、セルフヘルプ・グループにおいては、サポートの受領者と提供者が共通の問題を抱えており、そのことから生じる深いレベルで実感を伴う共感と内的理解が、サポート提供者を特に効果的に機能させる。つまり、問題を抱えているそのこと自体が問題解決の一部となる。問題状況に伴う自らの体験的知識が、同じような体験を持つ仲間を援助する力になることによって自らを積極的に受け入れることが可能になり、自尊心が増すという（三島, 1998）。

したがって、単純にこの結果を解釈して、オンライン・セルフヘルプ・グループであるステップファミリー関連のオンライン・コミュニティで他者にサポートを提供することが精神的健康には意味がないとは言えないのである。

## **(6) 効果的なインターネット・サポートの交換のために**

最後に、インターネット・サポートの交換が盛んに行われて効果を持つためには、以下の2点を検討する必要がある。

1つは、オンラインとオフラインのサポートの統合である。今回の調査ではパートナーからのサポートが少なかったり、パートナーとの関係が悪化するほど、家族関係満足度が低下し、ストレス反応が増加し、インターネット・サポートへの依存性が高まるという一連の影響過程の存在が明らかになった。パートナーからのサポートの不足をインターネット・サポートで補おうとしていることが推測される。しかしながら、インターネット・サポートだけでは補いきれない場合も多々あるであろう。また、逆にオフラインのサポートだけでも不十分な場合もある。そこで、パートナーや家族、友人からのオフラインでのサポートと、同じ悩みを抱える人々の集まるオンライン・コミュニティでのサポートの両方を授受できることが、精神健康状態に効果をもたらすことが明らかなので（Cummings et al., 2002；宮田・浦・長谷川, 2001）、今後は利用者自身だけではなく、オンラインコミュニティの仕組みとしてもオンラインとオフラインのサポートの統合が重要である。

もう一つは、オンライン・コミュニティで積極的にサポートが提供されるために必要なオンライン・コミュニティの構造やあり方を考える必要がある。一般に、オンライン・コミュニティが成功するためには次のような9つの戦略が必要だといわれている（Kim, 2000）。すなわち、

- ①「目的」を定義し、明確に表現する
- ②柔軟性と拡張性を備えた集いの「場所」を作る
- ③意味あるメンバー「プロフィール」を作り、常に充実させていく
- ④様々な「役割」を準備する
- ⑤強力な「リーダーシップ」プログラムを作る
- ⑥適切な「ネチケット」を奨励する
- ⑦恒例の「イベント」を実施する
- ⑧コミュニティに「通過儀式」を導入する

#### ⑨メンバーによる「サブグループ」の運用を奨励する

これは、企業ベースのオンライン・コミュニティがビジネスとして成功する条件であり、ボランティアで参加するオンライン・セルフヘルプ・グループには必ずしもあてはまらないこともある。

たとえば、無制限に多くの参加者を受け入れると、信頼できない人も参加してくる可能性が高くなるのではないか。メンバー間でトラブルが起こり、サポートの授受どころが傷つけ合いの場になってしまうから、メンバーを限定した方がいいのではないかという考えもある。また、匿名だからフレーミングが起こるのだから、匿名をやめようという意見もあるかもしれない。そして、参加者は対等な関係なのだから、リーダーはいらないであろうという意見もあると思う。

しかしながら、本章の最初に記したようなインターネット・サポートの特徴を活かすためには、原則的に開いたコミュニティであることが重要である。その中で欠点をなくし長所を伸ばす仕組みや運営を今後考えていく必要がある。

#### 【注】

<sup>1</sup> セルフヘルプ・グループとは、「自分のことは自分でする」self-help と「相互に泰介ある」mutual help が組み合わされて「仲間同士が支え合うグループ」と考えられる。そして、その特徴は、①メンバーは共通の問題を持っている、②共通のゴールがある、③対面的な相互関係がある、④メンバー同士は対等の関係にある、⑤参加は自発的なものである、⑥専門家との関係は様々であるが、基本的にはメンバーの主体性を重んじる（久保，1998）。オンライン・コミュニティでは、対面コミュニケーションではなくコンピュータ・ネットワーク上のコミュニケーションを行うが、その他の上記の特徴をもつオンライン・コミュニティは、セルフヘルプ・グループとして見なすことができる（岡，2000）。一般的には、オンライン・セルフヘルプ・グループと呼ばれている。本調査で扱ったステップファミリー関連のオンライン・コミュニティもオンライン・セルフヘルプ・グループの特徴を備えていると思われる。

<sup>2</sup> 「平成 13 年度 I T による家族への影響実態調査」は内閣府国民生活局が全国に居住する 15 歳以上 70 歳未満の男女標本数 3,500 人を層化二段無作為抽出法で抽出し、2001 年 8 月 30 日から 9 月 9 日の間に郵送法で行った調査である。有効回収数（率）1339 人（38.3%）であった。詳細は以下を参照。

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/2002/0405it-chousa/gaiyo.html>

<sup>3</sup> ここでいうストレス源とは家庭内ストレス源と家庭外ストレス源の合計値であり、測定のための各項目は、表6-3-4を参照。

【参考文献】

- Cummings, J., Sproull, L., & Kiesler, S. (2002). Beyond Hearing: Where real world and online support meet. *Group Dynamics*, 6, 78-88.
- Constant, D., Sproull, L., & Kiesler, S. (1996). The kindness of Strangers: The usefulness of electronic weak ties for technical advice. *Organization Science*, 7, 2, 119-135.
- 池田謙一(編著)(1997).『ネットワークキング・コミュニティ』東京大学出版会
- Kim, A. J. (2000). *Community Building on the Web: Secret Strategies for Successful Online Communities*. Berkeley, CA : Peachpit Press. 伊東奈美子訳 (2001)『ネットコミュニティ戦略:ビジネスに直結した「場」をつくる』翔泳社
- Kollock, P. (1999). The economies of online cooperation: gifts and public goods in cyberspace. In M. Smith & P. Kollock (Ed.), *Communities in Cyberspace*. London: Routledge. 220-239.
- 久保絃章 (1998). セルフヘルプ・グループとは何か 久保絃章・石川到覚 (編)『セルフヘルプ・グループの理論と展開:我が国の実践をふまえて』中央法規出版, 2-20.
- Maton, K. (1988). Social Support, Organizational Characteristics, Psychological Well-Being, and Group Appraisal in Three Self-Help Group Populations. *American Journal of Community Psychology*, 16, 1, 53-77.
- Midlarsky, E. (1992). Helping as coping. In M.S.Clark (ed.) *Prosocial Behavior*. Newbury Park: Sage. 238-264.
- 三島一郎 (1998). セルフヘルプ・グループの機能と役割 久保絃章・石川到覚 (編)『セルフヘルプ・グループの理論と展開:我が国の実践をふまえて』中央法規出版 39-56.
- Mickelson, K.D. (1997). Seeking social support: Parents in electronic support groups. In S. Kiesler (Ed.) *Culture of the Internet*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. 158-178.
- 宮田加久子・浦光博・長谷川孝治 (2001). コンピュータ・ネットワーク上の対人関係が持つソーシャル・サポート機能についての実証的研究. 電気通信普及財団研究調査報告書第15号, 313-320.
- 野沢慎司 (1999).家族研究と社会的ネットワーク論. 野々山久也・渡辺秀樹編 『家族社会学入門:家族研究の理論と技法(社会学研究シリーズ:理論と技法)』文化書房博文社, 162-191.
- 岡知史 (2000). 21世紀のセルフヘルプグループとその調査方法.右田紀久恵・小寺全世・白澤政和(編)『社会福祉援助と連携』中央法規出版, 91-107.
- Riessman, F. (1965). The helper-therapy principle. *Social Work*, 10, 27-32.
- Rheingold, H. (1993). *The virtual community: Homesteading on the electronic frontier*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Skovhotl, T. M. (1974). The Client as Helper: A Means to Promote Psychological Growth. *Counseling Psychologist*, 4, 58-64.

- 高木修 (2000). セルフ・ヘルプ：助けることは助けられること 西川正之（編）『援助とサポートの社会心理学』 北大路書房 94-103.
- Turner, J. W., Grube, J.A., & Meyers, J. (2001). Developing an Optimal Match Within Online Communities: An Exploration of CMC Support Communities and Traditional Support. *Journal of Communication*, 51, 231-251.
- 浦光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—. サイエンス社
- 浦光博・宮田加久子・長谷川孝治 (2000). ネット・サポートとリアル・サポートのインターネットフェイスの検討(2). 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 44-45.
- Wallace, P. (1999). *The Psychology of the Internet*. Cambridge University Press. 川浦康志・貝塚泉（訳）(2001)『インターネットの心理学』 NTT 出版
- Walther, J.B. & Boyd, S. (2002). Attraction to Computer-mediated Social Support. In C. A. Lin & D. Atkin (Eds.), (2002). *Communication technology and society: Audience adoption and uses*. Cresskill, NJ: Hampton Press. 153-188.
- Wellman, B. (1997). An Electronic Group is Virtually a Social Network. In S. Kiesler (Ed.) , *Culture of the Internet*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.179-208.
- Wellman, B., & Gulia, M. (1999). Net surfers don't ride alone. In B. Wellman (Ed.), *Networks in the Global Village*. Boulder, CO: Westview, 331-366.

## Ⅶ. ステップファミリーにおける親子関係

全米ステップファミリー協会（Stepfamily Association of America）の創設者であるヴィッシャー夫妻は、その著書 *How to Win as a Stepfamily*（邦題『ステップファミリー——幸せな再婚家族になるために——』）において、ステップファミリーを次のように定義している。「一組の男女が共に暮らしていて、少なくともどちらか一方が、前の結婚でもうけた子どもを連れてくる家庭のこと」（訳書 16 頁）。その際、男女が正式に結婚しているかどうかにかかわらず、生活を共にしていることが重視されている。

いうならば、ステップファミリーには必ず「子どもの存在」が含まれており、その家族の抱える困難やストレス、そして家族としての喜びや成長にとって、子ども（たち）とどのような関係を取り結ぶのか、取り結び得るのかという点が重要な要素になっていると予想される。そこで、本章では、ステップファミリーにおける親子関係について考察してみたい。

### 1. 親子関係に関する質問項目

今回の調査における親子関係の扱いは、基本的な情報の収集に限定している。調査票の中に直接的に親子関係に関する項目として置いたのは数項目に過ぎない。子どもとの関係についての調査では、子どもの年齢にあわせて妥当な質問内容を変える必要が生じる。しかし、上記のような定義にかなうステップファミリーを広く募集した今回の調査では、多様な年齢層の子どもが含まれると考え、特定の年齢層に限定的な詳細な親子関係の質問を設定するのは難しいことが、質問項目を限定した理由である。ただし、調査回答者の子どものすべてと回答者のパートナーの子どもすべてについて（現在その子どもと同居しているか別居しているかを問わず、また現在のパートナーとの間の子どもか以前のパートナーとの間の子どもかを問わず）、一連の情報を幅広く尋ねている。

この章で特に注目したのは、「子どもに対するしつけや教育への関与度」（以下、**しつけ関与度**）である。以下では、対象となる子どもの性別、年齢、同別居、関係（自分の連れ子か、相手の連れ子か）という条件を考慮に入れて、回答者のしつけ関与度を検討する。次に、自分や相手の連れ子と、以前のパートナーとの交流状態（以下、**交流頻度**）についても注目して分析を行なった。

#### (1) 回答者とパートナーの子どもについて

親子関係については以下のような調査項目と手法によった。

まず、自身の子どもとパートナーの子どもを全て年齢によって整序してもらい、1番年長の子ども、2番目に年長な子ども、3番目……、という年齢の順位ごとにそれぞれ次の質問項目を設けた（巻末資料・調査票の問6参照）。

- ・子どもの性別

- ・年齢
- ・同別居（同居しているか、別居しているか）
- ・関係（その子が自分とパートナーの子なのか、以前の結婚での自分の子なのか、以前の結婚でのパートナーの子なのか）
- ・しつけ関与度  
（その子のしつけや教育にどの程度かかわっているか：全くかかわっていない／ときどきかかわっている／かなりの部分かかわっている／常にかかわっている）

## (2) 別居している子どもと実親の交流頻度

次に交流頻度については以下のような調査項目と手法によった（巻末資料・調査票の問7～9参照）。

最初に、子どもがその実親のいずれかと別居して生活するケースを以下の3類型に分ける。

- a) 自分自身に連れ子がある場合、その子と以前のパートナーとの関係
- b) 現在のパートナーに連れ子があつた場合、その子と実親との関係
- c) 現在のパートナーと現在別居している子どもとの関係

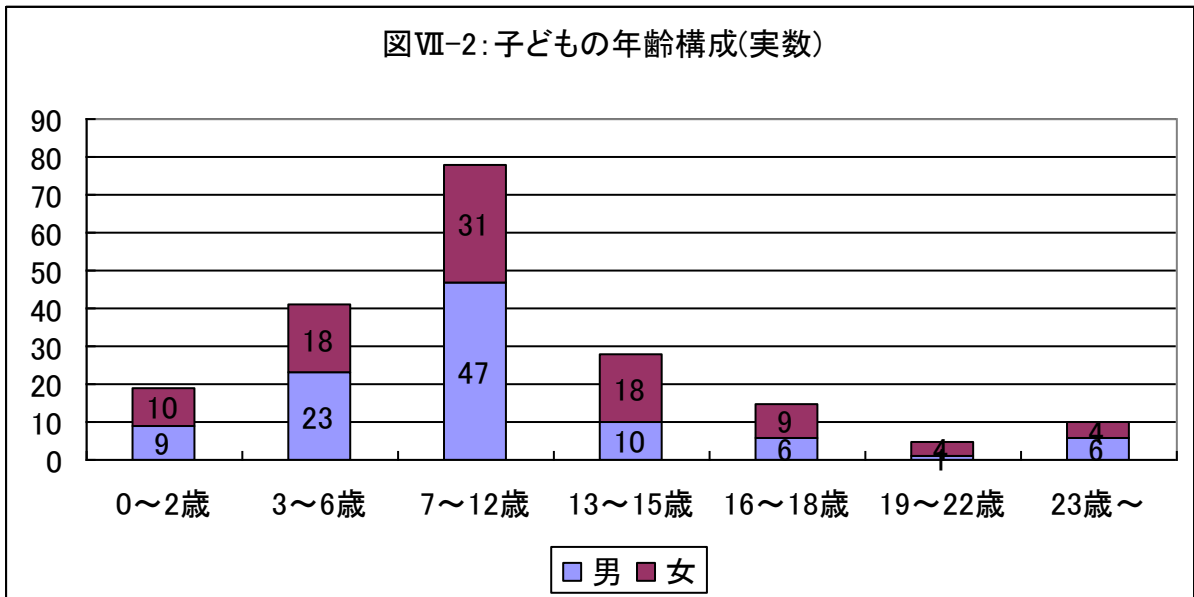
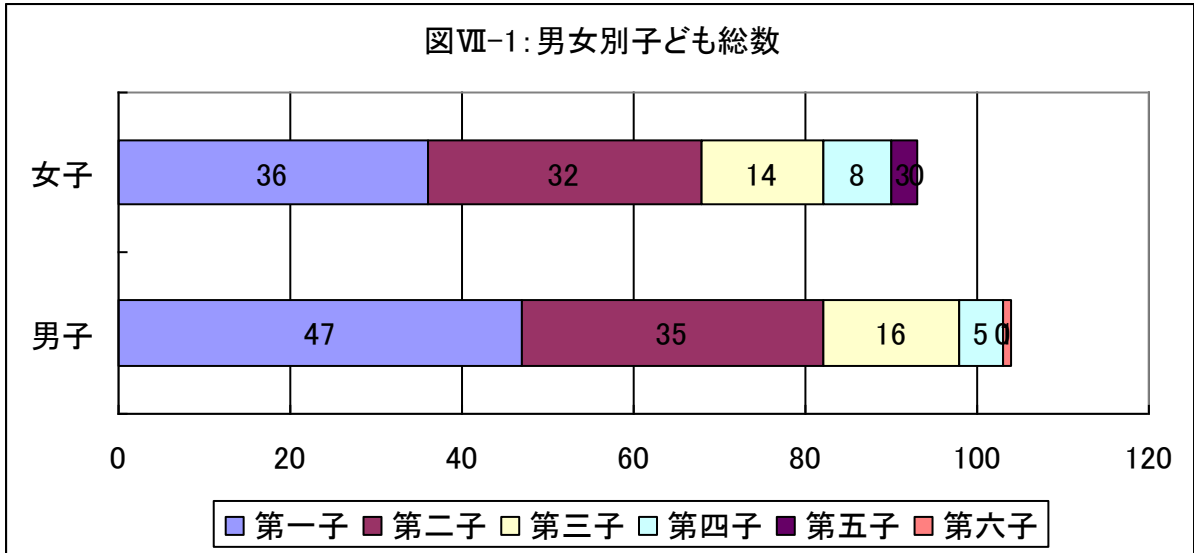
そしてそのそれぞれについて、交流の頻度を、4段階（全く交流がない／ほとんど交流がない／ときどき交流している／日常的に交流している）で回答してもらった。

## 2. 子ども関連データの再整理

先にⅢ章でも触れたが、ここではより詳細に見ておくことにしよう。Ⅲ章と同様に、本データは本人と現パートナーが共に回答しているケースが存在するため、重複を避けるために、基本的には女性回答者から得たデータのみに限定して以下の考察を行なう。

### (1) 子ども総数と性別

図Ⅶ-1に示したように、子どもの総数は197人で、男子は104人、女子が93人。内訳を確認してみると、第一子（自分かパートナーの子どものうち最年長）と第二子（自分かパートナーの子どものうち2番目に年長）が多く、これらをあわせると全体の76%強に達する。先にⅢ章でも述べたように、本調査においてはステップファミリーを形成した当初という区分のサンプルが多いことの反映と考えるとよかろう。



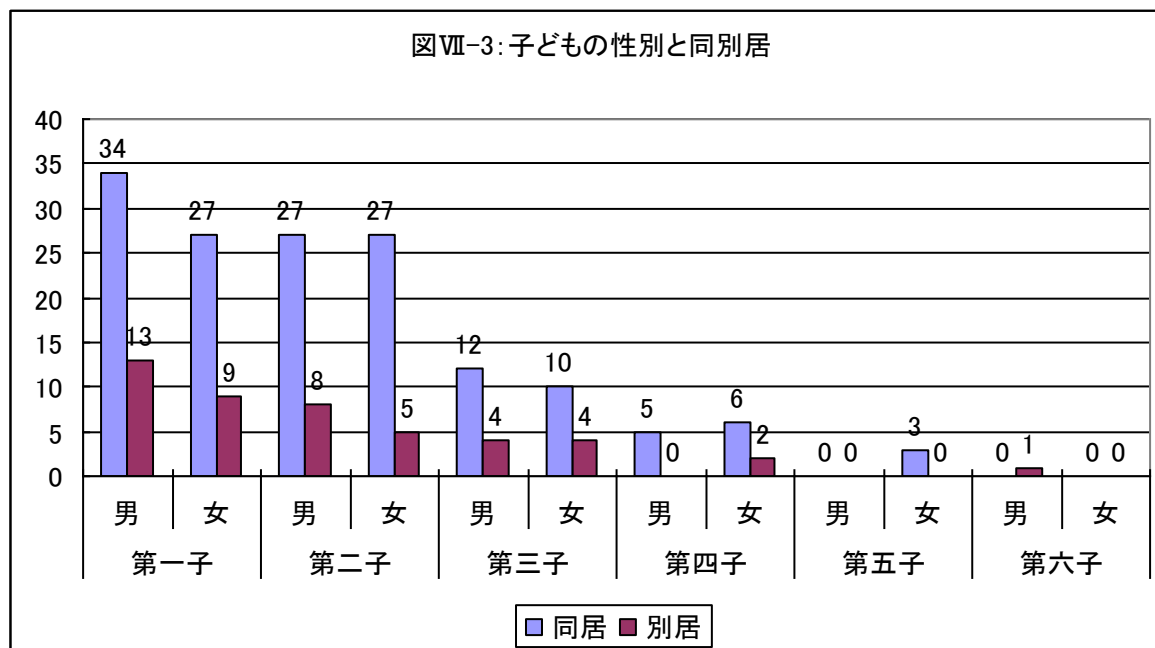
## (2) 子どもの年齢構成

図VII-2に示したのは、実数による子どもの年齢分布とその構成比である。Ⅲ章でも触れたように、小学校に通う年齢に相当する子どもたちが最も多く、男女併せて78人となる。その階層は全体の31%を占めている。また、学齢期児童・生徒に対応する年齢層と就学前児童および乳幼児で全体の8割を越え、高校生を合わせるとほぼ9割に到達する。繰り返しになるが、本調査の対象者は比較的父としても若年層に所属している。

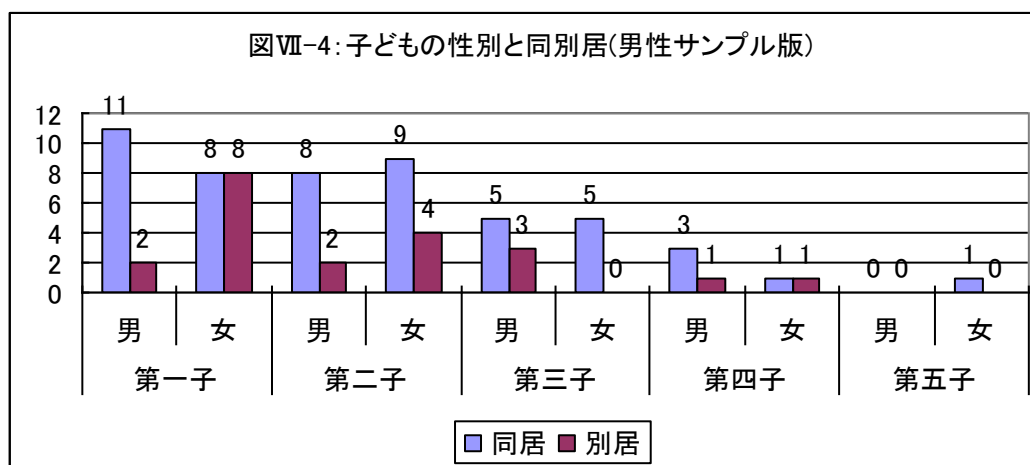
## (3) 性別と同別居

次に同別居と子どもの性別について、考えてみたい。次の図VII-3は子どもの出生順位ご

とに男女別と同別居をまとめたものである。



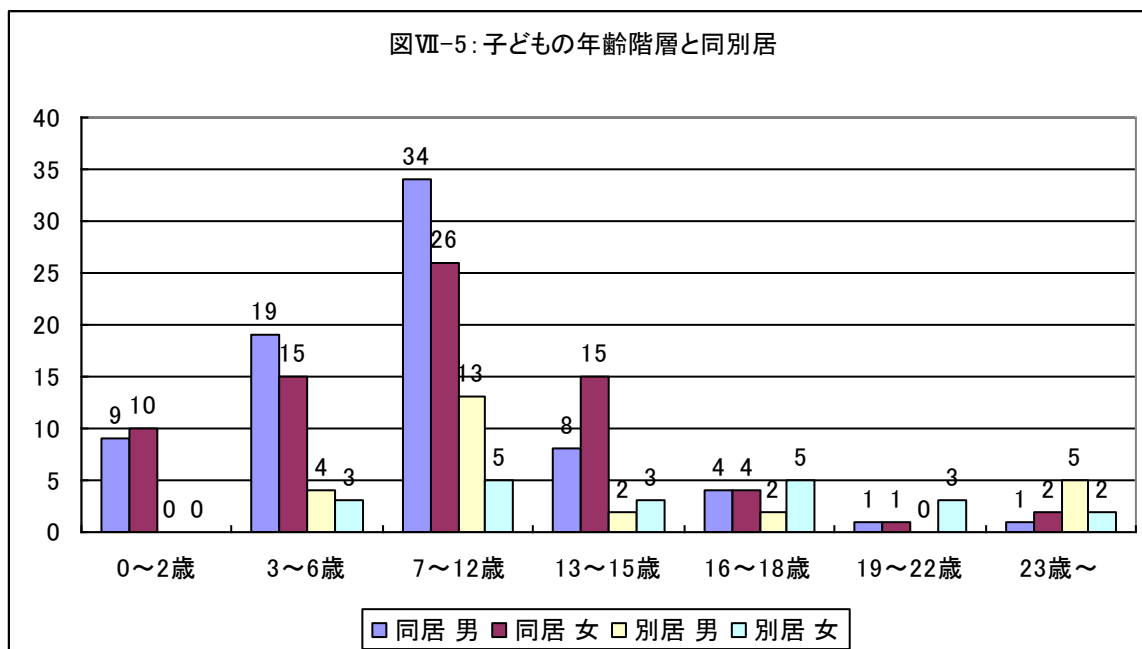
子どもの性別がどうであれ、共通して同居率が高いことが読みとれる。因みに次の図Ⅶ-4は男性サンプルのみから作成した。男性のサンプルからは、本章において基本的に用いている女性サンプルとは若干異なった傾向が見えている。女性回答者のデータからは、子どもとの同別居におけるある一定の法則性を予測し得たのだが、男性データにおいてそれは分散し、ある意味で「多様」であるといえる。



#### (4) 年齢と同別居

同別居に関しては子どもの年齢が大きく作用することが予想される。そこで、次に年齢階層別に同別居を見ていこう。





先ほどの年齢階層カテゴリーと同じものを使っている。これだけサンプル数が少ないと年齢階層の刻みをもう少し広くした方が良かったかもしれないが、今後の調査において、どの年齢階層にどのような問題が発生しうるかを後からも振り返りやすくするため、細かいスケールをそのまま利用することにする。

さて、このデータから何が言えるかはサンプル数の関係で微妙だが、小学生相当年齢までは別居における男子の比率が高いものの、中学生相当年齢から女子の別居率が構成比として上昇している。もちろんこのことはより多くのデータを収集し、なおかつ継続調査を実施しないことにはそれと確定できないが、注目しておく必要がある。

### 3. しつけ関与度

以上の考察をふまえて「しつけ」に対する関与度をみていきたい。その際、分析対象を限定するために、次のような操作を加えていることを明記しておきたい。

- 先の図VII-2「子どもの年齢構成」からみても、19歳以上の子どもはごく少数だが、ここでは18歳以下の子どもを対象として考察を行なう。つまり、19歳以上の子どもについては分析から除外してある。
- データ収集は、回答者とその現在のパートナーの子ども全員に関して、第一子、第二子などの出生順位データとして収集しており、ひとりひとりの子ども単位で年齢階層別のデータに変換されてはいない。そこで、先の図VII-3「子どもの性別と同居別」でもみたように、子どもの大部分が出生順位の第一子か第二子であることから、この2つのカテゴリーにあてはまる子どものみに関して以下の考察を行なう。つまり、年齢がもっとも上とその次の子どもだけを分析の対象としている。

## (1)ステップファミリーにおける「しつけ」の非自明性

ところで、「しつけ」とはいったい何であろうか。辞書的にいうならば「しつけ」とは、「特に日常生活における基本的な行動様式や習慣の型を身につけさせることを意味する日常用語」（『新教育社会学辞典』東洋館出版）とされる。近年、「しつけ」は親やそれに代る保護者によって意図的に行なわれるものと見なされることが増え、その際は「教育」と同義に用いられる傾向が強いが、実は「しつけ」とは概念的により幅広い内容を持っている。

山村賢明によれば、「しつけ」とはまず何よりも行動内容や人間の内面ではなく、型や形のレベルで行なわれたものであり、そしてそれは論理的抽象的に教えられたのではなく、実際の生活の中で自得され体得されるものであったという。この意味で「しつけ」は広義の社会化である。さらにはこの広義の社会化としての本源的「しつけ」には、親だけでなくそれ以外の親族や地域社会などもソーシャライザーとして関与しており、重層的で多様な形式を備えていたとされる。このレベルにおいては、大人の側は子どもに対する「しつけ」を自明なこととして受け入れており、「個々の具体的な行動様式や生活習慣を習得させることが目的なしつけ行為であるという認識は持たない」。（柴野昌山「しつけの構図」『しつけの社会学』：5頁）

ステップファミリーにおいては、親子の関係を自明とするわけにはいかず、まず「親子になる」という意図的、明示的なレベルからスタートせざるをえない。つまり、「子育て」や「しつけ」も、生みの親がそれまで時間的に連続的に積み上げてきた自明性のレベルではなく、初発から「意図的」に行なわれざるをえない、ということであろう。それが自明性を獲得していくまでにはそれ相応の時間や労力が必要となってくるはずだ。

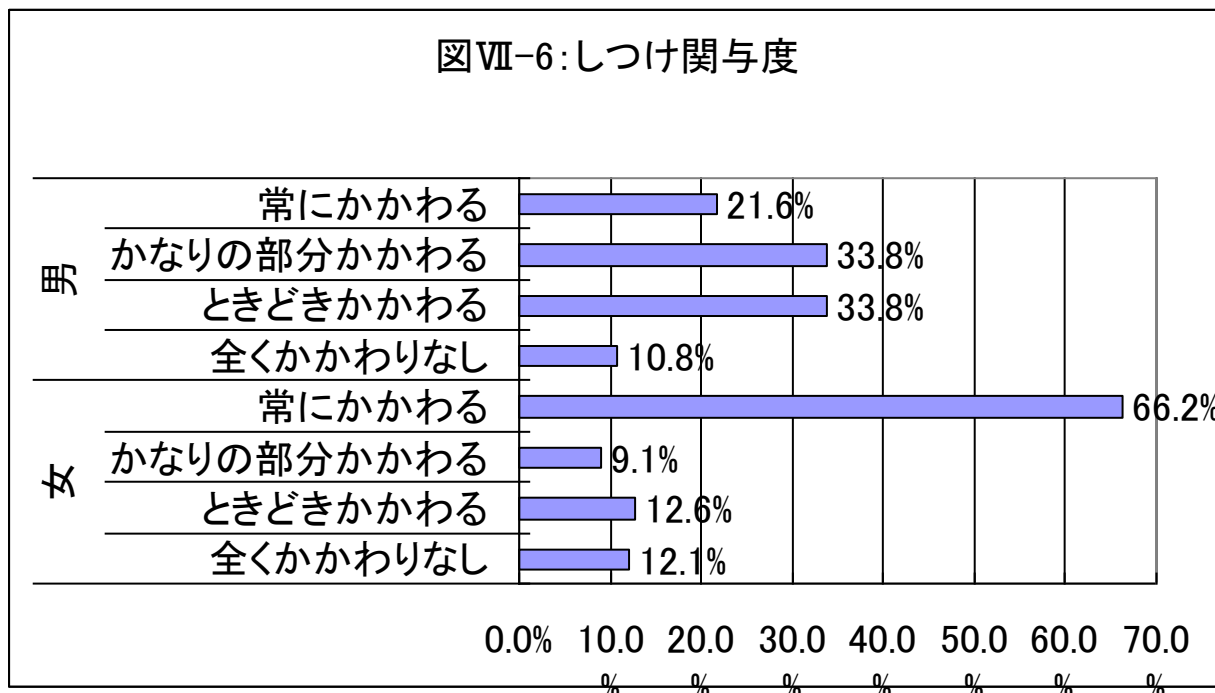
また「子育て」や「しつけ」は無菌の真空状態の中で行なわれるのではなく、特定の社会的諸関係の中で当該の価値観にさらされつつ行なわれる。ステップファミリーにおいて、子どもとどのようにかかわるのかという「行為」のレベルでは、周囲にどのようなものかの見方や価値観、いわゆる「資源」(resource)が偏在しているのかによって取りうる対応は変わってくるといえる。その環境において否定的なものの見方が流通しているようならば、選択肢は制限されてくると言えよう。特に性別役割分業とそれに伴うセクシズムの思想は、フェミニズムや男性学、ジェンダー論の隆盛にもかかわらずいまだに根深く存在するため、「母親」役割の担い手と期待される「女性」に対しては、確固とした「しつけ」提供者としての役割期待がなされる可能性がある。

以上述べてきたことから、ステップファミリーに注目し、そこでの「諸問題」の偏在状況に注目することで、逆に現代の「家族」が逆照射されることが考えられる。問題の根元に現代社会という地平を見据えつつ、以下は、本調査において具体的に看取し得た諸点の論述に移りたい。

## (2) 調査結果

### ①しつけ関与の男女比較

まずはしつけに関与する度合いを、全ての子どもに対して回答者の男女別にまとめてみたのが図VII-6である。

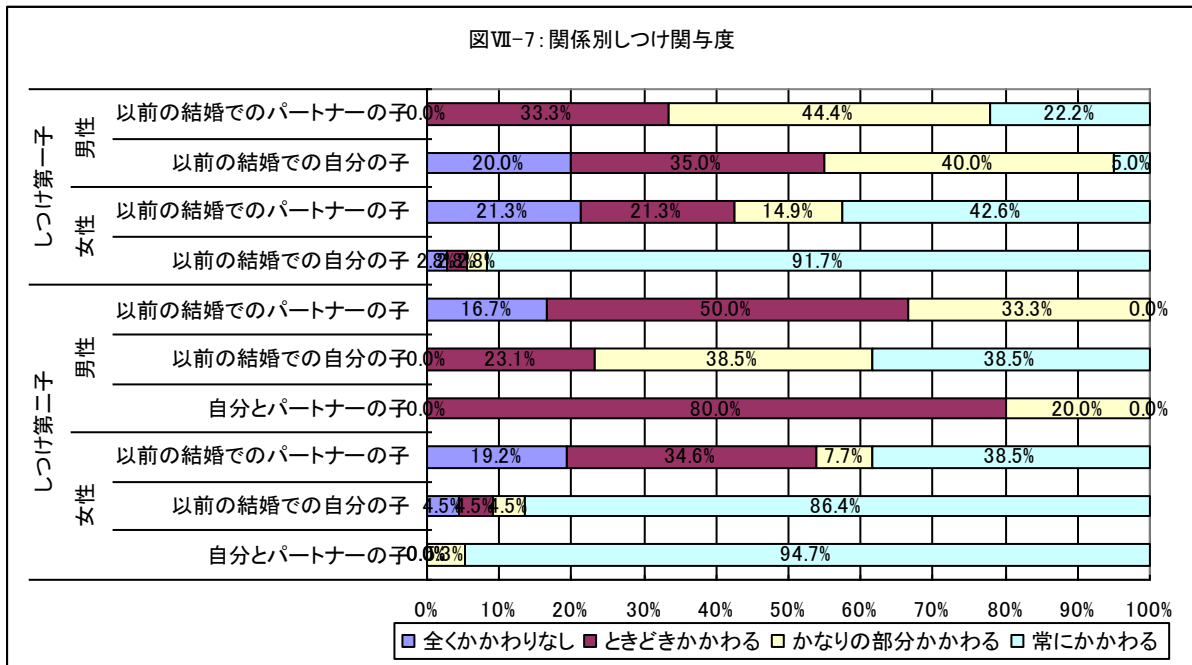


ここは実数ではなくパーセンテージで出しているが、男女差としては圧倒的に女性の側がかかわっていることがわかる。例えば、男性側は「常に～」と「かなりの部分～」を足すと、55%強となり、一般男性の子育て関与度と較べるとかなり高いと考えられるが、同様に女性の側でそれを見ると、75%強が子育てにしかも常にかかわっていることになり、この開きは埋めるべくもない。

更にいうならば、男性の関わりは多様性があり、関わるものと関わらないものにとばらつきがあるが、女性の場合には一点集中で「常に」関わることが多いと言える。この意味で、女性が子育てに関与することが何らかの形で「強いられ」ている可能性も伺わせる。

### ②子どもとの関係別しつけ関与度

次の図VII-7をご覧ください。第一子と第二子でデータからのみ作成したものだが、女性のしつけ関与の度合いと、男性しつけ関与の度合いが一目瞭然である。次に、男性が子育てに関与する場合、それが以前の結婚での自分の子であるとき、関与度はアップする。対して、女性の側も以前の結婚での自分の子の場合と、パートナーの子の場合とで、関与度が異なっていることがわかる。



付け加えるならば、女性の場合、自分と現在のパートナーとの間の子どもの場合、しつけ関与度は90%以上が「常に」関わっているのに対して、男性側は自分と現在のパートナーとの子どもに対して関わる度合いは、数字上の比較では、自分の連れ子に関わる関与度よりも下がっている点に注目したい。

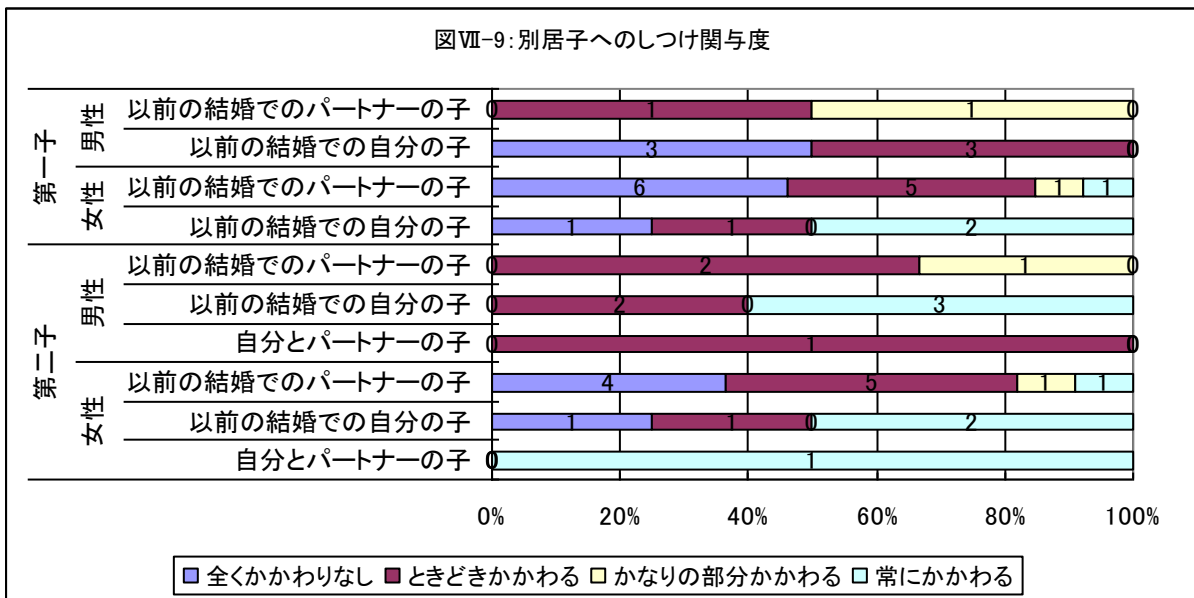
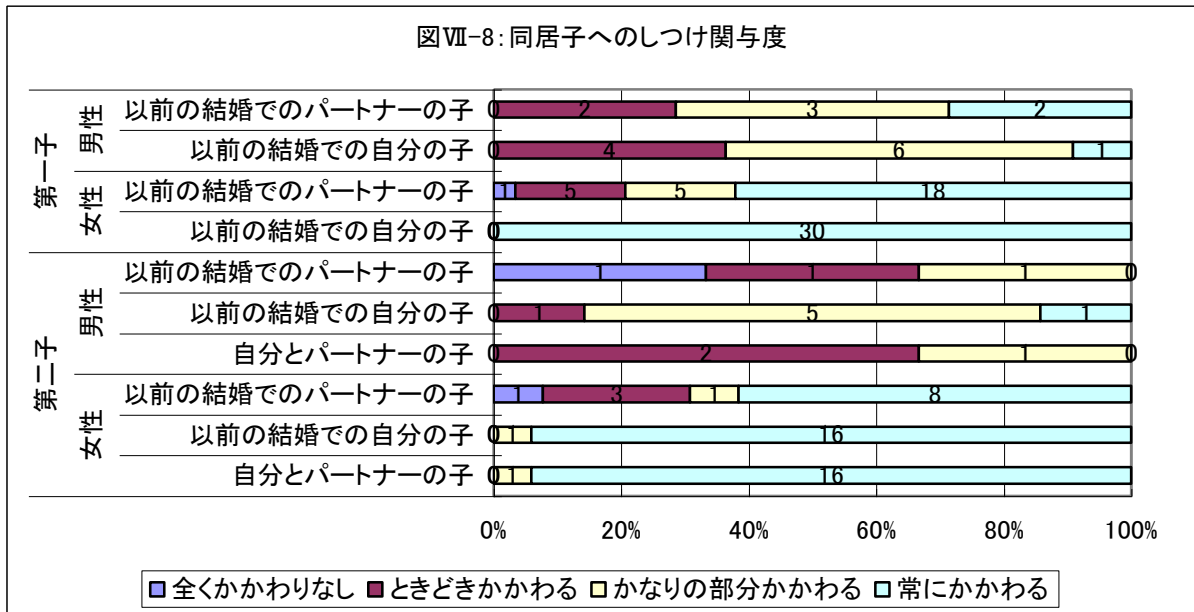
Ⅲ章において触れたように、本調査におけるサンプルの年齢と結婚および同居年数からみると比較的若いカップルが約8割を占め、相対的に子どもの年齢層も小学生に相当する層が極めて大きくなっている。その年齢層の子どもたちを実親以外の人々が無前提に「自明性」に媒介された親密なコミュニケーションを取れるであろうか。継親と子どもたちが親密なコミュニケーションを取れるように「なる」までには、相当の時間がかかると考えられる。しかるに、本調査におけるサンプルの結婚年数平均が2年前後という状態では、しつけに関与できない、しない層が存在するのは、ある意味で当然の結果だろう。

### ③同別居別・関係別しつけ関与度

もちろん子どものしつけへの関与は、その子どもと同居しているか、別居しているかという状況によって大きく異なってくる。そこで、上記の分析を、子どもとの同居・別居別に再検討・再確認しておきたい。次の図VII-8は同居子だけを取り出して、男女別・子どもとの関係別に、しつけ関与度を示したものである。

当然のことではあるが、同居している分、パートナーの連れ子に対して関わる度合いが相対的に高い。図のVII-7と比較すると、全く関わりなしという層が相対的に減少している。しかし、ここでも男性の、「自分とパートナーの子」に対する関与度は女性と比して極めて低い。

同時に数は少ないながら、別居子についても見ておこう（図VII-9）。あまりにも少数なのでここから全体の傾向性を読むのは危険ではあるが、それでも少数ながら「以前の結婚でのパートナーの子」に常に関わっているケースが存在することは注目に値する。



### (3)可能性としての「しつけ」をめぐって

親が一方向的に教化するようなしつけ思想は既に過去のものであると言ってよい。現代において、しつけとは、「親（もしくは代替者）」と「子」との相互交渉の産物であると言えよう。何よりも、子どもは無力な存在なのではなく、自らも観察し、学び、発達し、関係

を取り結ぶ行為主体である。確かに生まれた直後の無力な存在を親が庇護したり、守ろうとすることはある意味で理解しうることであるが、その後の発達を親が強烈に支配したり、水路づけたりする必要が果たしてあるであろうか。母親は子どもとの閉じた関係の中に自身と子どもを囲い込むのではなく、逆にその関係を開いたものにしていくことこそ重要なのではないか。柏木恵子のことばを借りれば、母との関係構築の基礎の上に人間的諸関係を拓けていくという「発達の単一モデル」から、複数の人々との関係構築の上に複数の愛着対象を持つ「複数ネットワークモデル」への移行ということになるだろうか（『子育て支援を考える』岩波ブックレット 555,2001）。母親の「多重役割」の再評価と父親の育児参加、地域の子育て支援策も含めて、今後検討していかなければならないことであろう。特に核家族の形態を取ることが多いステップファミリーにおいて最も求められるのは、父親の育児参加、しつけ参加ということなのではないだろうか。

#### 4. 別居子との交流頻度

子どものいる夫婦は離婚にあたって「親権者」を決定しなければならない。近年においてはその決定にあたり、話し合いによる「協議離婚」以外の「調停離婚」や「裁判離婚」の場合、裁判所の判断は母親の側に優先的に「親権」を認めるケースが多いという。この「親権者」の決定をめぐる子どもの「奪い合い」が行なわれることもある。因みに、「親権者」として認定されなかったとしても、「監護権」、「監護者」として子どもと同居することは可能である。「親権」について歴史的に見てみると 1965 年頃までは父親が「親権者」になるケースが多かったが、その後逆転し、現在では母親が「親権者」になるのが 7 割以上である。少々古いデータだが、1986 年に実施された総務庁（当時）の「家族・家庭に関する世論調査」では、離婚後に子どもがいっしょに暮らす相手を母親がよいとする意見が 53.3%あり、父親がよいとする 3.8%を大きく上回っていた。おそらくここにはジェンダーに基づく性別役割分業観が反映していると考えられるが、そのことが一方で母親に対する育児負担を増大させ、逆に言えば父親の「親」への社会化を疎外してきたといえるだろう。

さて、両親の離婚にあたって、子どもは一方の親とはその後の別居を余儀なくされるわけだが、子どもの「育ち」と、親権を獲得できなかった側の親の「育ち」のためにも「面接交渉権」は求められてきたといえる。

本調査においては以前のパートナーと子どもとの関係、及び現在のパートナーと子どもとの関係を頻度という点で調査している。

##### (1) 面接交渉の申し立てに関する統計

離婚後の別居親との交流は、いわゆる「面接交渉権」（「共同養育権」）として確立されつつあるものの、例えば 2000 年の『司法統計年報』によれば 1999 年に日本において申し立てられた件数は 2180 件で、面接を認容する審判が 79 件、面接を認める調停が成立したの

が 1076 件となっている。平成 12 年「人口動態統計月報年計（概数）」によれば、同年の離婚件数は 26 万 4255 組であることを考あわせると、申し立てそのものが非常に少ないことが目に付く。面接の回数は、子どもの性別に関わらず「月 1 回以上」という頻度が一般的であるという。ただし、これは面接を認める調停が成立したケースのみについての頻度である。調停に持ち込まれていない大多数のケースについて、離婚後の別居親と子どもの交流頻度がどれくらいか、あるいはそもそも交流があるケースがどれくらいあるのかに関して、日本における信頼できるデータはない。

## (2) 本調査における傾向

それでは以下、具体的な内容に入っていきたい。

本調査においては次のような類型（A～C）に基づいて分析を進める。わかりやすくするために図を用いて各類型を説明する。

**類型 A** 自分自身に連れ子がある場合、その子と以前のパートナーとの関係

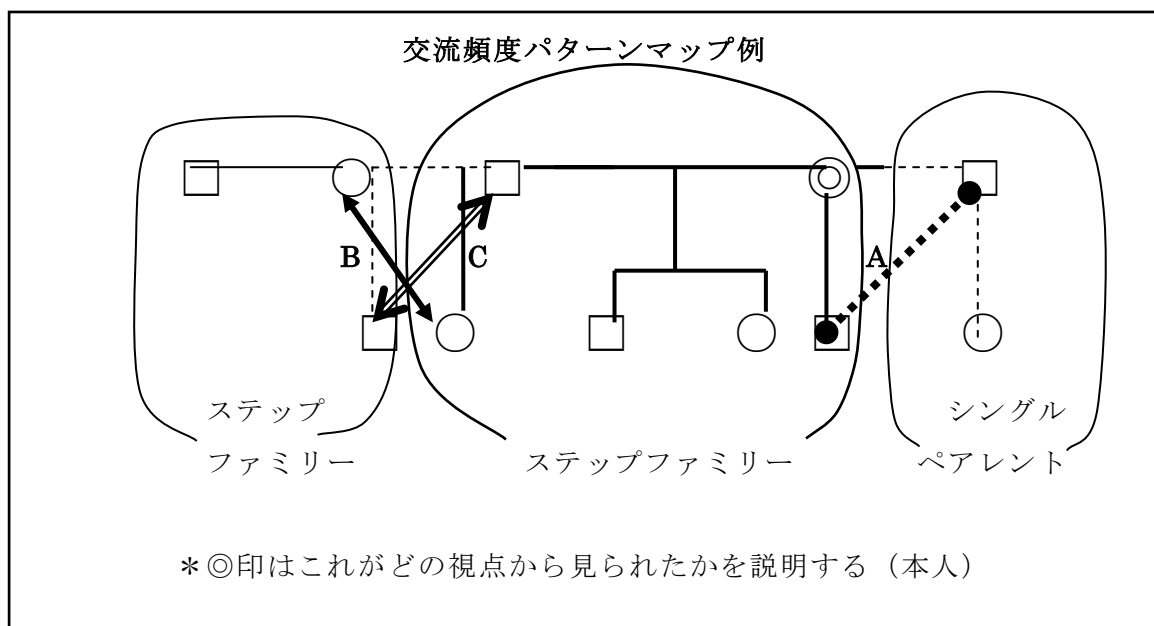
… 次図の ●……………●

**類型 B** 現在のパートナーに連れ子があった場合、その子と実親との関係

… 次図の ←————→

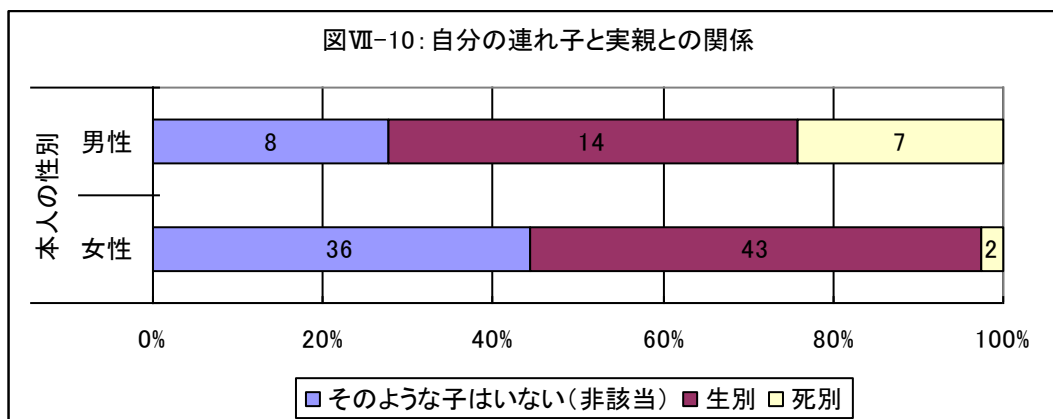
**類型 C** 現在のパートナーと現在別居している子どもとの関係

… 次図の ↔

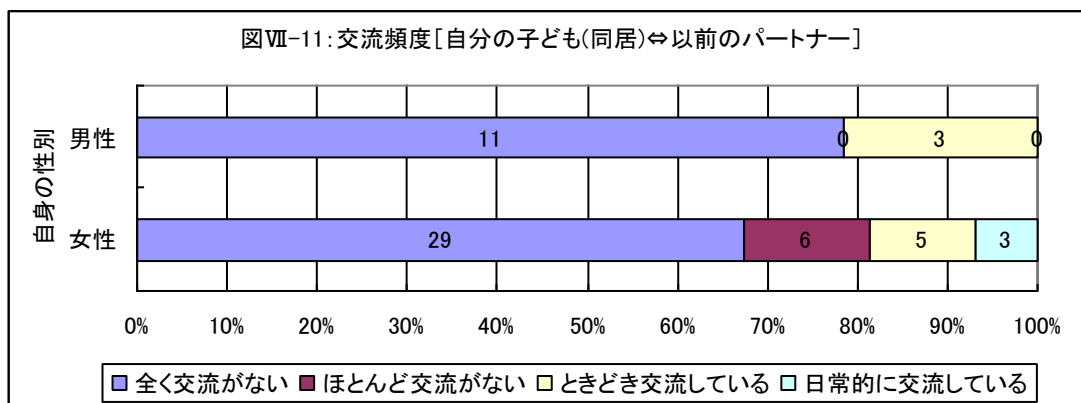


### ①自分の連れ子と以前のパートナーとの関係（上記の類型 A）

まず、自分の連れ子と実親（以前のパートナー）との関係から見てみよう。図VII-10によると、女性の非該当確率（「そのような子はいない」）が男性のそれと比較して高くなっている。これは男性の「初婚」者が男性の婚姻状態構成の10%にとどまるのに対して、女性の「初婚」と「未婚」をあわせると女性回答者の4割に及ぶという事実を反映しているのだろう。サンプル数の少なさからこれがステップファミリー全体の傾向性を表すかどうかは即断できないが、少なくとも図上で目立っている男性側の「死別」率の高さは注目しておいて良い。



それでは次に交流頻度について考察する。



一目瞭然で解説の余地もないほどだが、約7割が、自身の連れ子と以前のパートナーと、「全く交流がない」と回答している。

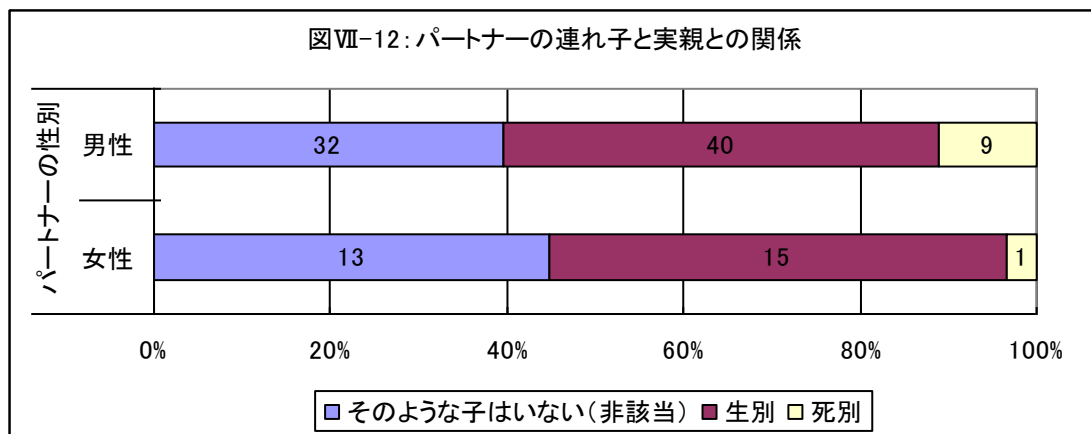
### ②現在のパートナーの連れ子と、その子の実親との関係（類型 B）

次に、パートナーの連れ子と実親との関係について見てみよう。

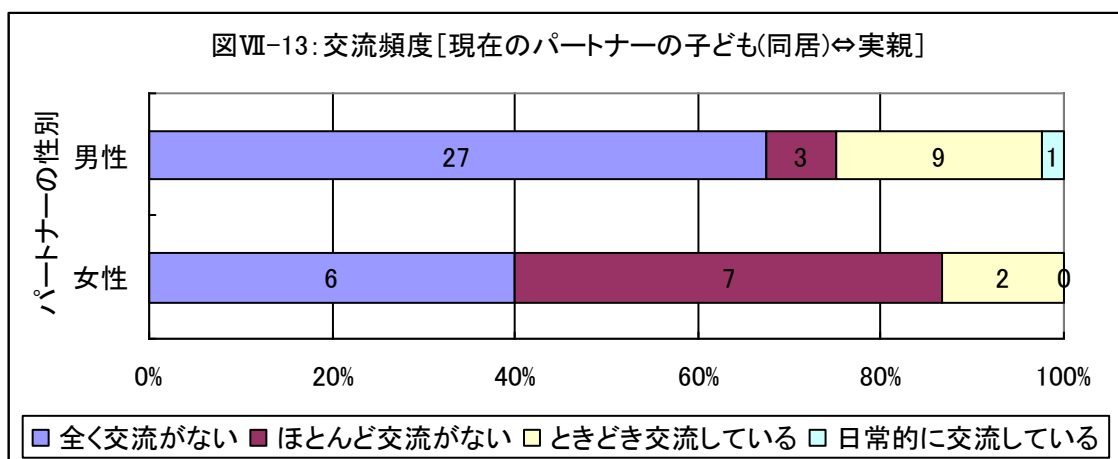
実はここからデータを見る際に注意が必要なので申し添えておく。ここでの類型 B と次



の類型 C では回答が、自分の親子関係ではなく、現在のパートナー（の元パートナー）とその子どもの関係についてのものであることに注意してほしい。本調査における女性サンプルの比率が大きいことから、必然的に男性パートナーの子どもとその実親の関係についての回答がより多く含まれている。自分と子どもの関係ではなく、パートナーの子どもとその別居親との関係についての設問であるため、回答が事実の「認知度」を反映したものである可能性も否定できない。以下の個別データを見る際にはこのことにご注意いただきたい。



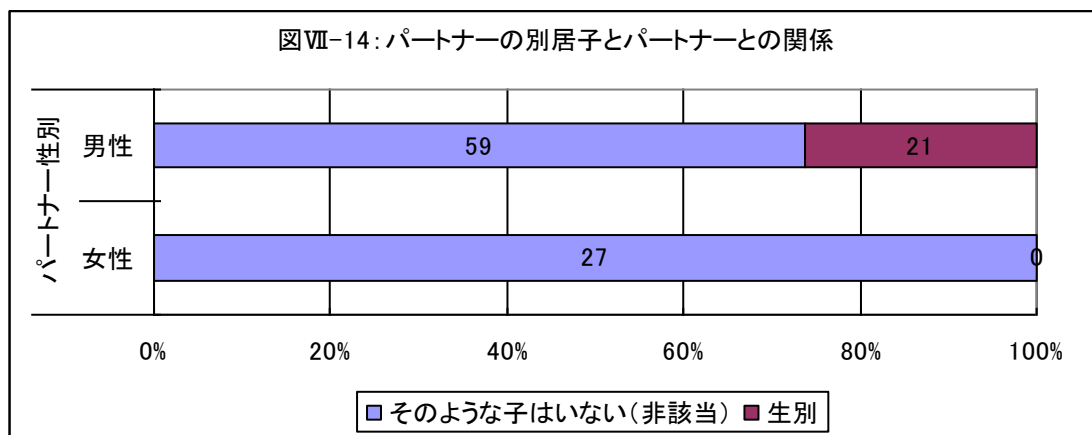
図VII-12 を見ると、ここでもパートナー（または本人）が男性である場合に死別のケースが多くなっている。



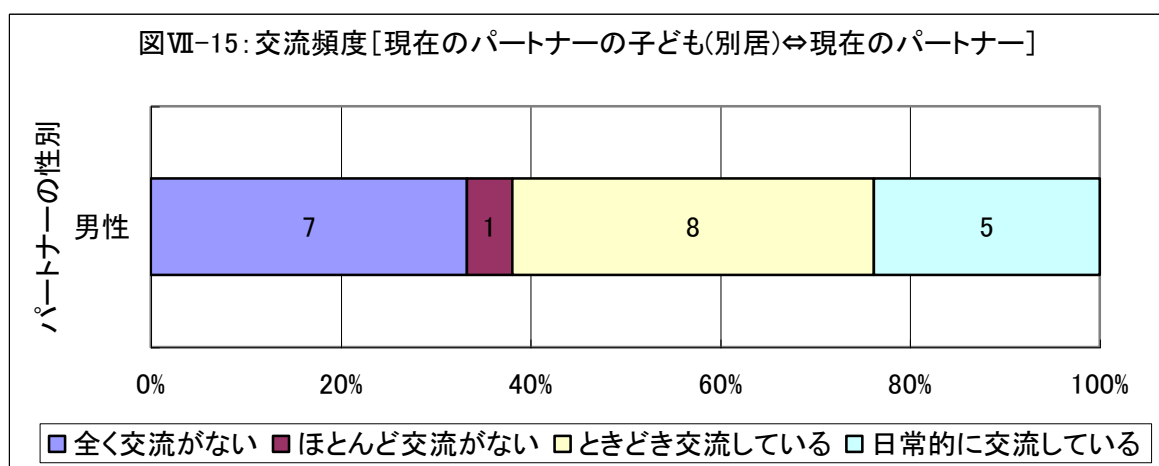
交流頻度を示した図VII-13 を見ると、自分自身の連れ子について示した図VII-11 と比較してもあまり大きな変化はない。確かに、「全く交流がない」とした女性パートナーの率は、本人の場合と比して約半分には減ってはいるものの、「全く」と「ほとんど」を併せてマイナススケールとしてみた場合、同様に 8 割程度が交流がないと見て良いだろう。

### ③現在のパートナーが以前の結婚でもうけた子で現在別居している子どもとパートナーとの関係（類型C）

現在のパートナーが別居している子どもとどの程度交流しているかについては、いくつか述べておくことがある。まず、子どもとの別居率は子ども総数のうち24%であることから、このケースが少なくなっていることは説明がつくものの、女性パートナーの別居子を「いない」とするのは先の同別居データと整合がとれていない。しかしここではそれをふまえた上で、男性パートナーのデータのみを扱う。言うまでもないが現在のパートナーの「死別」については省略した。



交流頻度を見るとときに最も顕著な傾向が出たのがこのケースである。サンプル数は十分ではないものの、それでも「ときどき」と「日常的」というプラス指標が6割を超える。とりわけ「日常的に交流している」というスケールが最大値を示したのはこのケースであった。



## 5. まとめと今後の課題

最後にⅦ章全体を通して考察してきたことをまとめておこう。

- ・ 今回の調査対象者の年齢階層は比較的若く、子どもの年齢も小学生相当階層が最も多い。
- ・ 子どもとの同居率は比較的高い。言い換えれば、本調査対象者は親権または監護権を獲得しているものが多いということになる。

しつけに関与する度合いについては、

- ・ 全体的に男女差があり、女性が専属的に関わる傾向がある。
- ・ 男性の関わり方には「多様性」がある。
- ・ 自分の連れ子とパートナーの連れ子に対する関与度の違いがある。そしてそれは、年齢が若く、結婚後まだ数年しか経過していないというケースが多い今回のサンプル構成からしてみると、親や子に「なる」途中経過として考えられる。
- ・ 特に男性の場合では、現在のパートナーとの間にできた子どもへの関与度は、自分の連れ子に対する関与度と比較して低くなっている。

次に、別居子との交流頻度に関しては、

- ・ 男女差を問わず、7割から8割が交流していないという。
- ・ 数は少ないながら、男親と、別居している子どもとの交流頻度は、他と比して密になっている。

繰り返しになるが、本調査における親子関係、特に教育に係る調査項目は基本的な情報の収集に限定しており、必然的に今後の課題は多いと言える。

例えば教育社会学で指摘されるような課題として次のようなものが考えられる。

- ・ しつけの階層差と地域差
- ・ しつけをめぐる、学校教育と家庭教育の「連携」の実態
- ・ しつけ関連の満足度と不満度
- ・ しつけと子育てをめぐる性別役割分業と性役割の在り方
- ・ ステップファーザーの育児参加

現在、父親の問題は注目されつつある。新エンゼルプランとそれに基づいた地方版エンゼルプランのもとで、様々な子育て支援が企画され実施されているが、育児休業の問題も含めて男性の存在がクローズアップされてきており、さらには、背景としての「企業社会の風土」まで改善の対象として見直されつつあることなどからみると、今後は男性と育児の問題が重要なキーになりうるだろう。必要なことは、現代社会がいかに多様性を確保し

ていくか、ということではないだろうか。

多様性が多様性として認められていくとき、われわれが担う、担わざるを得ない諸規制は若干でもゆるみを見せるはずである。ステップファミリーという在り方はその存在を当然として主張して良いし、またそれは、当然のこととして受け入れていく必要がある。逆に言うならば、それが当然な事として受け入れていない現状はどのような構造を持っているのか、という観点から、今後の問いはすすめられていって良いだろう。

#### 【参考文献】

- Visher, Emily B. and John S. Visher, 1982, *How to Win as a Stepfamily*, Brunner/Mazel, Inc  
(=2001, 春名ひろこ監修,高橋朋子訳 『ステップファミリー—幸せな家族になるために—』 WAVE 出版)
- 石田実, 1997, 『現代家族の社会学』有斐閣ブックス
- 大日向雅美, 1999, 『子育てと出会うとき』NHKブックス
- 岡田光世, 2000, 『アメリカの家族』岩波新書
- 柏木恵子, 2001, 『子どもという価値』中公新書
- 2001, 『子育て支援を考える』岩波ブックレット
- 門脇厚司, 1999, 『子どもの社会力』岩波新書
- 鯨岡俊, 2002, 『<育てられる者>から<育てる者>へ』NHKブックス
- 柴野昌山[編], 1989, 『しつけの社会学』世界思想社
- 柴野昌山、他[編], 1992, 『教育社会学』有斐閣ブックス
- 広田照幸, 1999, 『日本人のしつけは衰退したか』講談社現代新書
- 襲岩奈々, 2001, 『感じない子どもこころを扱えない大人』集英社新書
- 湯沢雍彦, 1995, 『図説 家族問題の現在』NHKブックス
- 日本子どもを守る会[編], 『子ども白書』草土文化

## Ⅷ. 専門機関からのサポートについて

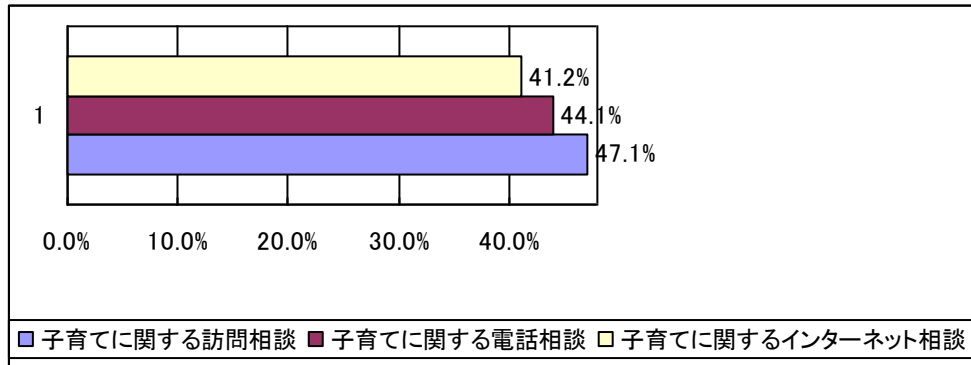
### 1. 専門機関からのサポートの有無とその種類について

ここではまず、これまでステップファミリーが専門機関からのサポートをどのように受けてきたのかについて、みていくこととしたい。

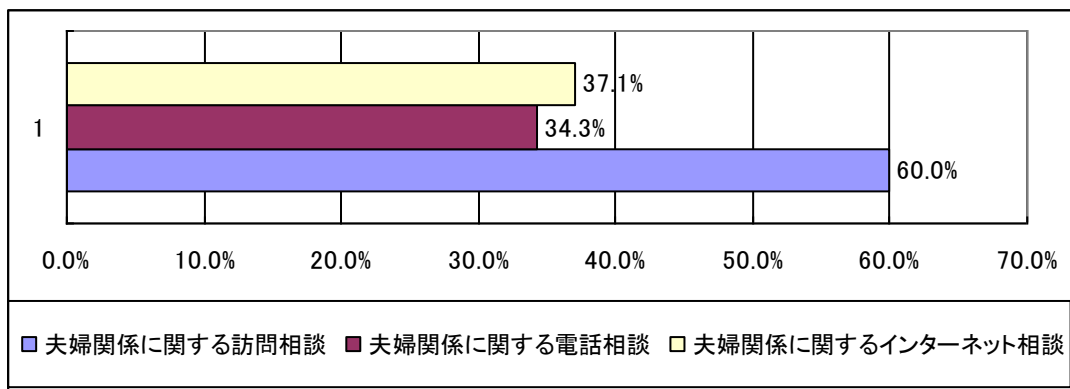
調査では、相談項目について、「親子関係、しつけ、教育問題など子育てに関する問題」「離婚、再婚など夫婦関係を中心とする問題」「親権、養子縁組、養育権問題など親子関係を中心とする法律問題」「本人の悩みなど心理的ストレスや精神的健康に関する問題」の4つの領域に分けて、これまでの専門機関に相談を受けた経験の有無をたずねた。結果をみると、4つの領域の問題とも、専門相談機関の相談を受けた経験のある人は全体のほぼ30%～35%となっている。男女別に相談経験をみると、すべての相談項目において、男性では相談経験がある人の割合が10%台にとどまっており、女性と比べて専門相談を受けた経験が少ないことがわかる。特に「子育てに関する相談」では、女性の41.0%が相談経験を有しているのに対し、男性では6.7%にとどまっており、ステップファミリーの子育ての責任が女性の側にかかっており、結果として、女性が専門相談を受けているという傾向が伺える。

さらに調査では、専門機関にどのような方法で相談したかについては、「訪問して相談（以下、訪問相談）」「電話による相談（電話相談）」「インターネットによる相談（IT相談）」の3つの方法に分けてたずねた。図Ⅷ-1～4は、それぞれの項目で相談したと回答した人が、どのような方法で相談をしたかについて示したものである。これをみるとどの相談項目においても、訪問による相談経験が割合として高いことがわかる。しかしここでは、特に専門相談機関の相談をIT相談で受けた経験のある人がいずれの相談項目においても、直接訪問と同様の割合で存在することに注目したい。現在、まだ専門相談機関で、IT相談を実施しているところは極めて限定されていると考えられる。そのような状況において、例えば親子関係やしつけなどの子育て問題をみても、保健所や子育て支援センターなど、地域の相談機関に出向いて相談したり、電話相談することと、ほぼ同じ利用率でインターネット相談を経験していることは、ステップファミリーの子育て相談については、直接相談機関を訪問したり、電話相談しにくくという側面を反映しているとも考えられる。

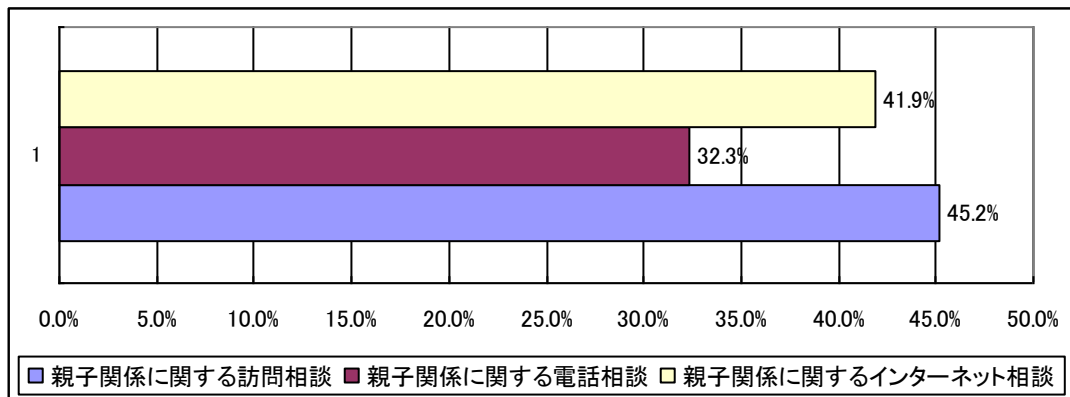
今回の調査では、具体的に専門機関がどこであったのかについては質問項目を設けていないので、IT相談をどの専門機関で受けたのかは不明である。この中には、SAJなどの当事者による掲示板や、個人の運営するHP上の相談のやりとりなど、専門機関の相談以外のものも含まれている可能性もある。



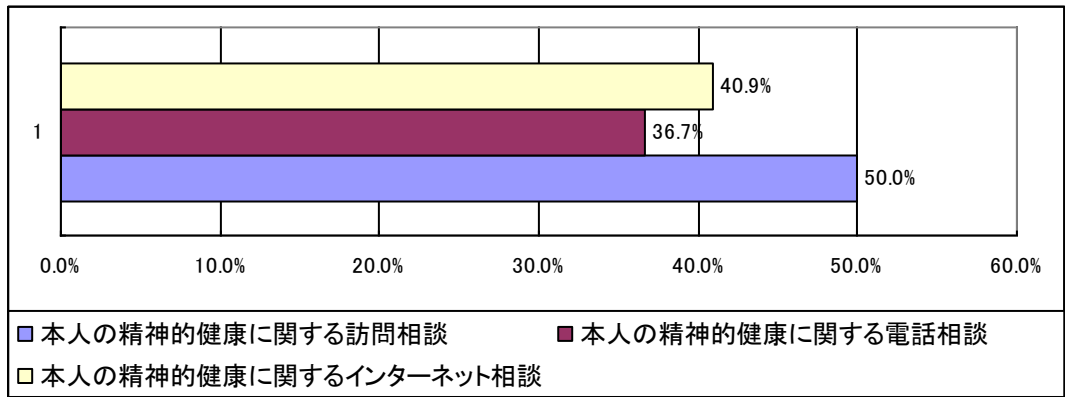
図Ⅷ－1 子育てに関する相談経験者(36名)中の相談方法種別割合(重複回答)



図Ⅷ－2 夫婦関係に関する相談経験者(40名)中の相談方法種別割合(重複回答)



Ⅷ－3 親権など法律相談経験者(35名)中の相談方法種別割合(重複回答)



図Ⅷ－４ 本人の精神的健康に関する相談経験者(33名)中の相談方法種別割合(重複回答)

表Ⅷ－１. 相談方法別に見た性別による専門相談への相談件数の違い

	平均値		
	男性	女性	F 値
専門機関への相談項目数(0-4)	.46	1.56	14.23**
訪問による専門機関相談項目(0-4)	.23	.79	7.09**
電話による専門機関相談項目(0-4)	.03	.57	7.47**
インターネットによる専門機関相談項目(0-4)	.13	.48	4.01*
	** p<.01	* p<.05	

次に、4領域の相談項目について、相談方法毎に相談経験の有無を0-4で点数化し、男女別に比較したのが、表Ⅷ-1である。これをみると先にも述べたように、相談方法にかかわらず、専門機関への相談経験では、女性の相談経験点数が有意に高いことがわかる。(F=14.23、p<.01) 相談方法別にみても、訪問相談、電話相談、インターネット相談のいずれにおいても、女性の相談経験点数が有意に高いことがわかる。これは問1(f)「家族の問題はほかの人に頼らず、家族の中で解決すべきだ」という意見に対して、男性では「そう思う」「ほぼそう思う」とした人が56.7%と半数以上に上ったのに対し、女性では35.4%にとどまっていることから、家族内の問題について、外部の専門機関を利用することへの抵抗が男性に強い傾向があることが伺える。

次に、ステップファミリーの家族類型によって、専門相談機関を利用した経験にどのような差がみられるかについて調べたのが表Ⅷ-2である。これをみると、若干ではあるが、「前の結婚の子どもは配偶者のみ」という継父母に特徴的な傾向がみられる。特にこのような人たちは、訪問や電話による専門相談を受けた経験点数が他の類型と比較して、やや低く、IT相談については比較的点数が高い傾向がみられた。(ただし有意差はない) この

傾向からみると、特に自分の子どもを持たない継父母は、ダイレクトな訪問や電話による専門相談には抵抗があるため、結果として IT 相談に向かうという状況にあるのかもしれない。

今回の調査では、具体的な専門相談機関の種類や、相談を受けたことが有効であったかといった、その効果についての質問は行わなかった。今後、さらに専門機関の相談の実態については、ヒアリング調査などによる詳細な実態の解明が必要となるであろう。

表Ⅷ-2. 相談方法別に見た家族類型別による相談件数の違い

	平均値			F 値
	前の結婚の 子は自分の み	前の結婚の 子は配偶者 のみ	前の結婚の 子が両方に ある	
専門機関への相談項目数(0-4)	1.43	1.2	1.27	.45
訪問による専門機関相談項目(0-4)	.89	.39	.65	2.76
電話による専門機関相談項目(0-4)	.43	.41	.43	.04
インターネットによる専門機関相談項目(0-4)	.27	.52	.38	1.02
	** p<.01	* p<.05		

## 2. 今後必要とする専門的支援のあり方について

ここでは、今後ステップファミリーへの専門的支援として必要だと思われるものについて「SF 専門の相談やカウンセリングの場などを新たにつくること（新たな専門相談機関の設置）」「児相や子育て支援センターなど既存の専門相談機関が、SF への理解を深めること（既存相談機関の理解強化）」「離婚・再婚にかかわる法律問題について気軽に相談できる機関を増やすこと（法律相談機関の増加）」、「保育園、幼稚園、学校などの教育機関が SF への理解を深めること（教育機関の理解強化）」「SF 独自の家族問題に関連する本や HP などの十分な情報の提供（専門情報の提供）」「SF における子育ての仕方や家族関係の作り方などが学べる研修の機会（研修プログラムの提供）」の 6 項目について必要度を 1 位から 3 位で示してもらった。

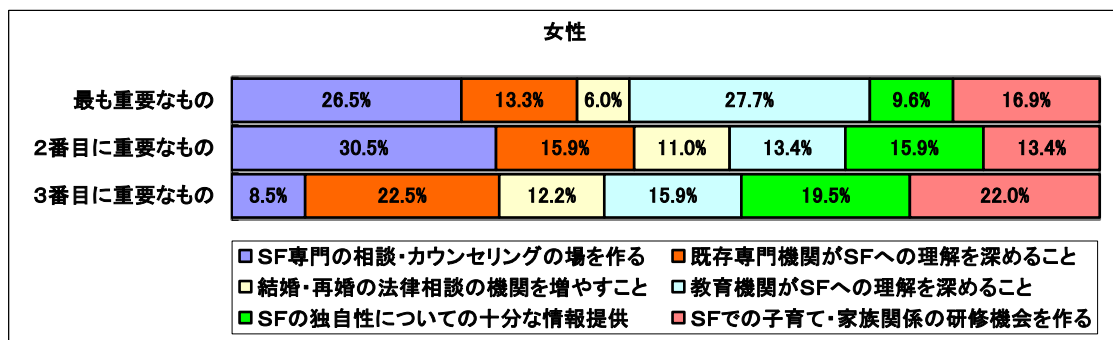
男女別に必要な専門的支援の順位を表にしたのが、表Ⅷ-5～6 である。これをみると、最も必要とした項目は、男女とも「教育機関の理解強化」（女性 27.7%、男性 33.3%）であった。2 番目に必要とした項目は、女性は「新たな専門相談機関の創設」（30.5%）、男性は「既存相談機関の理解強化」（30.3%）であった。3 番目に必要とした項目は、女性は「既存専門機関の理解強化」（22.0%）、男性は「教育機関の理解強化」（31.0%）となった。全体としてみると、今回の回答では、最も必要としている支援として「教育機関の理解の強化」、第二には「新たな専門相談機関の創設」、第三として「既存相談機関の理解強化」



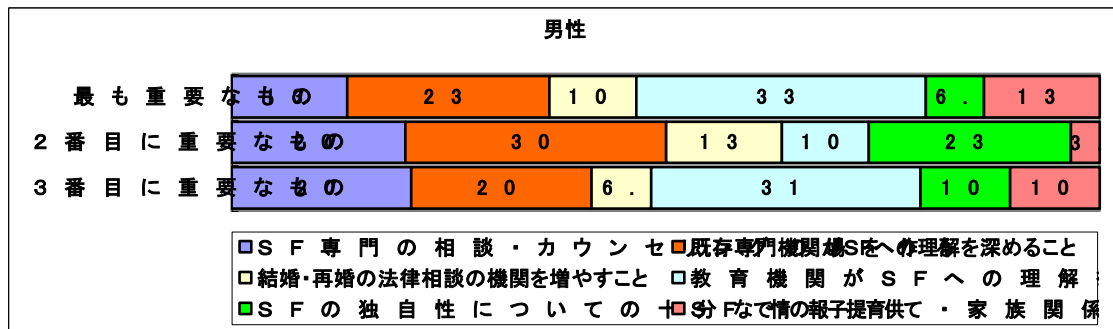
の順となった。これは、今回の回答者の大部分は、その子どもが、幼稚園、学校などの教育機関を利用している年齢にあり、日常的に教育機関と接触しており、結果として、これらの機関に対して、ステップファミリーへの理解を高めることの必要性について日常的に感じていることの反映と考えられる。

男性が新たな相談機関や研修の機会を増やすことより、学校などの教育機関や、児童相談所や子育て支援センターなどの既存相談機関のステップファミリーへの理解を深めることの必要性を優先的にとらえているのに対し、女性では、カウンセリングを含めた、新たな専門相談機関の創設の必要性を優先しているのが興味深い。

これを先にのべた相談経験の性別による差と比較してとらえると、女性の側が、既存の専門相談機関ではSFの相談が充分になされていないことを具体的に経験し、より切実に、新たな専門相談機関の創設を希望しているという見方もできるのではないだろうか。



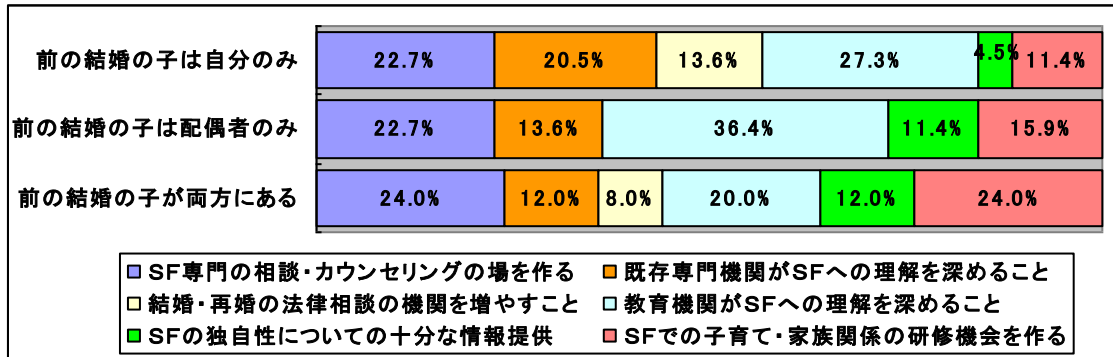
図Ⅷ－5 女性の必要と考える専門支援



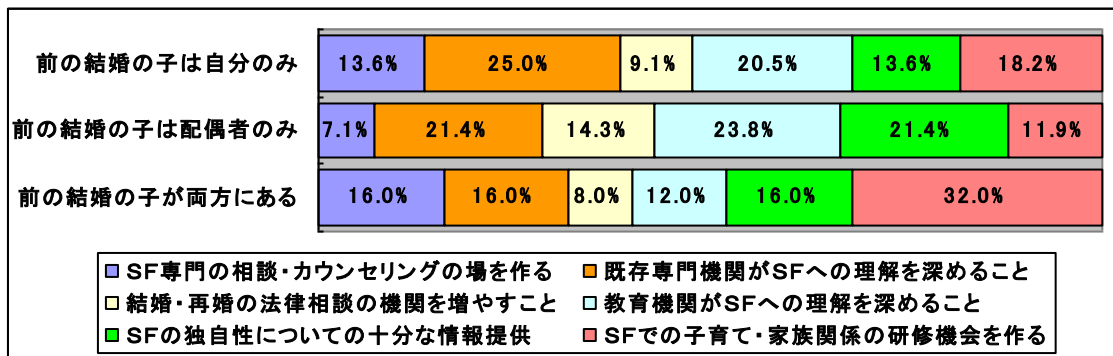
図Ⅷ－6 男性の必要と考える専門支援

図Ⅷ-7. ステップファミリー類型別にみた必要と考える専門的支援

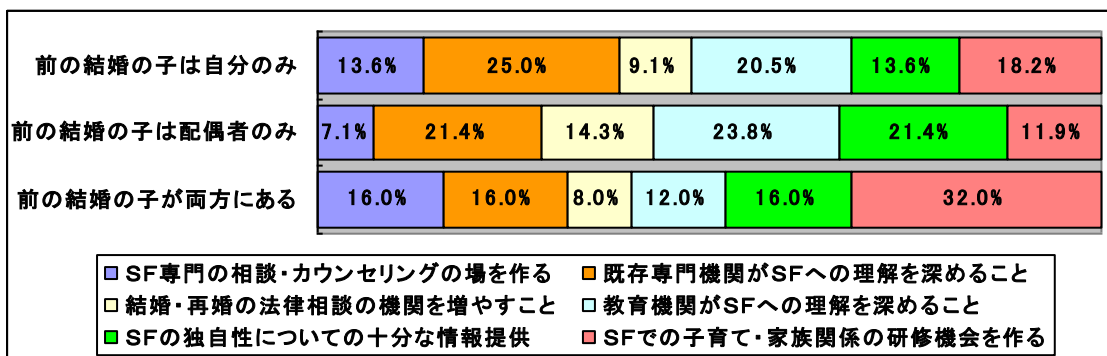
図Ⅷ-7-1. 最も重要なこと



図Ⅷ-7-2. 2番目に重要なこと



図Ⅷ-7-3. 3番目に重要なこと



また、ステップファミリーの類型別に必要順位を表したのが、図Ⅷ－7である。これを見ると、前の結婚での子どもを父母双方とももつステップファミリーの必要とする支援に特徴的な傾向が若干みられた。他の類型が1位に「教育機関の理解強化」を挙げているのに対して、この類型では、1位は「新たな相談機関の創設」「研修の機会の提供」(24.0%)としている。この類型と本人の性別のクロスでは、夫婦とも前の結婚で子どもをもつこの類型は全体の22.1%と最も割合が低く、男性9名、女性16名となっており、この中には夫婦双方が回答しているケースも多いことも考慮すると、必ずしもこのタイプのステップファミリーが他の類型と異なる専門的サポートを求める傾向があるとは、この調査結果から断定することはできない。

いずれにしても、多くのステップファミリーが、幼稚園、保育所、学校などの教育機関がステップファミリーについて、より理解を深めてほしいと強く希望しているという調査結果は、現状では、教育機関について、ステップファミリーへの理解が不十分であると当事者たちが感じていることの反映であろう。また、2番目に必要であるとした、カウンセリングなども含めた新たなステップファミリーの専門相談機関の創設については、特に心理的なストレスや深い悩みに応えてくれるステップファミリーに理解のある専門機関があることを希望する人が多いことを示しているといえよう。

## IX. 自由回答にみるステップファミリー経験

この章では、調査票の自由回答部分である「ステップファミリーを営んでいるの感想」について、特に難しいと感じるような経験、喜びや幸せを感じるような経験、その他に分けて、その記述内容を分析し、特徴をみていくことにしたい。

### 1. 特に難しいと感じるような経験について

回答者 103 名のうち、特に難しいと感じる経験についての記述があったのは、80 人であった。記述数からみると、喜びや幸せを感じる経験に関する記述にくらべて、難しいと感じる経験に関する記述の方がかなり多く記入されていた。

これらの記述をその内容から分類すると、大きく 5 つのカテゴリーに分類することができた。最も記述内容として多かったのは、①親子関係（継父母—継子関係を中心とする）に関するものであり、45 件と半数以上を占めていた。またその他の記述については、②以前のパートナーや別居している子との関係に関するもの 11 件、③自分、パートナーの両親やその他親戚との関係にかんするもの 10 件、④近隣などの周囲の人々との関係に関するもの 8 件、⑤その他のカテゴリー 9 件であった。（尚、件数はのべ数である）以下、それぞれのカテゴリー別にその内容について分析し、その特徴をあげていく。

#### (1) 親子関係（継父母—継子関係を中心とする）に関するもの（45 件）

難しいと感じること—親子（継親子）関係にかんするもの(45件)

1. 連れ子とパートナーの関係がうまくいかない
2. 継母との関係がうまく築けなかった(6 歳～18 歳)
3. 実子に再婚したことについて文句をいわれる
4. 継子と実子に対するパートナーの接しかたがちがうこと
5. 実子とパートナーとの間で板ばさみになってとてもつらい
6. 初婚の夫が連れ子とのかかわりでストレスを抱え込んでいること
7. 連れ子たちと夫の間にはさまれ、どうしてよいかわからなくなるとき
8. 新しいパートナーとの子どもの誕生に期待とともに不安を感じる
9. 連れ子を責任を持って育てるのは実母である自分と思うプレッシャー
10. 子どものしつけについてのパートナーとの考え方の違い
11. 連れ子とパートナーの関係(しつけの面・叱り方など)
12. 実子と継子とのしかり方について、平等にできない
13. 継子のしつけについて自分が感情的になっていないか悩む
14. 初婚のパートナーが連れ子に対するしかり方が厳しすぎる
15. 夫の連れ子が転校を拒否し、夫とは別居状態になっていること

16. 夫の連れ子である娘との関係が難しい
17. 子どもの苗字を変えるタイミングが難しい、それを子どもに理解させること
18. 連れ子が何かやらかしてしまったとき、パートナーの表情が陰しくなること
19. 自分の好きな人(夫)に自分より大事な人(継子)がいること(主人の愛人みたい)
20. 初婚のパートナーに連れ子 3 人のいい父親を求めすぎてしまうこと
21. 継子との生活は感情の処理がむずかしい
22. 子育ての経験がなく、継母として幸せを感じることはない
23. 妻と連れ子との関係がむずかしく、自分が神経を使う場面が多いこと
24. 自分を殺して、継母として継子に対して母親役に徹しているので疲れる
25. 父親とはこうあるべきというパートナーと連れ子との関係に悩んだ
26. 継子を自然に愛せない。そういう自分がいや
27. 継子の生活習慣等を直すのが大変だった。(お箸の持ち方など)
28. 継母として、実母に負けている気がして、いつもイライラしている
29. 妻(継母)と連れ子との関係が一番難しい
30. 妻(継母)と連れ子との関係(実子との愛情の差が感じられる)
31. 継子の思っていることが気になって仕方がない
32. 継子を育てることがこんなに難しいなら結婚しなければ良かったと後悔。
33. 継子との相性がむずかしい。
34. パートナーが連れ子のしつけで気をつかってしまい、つい甘やかすこと
35. パートナーと連れ子の関係でかなり悩んだ
36. 継子に対して「実母」とうそをついていることにプレッシャーを感じる
37. 思春期の子どもがいる同士の再婚であること
38. 継子と実子の教育費の偏りがある。継子にお金がかかりすぎ
39. 自分(継母)と継子との関係がしんどい。生理的に受け入れられない
40. 継子との親子関係の築き方。理想と現実との葛藤がある
41. 既に出来上がっている親子に入っていくとき自分は新参者という意識
42. 継子が思春期の頃、関係がむずかしく、衝突を繰り返した
43. 連れ子同士の結婚で、同年齢、同性の子どもの扱いが難しく、精神的に不安定
44. 継子のしつけに対して不満だが、子育て経験がないので相手にされない
45. パートナーが継子に甘く、実子に対する態度と違うことが辛い

最も多いのは、子どもをつれて再婚した場合において、新しいパートナーと連れ子との関係について難しいと感じている記述であった。「連れ子とパートナーの間で板ばさみとなり苦しい」「連れ子たちと夫の間にはさまれ、どうしてよいかわからない」「2 人の間で神

経を使う場面が多い」など、男女に関わらず、自分の子どもを連れて再婚した人の場合、新しいパートナーと連れ子との関係について、その間に入り、悩む経験が多いことが伺える。

また特に初婚の女性（継母）の場合では、パートナーの連れ子（継子）との関係について、難しいと感じている記述が多くみられた。「継子を自然に愛せない」「自分を殺して、母親役に徹しているので疲れる」「パートナーに自分より愛する人間（継子）いるのがつらい」「継子のしつけに不満があるが、子育て経験がないので相手にされない」といったように、結婚と同時に母親という役割を果たさなければならないことや、継子と新たな母子関係を作らなければならないというプレッシャーなどに対して困難を感じている記述が多かった。

連れ子のいる人同士の結婚では、お互いの子育て観の違いや、パートナーの実子と継子に対する対応の違いなどについて、不満を感じている記述がみられた。

全体を通して、今回の回答では、継親、実親を問わず、ステップファミリーのメンバー間での関係においては、とりわけ親子関係に重点をおき、それをどう作っていくのかについて、最も悩みや困難さを感じている人が多いことが伺えた。

## (2) 以前のパートナー・別居する実子等との関係（11件）

難しいことー以前のパートナー・別居している実子等との関係に関するもの
1. パートナーと連れ子の実親とのかかわりが悩みの種
2. 別れた実子と交流のない状況に悩んでいる
3. パートナーの別居した子が、近くに住んでいて交流があること
4. 継母として、実母に負けている気がして、いつもイライラしている
5. 亡くなった前妻の思い出の品を自分が受け入れられない
6. 前の夫と連れ子、パートナーとの関係のとり方がむずかしい
7. 別れたパートナーの妻が近くに住み、継子にちょっかいを出してくること
8. 以前のパートナーの親との関係が難しい
9. 前のパートナーと、子どものしつけについて共通認識がもてない
10. 元妻と別れて暮らすパートナーの子、同居するパートナーの両親との関係
11. パートナーが離婚の経緯から、前妻に憎まれており、前妻に配慮しすぎることに悩んでいる

今回の調査では、以前のパートナーとの関係についての悩みや困難さを感じる記述は、比較的少数であった。これは多くの日本のステップファミリーでは、生別の場合でも、離婚、再婚と同時に以前のパートナーとの関係や交流がほとんどないケースがかなり多いことの結果であるともいえる。しかし何らかの交流がある場合、少数ではあるが、「パートナ

一の連れ子と実親とのかかわりが悩みの種」「パートナーの別居した子が、近くに住んで交流があること」「前夫と連れ子、新しいパートナーとの関係の取り方がむずかしい」「前のパートナーと子どものしつけについて共通認識がもてない」といったように、そのことが悩みやストレスにつながっているケースも見られた。一方で、「別れた実子と交流のない状況に悩んでいる」といった、交流をもてないことに対して、悩みを感じるも意見もあった。

### (3) 祖父母やその他親戚との関係 (10 件)

難しいことー祖父母や親戚等との関係に関するもの
1. 継母への世間(義父母、小姑含む)の偏見が強かった
2. 自分の実家との付き合い方がむずかしい
3. 再婚について、実家の両親が猛反対なのが悩み
4. 継子に対するパートナーや実母、その祖父母の行動が理解に苦しむ
5. これまで継子を育ててきた祖母と、継母である自分が比べられること
6. パートナーの両親との同居だったので、疎外感を感じた
7. 再婚することに自分の両親が猛反対していること
8. お互いの親に理解を求めることが難しい。再婚は汚らわしいといわれる
9. 以前のパートナーの親との関係が難しい
10. 元妻と別れて暮らすパートナーの子、同居するパートナーの両親との関係

祖父母や親戚等との関係では、「再婚は汚らわしいといわれる」「自分の両親が再婚に猛反対」などの記述に見られるように、特に祖父母に再婚そのものを理解してもらうことがむずかしいという感想が目立った。その他、相手の祖父母と同居の場合、祖父母との関係のむずかしさ、特に再婚まで継子を育ててきたのが祖父母の場合では、子育てをめぐっての意見の相違や子育てについて比較されることに難しさを感じるという記述がみられた。

### (4) 近隣や周囲の人々との関係 (8 件)

難しいことー近隣や周囲の人々との関係にかんするもの
1. 実親でないことで、学校や児相に偏見がある
2. 周囲が継母に育てられて不憫だと継子のことを思っているのではと感じる
3. 義理の関係が入ってくると、偏見を持ってみられる
4. 周りに同じ立場の人がおらず、一人でがんばってきたこと
5. 継子の周囲(祖母、学校、学校の友人など)との関係がむずかしい
6. 再婚後すぐに職場で通常勤務(三交替)に復帰させられたこと
7. 周囲の目が気になる。何かあると SF だからとマイナス思考になる

## 8. 周りに継父であるということで、虐待が心配だと思われていたこと

周囲の人々との関係では、継父母に対する偏見、例えば「継母に育てられて不憫と継子のことを周りが思っているのを感じる」「継父であるということで、周りに虐待するのではと心配されていた」といった記述がみられた。

また「再婚後は子どもが増えたり、家族関係が複雑になり大変な状況であったのに、母子世帯ではなかったということで、すぐに通常勤務（3 交替制）に復帰させられた」といったような、ステップファミリーに対する職場の理解の得られにくさを述べた感想もあった。さらに、「実親でない」ことに対する学校や児童相談所といった専門機関の偏見についての記述も少数意見ではあるがみられた。

### (5) その他（9 件）

#### 難しいことーその他

1. 連れ子を責任を持って育てるのは実母である自分と思うプレッシャー
2. 子どもの苗字を変えるタイミングが難しい、それを子どもに理解させること
3. 夫の酒ぐせが悪く、暴力があり別居中
4. パートナーにとって、妻は家政婦ではなく一人の女性であることをわかってほしい
5. パートナーとのコミュニケーションが一番むずかしい
6. 収入が少ないこと
7. いきなり 3 人の子育て、引越し、退職等、環境の変化が大変だった
8. パートナーがアルコール依存症であるため、私への負担が大きすぎる
9. 価値観の違うもの同士、新たな価値観を生むむずかしさ

その他の難しさとしては、「パートナーとのコミュニケーションが難しい」「パートナーにとって、自分は家政婦ではなく一人の女性であることをわかってほしい」といった、パートナーとの関係に難しさを感じる意見がみられた。一方、「パートナーが酒ぐせが悪いため、暴力をふるうこと」「パートナーがアルコール依存症」といった、再婚とは別に、相手が大きな問題を抱えていることに対する困難さを感じているという記述もみられた。

また「子どもの苗字が変わること」「いきなり 3 人の子育て、引越し、退職等環境の変化が大きかった」など、再婚を契機に、生活環境が大きく変化することへのむずかしさをあげた人もいた。

## 2. 喜びや幸せを感じるような経験について

難しいと感じることに対する記述と比較すると、ステップファミリーとしての喜びや幸せを感じる経験に関する記述は全体的に少なかった。全体として 43 件の記述があった。



最も多かった記述は、①親子（継親子）関係に関することについてであり、そこに喜びや幸せを感じていると記述している。以下、②新しいパートナーとの関係、③その他のカテゴリーに記述を分類し、それぞれのカテゴリーについて特徴をまとめた。

#### (1) 親子（継親子）関係に関するもの（27件）

##### 喜び・幸せを感じることー親子（継親子）関係に関するもの

1. 子ども(実子)をパートナーがよく面倒をみってくれる
2. 今の夫に子どもとともに大切にされていること
3. パートナーと継子が愛し合っていること
4. パートナーが継子と楽しそうにしているとき
5. 連れ子がパートナーにスキンシップを求めるとき
6. 継子と継父である自分の間に溝がないこと
7. 子連れ同士の結婚+実子の誕生で家族が増えたこと
8. 家族が増えたこと
9. 今のパートナーは自分にも娘にもとてもやさしい
10. 継子に夕食やお弁当がおいしかったと言われること
11. 継母としての体験が自分の成長につながっている
12. 子どもとパートナーと自分が一緒にでかけること
13. 懐かなかった継子がだんだん懐いてくれること
14. パートナーが自分と子どもたちを双方愛してくれること
15. パートナーと連れ子が遊ぶ姿を見ると幸せを感じる
16. パートナーが自分や子どものことを親身になって相談に乗ってくれること
17. パートナーが連れ子に対して、自分をパパと言うようになったこと
18. パートナーの母に継子に笑顔が戻ったと言われたこと
19. 子どもたちを愛してくれる父親ができたこと
20. 私の連れ子とパートナーと一緒に遊んでくれること
21. 継子が自分のことを私にわかってほしいと思ってくれること
22. 継子との関係がとても良好であること
23. 今は継子が「おかあさん」といってくれるだけでうれしい
24. 継母として継子に愛情を注いでいけると確信していること
25. 今の夫婦関係、親子関係が良好なこと
26. パートナーが、自分や連れ子に対して、親身になって接してくれること
27. 連れ子が、自分よりパパ(パートナー)の方が好きと言ったとき

ここでは、特に自分の連れ子と新しいパートナーとの関係が良好であることに対して、喜びや幸せを感じる実母が多いのが特徴的であった。「継父が連れ子に対して、とてもやさしくしてくれる」「連れ子とパートナーが楽しそうにしている」「連れ子がパートナーにスキップを求めるとき」等といった記述がみられた。

また継父母の立場からは、やはり継子との間にいい関係が結べたことに対する幸せや喜びを感じる記述が目立った。「継子との間に溝がないこと」「継子との関係がとても良好であること」というものから、「懐かなかつた継子がだんだん懐いてくれること」「継子にお弁当がおいしいといわれたこと」「おかあさんと呼んでくれるだけでうれしい」といった日常の継子との関係のささやかな変化に喜びを見出している記述も目立った。

## (2)新しいパートナーとの関係 (9件)

喜び・幸せを感じることーパートナーと関係(9件)
1. 今の夫に子どもとともに大切にされていること
2. パートナーを愛しているのでがんばれること
3. パートナーがとても安らぎを与えてくれる
4. 今のパートナーは自分にも娘にもとてもやさしい
5. パートナーが誠実でやさしい人なので再婚して良かった
6. パートナーが自分と子どもたちを双方愛してくれること
7. パートナーが自分や子どものことを親身になって相談に乗ってくれること。
8. 今の夫婦関係、親子関係が良好なこと。
9. 自分や連れ子に対して、親身になって接してくれること。

新しいパートナーとの関係に喜びや幸せを感じるとした記述も目立った。「パートナーにとても大切にされている」「パートナーは自分や子どもにとってもやさしい」「自分と子どもたち双方を愛してくれる」「親身になって相談に乗ってくれる」といった記述がみられた。

## (3)その他 (15件)

喜び・幸せを感じることーその他(15件)
1. 再婚により、心と経済的安定が得られたこと
2. 子連れ同士の結婚+実子の誕生で家族が増えたこと
3. 家族が増えたこと
4. SFは難しいが乗り越えたとき、絆の深まりを感じる
5. 連れ子が現在のパートナーとの子をかわいがってくれる
6. 家族のことを考える機会が多く、些細なことでも幸せを感じる
7. 一定の年月が経って、家族としての自然な流れが出来たこと

8. 継子と実子が仲良くしているところをみるとき
9. 実子が生まれて、兄弟が仲良くすごしていること
10. パートナーの両親等が自分と連れ子によくしてくれること
11. 父子家庭時に比べて、精神的にゆとりが生まれた
12. 実子と継子の仲の良い姿をみることに
13. 普通の家庭と思えること。今はとても普通です。
14. 母子家庭のときより気持ちに余裕が持てるようになった
15. SFとしての悩みに直面することなく、過ごせていること

ここでは、ひとり親世帯だったときと比べて「気持ちに余裕が持てる」「心身の安定がもてる」といった記述にみられるように、再婚によって得られた生活の安定に対して、喜びや幸せを感じるという記述がみられた。また、「実子と継子が仲良くしている」「新しく生まれた子どもを継子がかわいがってくれる」といった再婚によって新たに生まれたきょうだいの関係が良好なのがうれしいという記述もあった。

その他、「家族の数が増えたこと」「絆が新たに生まれていくこと」「問題を乗り越えたとき」「家族のことを考える機会が多く、些細なことにも幸せを感じる」といった、積極的にステップファミリーとして幸せや喜びを見出そうとしている記述もみられた。

### 3. その他の記述について

#### その他の記述－19件

1. セミナーで「継子を愛せないあなたは健康です」と言われ救われた
2. 表面的にはおだやか。今の暮らしをこわすのは怖い
3. 継母が安心して相談できる機関がほしかった
4. 同じ立場の継母と出会い、お互いの話を聴き、救われた気がした
5. 相談できる専門機関がほしかった
6. 継子と親しくできる大人のパートナーであることが SF がうまくいく鍵
7. 共同親権の実現を切に願う
8. なぜ周囲の SF が大変なのかがあまり理解ができない
9. 他の継母さんとのつながりが持てて、すごく心が軽くなった
10. HP を見て自分と同じ継母の立場の人がたくさんいることで安心した
11. お互い思いやりと広い心を持って接することが SF のよい関係になる秘訣
12. 継子が大人になり、一人立ちしてくれる日を心待ちしているのが本音。
13. 継母のサークルに入って悩みを言えるようになって楽になった
14. わかって結婚したはずなのに、普通の家族がうらやましくて仕方ない。情けない

15. 継母のサークルに入ったことが心の支えの一つになっている
16. SF 歴 34 年目。継子に孫も出来て、自然体で暮らせている
17. SF のサイトがもっと早くあれば、こんなつらい結婚は絶対しなかったのに
18. 制度的な結婚はしていないが、子どもの将来にむけて今のままでいいか悩む
19. 自分自身も連れ子であったが、継母が愛情を注いでくれた。

その他の記述の中で目立ったのは、継母など、同じ体験をもつ人たちとの出会いや継母サークルへの参加によって、「救われた」「心が軽くなった」「安心した」「悩みが話せるようになり楽になった」「心の支えの一つになっている」といった記述であった。

一方で「安心して相談できる専門機関がほしかった」「ステップファミリーのサイトがもっと早くあれば、情報を得て、こんなつらい結婚はしなかった」といった、相談できる場や必要な情報が得られなかったことを残念に思っている記述もみられた。

具体的な要望としては、「共同親権の実現を切実に願う」という、現在実子と別居して新たな再婚家族を持っている人からの要望や、「現在、制度的な結婚はしていないが、子どもの将来にむけて入籍した方がいいのか悩む」といった具体的な法律上の悩みについての記述も見られた。

さらにすでにステップファミリー歴 30 年以上の方からは、「現在では継子に孫も出来て、自然体で暮らせるようになってきている」といった感想や、「自分自身が継子であったが、そのとき継母が愛情を注いで育ててくれた。それが今の SF の基盤になっている」といった記述もあった。

#### 4. 考察

自由表記全体を通して、その内容から、今回のステップファミリーの父母たちは、新しい家族の関係において、その親子関係に最も力点をおいており、その関係に悩み、ストレスを感じる一方で、親子関係が築かれていく過程に喜びやうれしさを感じているという特徴がみられた。アメリカのステップファミリーのサポート組織（SAA）では「ステップファミリーがうまく機能するには、ひとりの個人として自立すること I(individual)、結婚して夫婦となる C(couple)、子どもを持って親となる P(parent)という ICP の優先順位で、絆を築いていくことが成功につながる」（『ステップファミリー — 幸せな再婚家族になるために』 E. & J. ヴィッシャー著、春名ひろこ監修、WAVE 出版、2001 年、pp.142-144）ということが当事者の体験から述べられている。今回の自由表記をみるかぎりにおいては、回答者の意識として、新しい家族関係の中で、カップルとしての夫婦関係よりも、まずは親子関係が第一に考えられていることが伺えたが、そのことがステップファミリーの状況にどのような影響を与えているのかについて、今後より詳細な聞き取りなどの調査の必要性を感じた。

また SAA などによるアメリカの先行事例では、ステップファミリーの特徴として、別

れた元夫、元妻との関係が非常に困難さを感じる要因となっていることが明らかになっている。しかし、今回の調査では、そういった関係に難しさを感じるとしたケースは少数であった。これは、現時点では再婚後も元のパートナーと子どもの面会などの行為を通して交流を続けているケースが全体として多くないことを反映した結果と思われる。数少ない交流しているケースでは、元のパートナーとの子どものしつけに関する共通認識がもてないことや、現パートナーと元パートナーとの子どもをめぐる関係のとり方について悩みを抱えているといった記述があった。こういった困難さは、今後養育費の義務化など、離婚後の子どもをめぐる養育のあり方が変化していくことになれば、わが国でも、より大きな課題になることも考えられる。

## X. SAJ (ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン) の歩み — オンライン上に生まれた当事者によるサポート組織はどう作られてきたか —

この章では、今回の調査協力団体であり、ステップファミリー当事者たちが中心となって運営しているサポート組織である SAJ (ステップファミリー・アソシエーション・ジャパン)<sup>1</sup> について、これまでの活動の経緯と組織としての特徴についてのべていくこととしたい。

ところで、SAJ のほかにも、現在わが国には、ステップファミリーをサポートする複数の活動や組織が存在している。具体的には、SAJ より数ヶ月早く生まれた継母を中心とする当事者グループである「サークル・ベルメール」、不定期ではあるが、ステップファミリーに関する意見等を盛り込んだメールマガジンを発行している「Hop Step Family」のほか、ステップファミリーの当事者である人たちが運営しているオンライン上の個人による複数のホームページが存在している。<sup>2</sup>

オンライン上の医療・福祉分野におけるサポート活動や当事者グループは、わが国にも多数存在しており、その領域も子育て関連、障害児・者やその家族、難病患者、不登校や引きこもりの人々、シングルペアレント等、その種類も多岐にわたっている。<sup>3</sup> このような組織や活動において、ステップファミリーのサポート組織や活動は、他の多くの家族や子育てなどのサポート組織とは異なる発展の経過を辿ってきたといえる。それは現在存在しているステップファミリーのサポート活動のほとんどは、その活動の出発がオンライン上で初めて生まれているという点にある。われわれが知る限りにおいて、こうしたオンライン上の活動が生まれる以前は、現実のコミュニティにおいては、ステップファミリーを対象としたサポートグループはわが国では存在しなかったと考えられる。一方他の多くのオンライン上の活動や組織は、すでに既存のコミュニティにおいて組織化され、一定の活動を経験したのちに、オンライン上に HP を開設したり、会議室、メーリングリスト、チャットなどによるメンバーの交流を開始するなどのバーチャルコミュニティでのサポート活動を開始したものが多し。<sup>4</sup>

現実のコミュニティに既になんらかのサポート組織や活動が存在しているか否かは、そこに参加する人々にも、オンライン上のサポート活動や組織そのものにも、大きな違いをもたらすことが予測できる。例えば、少なくとも、オンライン以外のコミュニティから発生した当事者グループのほとんどは、自分と同じ当事者の存在を具体的に認識している。つまり「メンバーは、グループを形成する以前に同様の状況にある人々に出会っているのが通常である。例えば、精神障害者はグループの中で精神障害者に初めて出会うのではなく、精神病院等の治療機関ですでに出会っている。彼らは自分たちが社会の『少数者』であると気づくかもしれないが、少なくとも同様の体験をしている人が他にもいることを知っているのである。」<sup>5</sup> という状況にあり、自分と同様の体験や特徴を持つ人が現実の社会に存在していることについて体験している。しかし、まったく既存のコミュニティにその

ような活動や組織をもたない、ある特徴を抱えた人々は、オンライン上の出会いによって、初めて自分が孤立した存在ではなく、「少数者」であることに気付くのである。岡はこのようなオンライン上の新しいサポートグループの存在意義を以下のように述べている。

「こうして多くの人が自らに固有であり、他の人とわかちあえないと思い込んでいた『ニーズ』を情報技術によって公言し、そのことによって『孤立者』から『少数者』へと変わっていくかもしれない。そうすれば、結果として社会の中により多くの『少数者』が現れ、多様な生き方に対してより寛容な社会が出現するかもしれない。」<sup>6</sup>

ステップファミリーの当事者活動の経緯を振り返ると、多くの当事者たちが、まさにこの『孤立者』から出発し、同じ体験をしている人の存在をバーチャルなコミュニティに探索するプロセスからその活動を始めている。その出発点は、ほとんどのステップファミリーたちにとって、まだ数年前（おそらく 1999 年前後）のことである。少なくとも、この数年、SAJ を中心とするステップファミリーのサポート活動は、オンライン上からスタートし、かなりのスピードで活動を展開し、その活動内容を広げてきた。2002 年度からは、実際のコミュニティにおいても、SAJ は定期的なセルフヘルプグループ活動を関東と関西でスタートさせている。この活動により、バーチャルなコミュニティでの交流を経ずに、リアルなコミュニティでのサポート活動から、同じ仲間と出会い始めたステップファミリーたちも出現しつつある。

また、多くのマスコミがこの問題を取りあげ、2002 年度の厚生労働省科学研究「子ども家庭総合事業」の研究課題の一つに、「ひとり親・再婚家族に関する研究」という項目が加わったことなどをみると<sup>7</sup>、短い期間にこれらの活動は、少なからず彼らを取りまく実際の社会に変化をもたらしてきているともいえる。

現実の社会の中には存在しなかったサポートを、オンライン上からスタートして、どのようにステップファミリーたちが作りあげてきたのか。ここでは SAJ の設立までの経緯と今日までの組織の発展過程を振り返り、その特徴を考察していきたい。

## 1. 設立までの経緯

SAJ の代表である春名ひろこさんによれば、ステップファミリー関係のオンライン上での交流やサポート活動が始まったのは、1999 年頃であるという。「再婚サン、いらっしゃ〜い」という中学の教師であり再婚を経験した女性がホームページを開設したものや、ステップマザーたちがそれぞれ開設した「ステップマザー119」、「TUGUMI」、シングルマザーから子連れ再婚した女性が開設した「Step-Family」など、複数の個人運営によるステップファミリー関連のホームページがこの時期オンライン上に登場している。これらの HP を開設したステップファミリーの一人は、われわれのインタビュー<sup>8</sup>に対して、この時期以前の状況を以下のように述べている。

「私が HP を立ち上げるまで、本当になかったですね。育児のページとかはいろいろあったんですよ。でもいろいろ相談したくても、結局自分が継母だっことを言わなければ、何の話にもならないんですよ。だから実際に付き合ってる人とかもそうなんですけど、私の事情を知らなければ、結局何を話しても、通じないっていう思いを何度もしたんで、こりゃだめだと思って。当時、友達が趣味の HP を作ってて、そのページを見て同じようにその趣味を考えている人がいっぱい集まっているんですよ。『あ、これは使える』ってそのとき思ったんですよ。インターネットは、友達というか、知り合いを選べる媒体だなと。『私以外にも絶対継母っているはずだ』ってその時思って、ちょっと自分のこと書くのはいやだったんですけど、それを書けば絶対誰かは寄ってくるっていう確信はあったんで、始めようと思ったんです。」

こういった個人が運営する HP が、時をほぼ同じくして作られ、そこに次第にステップファミリー当事者たちが集まり始めるようになる。しかし当時は、ステップファミリーという言葉自体を本人たちもほとんど知らなかった状況にあり、ネット検索で「継母」と入られても無関係の情報しか得られず、こういった HP を作ってもダイレクトには当事者が集まるということではなかったようだ。

「まず閉じた形で始めました。いろんな人が来てしまったら、これは何批判されるかわかんないなっていうのがあって。最初いろんな悩みを集めている掲示板のところについて、そこに『私は継母です。お友達になりませんか』って書いたんです。そしたら 1 週間くらいの間に 2、3 通メールが来て、その人たちだけに HP のアドレスを教えました。その方法をしばらくとって、固定して 5、6 人の人が来るようになって。そのうち、いろんな継母の人が集まって、けっこう掲示板とかに書き込んでくるようになって、私ひとりじゃなくて、私のほかにも何人かも同じように考えているっていう感じになってきて、それで関係ない人がきても、私ひとりが攻撃されるんじゃないかとその時思って、YAHOO の方に自己推薦で載せてくださいってお願いしてみたんです。他の HP だとなかなか載せてもらうのが大変みたいなんですけど、あっさり載せてもらったんですよ。それでだれでも『継母』で検索したら、すぐ迷わず来てもらえるようになりました。」

このように、社会の中に潜在的に存在していたステップファミリー（特に継母を中心に）たちが、オンライン上で出会い、HP への書き込みと応答のやりとり、あるいは個人的なメールの交換が活発になっていき、そこからいくつかのグループが生まれていった。こう



いった継母間の交流は、次第にオフ会などを通してリアルな交流へと発展していった。

「メールやHPを通してお互いの状況は知ってるんで、持ってる辞書が同じなんですよ。だから一つのことを言っても、解釈の仕方が全員一緒なんで、ものすごく話しやすかったですね。「困る」って言われても、その困るの中の何が困るのがわかるんで。そのうち、メールでは必要なことだけ話すっていう感じになっていきましたね。会って話す方が楽しいってわかっちゃったから、あえてメールで話さないっていう。メールはあくまで事務関連だけ話せばいいやっていうような……。」

さらに3、4名の継母が中心となり、継母の会を開こうという機運が高まっていく。1999年の11月には、何回かのオフ会をもとに継母たちを発起人として、会員相互では住所や氏名を交流しあい、オンラインの掲示板だけでなく、会報の発行やオフ会の開催などを行うサポート組織である「ベル・メール」を立ち上げることとなった。

SAJは、上記のような形で生まれたサポート組織とは多少異なる設立経過を持つ。<sup>9</sup>SAJ代表の春名ひろこさんが、再婚したのは2000年の4月である。彼女は離婚、夫は死別により、双方が実子をそれぞれ一人ずつ連れての再婚家族であった。それより1年ほど前、結婚を前提として付き合いはじめると、彼女も特に継母として、子どもとの関係に深い悩みを抱くようになる。このことについて夫とも話し合い、児童相談所や保健所など専門機関の育児相談や、民間のカウンセリングも受けたようである。しかしこれらの専門機関では、本音を話せるだけで、継親子関係に関しての適切なアドバイスを得られることができなかったという。

再婚の約半年前の1999年10月に、NHKの番組で、アメリカのステップファミリーに関する状況が放映された。そこでアメリカでは、40年以上の歴史をもつステップファミリーのサポート組織である「SAA」があることを知ることとなる。早速彼女は、パソコンを持つ友人に頼み、「SAA」を検索し、SAAのHPのコピーを読んだ。またそこに紹介されている本もInternetを通して購入した。しかし、こういった英語のHPや本を読んでも、当時はまだ再婚前だったこともあり、ピンとはこなかったと春名さんは言う。

「ステップファミリーといっても、いろいろな形態があるのだな、と思いながらも、その頃は自分の悩みに当てはまる記述しか目に入らず、本も取り寄せて読みましたが、死別後再婚した継母に関係するところのみを読んでいました。インターネットを通じて質問やアメリカのステップマザー（継母）ともいろいろアドバイスをし合えるコーナーもあったのですが、そんな事情を英語で書けるほどの気力もなく、外側から見ているだけでした。」

また、2000年になり、自らパソコンを購入すると、先に述べたこの頃開設されたばかりの、いくつかの日本のステップファミリーたちのHPも閲覧した。それらのHP内の掲示板では、ステップファミリーに独特な悩みが語られ、その悩みについて当事者間で分かち合う内容の書き込みが多くなされているのを目にした。しかし一般的に掲示板では、一つの悩みに対して、それに共感する意見が次々に書き込まれ、時としてその内容がより強化されて、一方的な論調が強まっていく傾向もあり、違う角度からの意見を書き込むことの難しさを感じたという。またこういった当事者間の悩みを人目にさらすことは、一方で第三者を傷つけることになったり、偏見をうらづける材料を提供することに繋がるのではないかというリスクも感じたという。

2000年夏、SAAのHPで、アメリカでの継母のリアルコミュニティでのセルフヘルプグループ開催の案内に出会う。

「そのホームページの中に、9月15～17日、コロラド州ロッキーにてステップマザーのセミナーがあるという情報のページがありました。クリックすると、ロッキー山脈にあるYMCAの施設の写真が大きく表示されるのです。インターネット初体験の私にとっては、ドラえものの『どこでもドア』のように、その空間にスーッとテレポートしてしまうくらい臨場感があり、今更ながらにインターネットという文明の利器にカルチャーショックを覚えました。」

彼女は、単身アメリカに渡り、このステップマザーのリトリートプログラムに参加する。このアメリカのセルフヘルプグループとの出会いが、SAJ創設への直接的な契機となる。アメリカでの当事者のファシリテーターが運営するセルフヘルプグループでの体験が、春名さんにとっては、それまでとは異なる「先に見えるサポート」となったといえる。アメリカではじめて、彼女はステップファミリー当事者として、これからの自分の進む方向をしめしてくれる「ロールモデル」の存在を見出し、必要な支援に出会うことができたのではないだろうか。

ところで、これまで諸外国の新しいセルフヘルプグループ等の情報が当事者に紹介されるには、そこにその必要性に気付く専門家の介在が不可欠であった。しかし、ITの発展は、問題を抱えた当事者が、ダイレクトに必要な最新の情報を得ることを可能にし、自分たちに必要なサポートが他の国には存在していることに気付き、それに接近することができる道を開いたといえよう。

帰国すると、彼女は実際に会ったアメリカの継母たちの紹介をとおして、SAAの創設者のヴィッシャー夫妻や現在のプレジデントとメールでの交流を開始する。40年前にSAAを創設したヴィッシャー夫妻からは「自分たちが70年代にアメリカでSAAを始めたときも、何もサポートは他に存在しなかった。我が家のリビングルームでのミーティングから

始め、会を立ち上げるのに 20 年かけた。死別、生別、母子世帯、父子世帯、子連れ同士の再婚か、初婚、再婚か、子どもの性別や年齢の差など、ステップファミリーは多様である。彼らにかたよらない情報を提供することを目的とした、多様なグループの総合体が SAA である。」という言葉をもらい、心に響いたという。一方で、現在の代表であるマージョリー氏からは、会をたちあげる場合の具体的できめ細かいアドバイスももらった。

さらに彼女は、SAA を目標にステップファミリーのサポート組織の 2001 年からの創設をめざし、様々な設立のための活動を具体的に始めた。まずは SAA からのアドバイスのひとつであった「ステップファミリーに関する調査や研究のための協力者として、大学などの研究者とむすびつく必要性」を模索することとなる。これもインターネット検索をたよりに、ステップファミリーに関心を持ってもらえそうな、家族に関する研究をしている心理、社会学者を中心に、会の創設に協力を依頼する電子メールを送付した。その呼びかけに最初に答えたのが、われわれの研究プロジェクトのメンバーである明治学院大学の野沢教授であった。

また一緒に組織を立ち上げる当事者の仲間として、ネットを通して知り合ったベル・メールの創設スタッフである継母の人たちとも実際に 11 月に会い、設立準備のための委員会のメンバーとして協力しあうこととなった。そして 2000 年の 12 月 30 日に 6 名の当事者により、SAJ の準備委員会を設立し、「Stepfamily Web」という名のサイトを立ち上げることにこぎつけた。このサイトは、準備委員のステップファミリー当事者の中に、ウェブデザイナーを仕事としている人たちがおり、彼女たちの技術が大いに生かされている。サイトには SAA の設立者であるヴィッシャー夫妻からのメッセージを掲載し、さらに SAA の HP ともリンクをはり、設立にいたる春名さん自身の経過を、詳しく記載した。また同時に、ステップファミリーのための BBS (掲示板) を設置した。この BBS は、当初から公開された形で始められ、多様なステップファミリーメンバーの参加 (特に男性) を視野に入れ、「継父のいる家族」「継母のいる家族」などのコーナーに分けて、それぞれの立場の人たちが意見や情報を見やすく、書き込みしやすい工夫をしている。それぞれのコーナーに「喜びを感じること・うれしかったこと」という項目を設けて、悩みやストレスに関する書き込みのみでなく、ステップファミリーとしてのポジティブな体験についても書き込めるようにしたことなど、この頃から、SAJ の活動の方向性が、鮮明に打ち出されているようにみえる。

さらに Web 上でのサポート活動の開始と同時並行的に、ヴィッシャー夫妻の著書である *How to win as stepfamily* (邦題『ステップファミリー ― 幸せな再婚家族になるために』<sup>10)</sup>を翻訳し出版する計画を立て、翻訳を仲間たちと始めるかたわら、出版社探しを始めた。この本の出版社が決定し、出版の交渉のために上京した時期に、われわれ研究プロジェクトとの最初の会合を持つに至ったのが、2000 年 2 月のことであった。ここでは、2001 年中にステップファミリーを対象とした全国規模のアンケート調査を協力体制のもとに実施することが確認された。また研究メンバーの茨木、野沢がおもに、今後の SAJ の組織運営

のアドバイザーとして協力することもあわせて確認された。

HP を立ち上げて、4 月になると YAHOO の推薦 HP として Stepfamily Web が掲載されたことや、共同通信の配信記事によって地方紙に断続的に記事が掲載され、そこに HP の URL が記載されたことなどにより、アクセス件数は 7 月初旬には 1 万件をこえた。また HP を立ち上げて数ヶ月の間に、その内容に賛同したステップファミリー当事者の数名が、春名さんに電子メールでアクセスしてきた。これらの人々の何名かは、夫婦単位で連絡をしてきているが、現在 SAJ の運営スタッフの中心となっている。彼らは全国各地に離れて居住しており、(外国に居住している人も含めて) 運営スタッフがほぼ全員が顔を合わせることはできたのは、SAJ 設立後の 2001 年 7 月に愛知で行われた家族の合宿旅行であり、それまでのほとんどのスタッフ間の連絡は、電話、メール、スタッフ専用の掲示板、チャットなどを通してであり、運営スタッフ間の事務的な連絡などのコミュニケーションは現在もその大部分がオンライン上で行われている。

## 2. 設立から今日までのあゆみ

5 月には、7 月の『ステップファミリー ― 幸せな再婚家族になるために』が出版にあわせて、アンケート調査依頼の差込ハガキの内容や、SAJ の今後の活動計画についての打ち合わせのために、再び上京した春名さんと明学スタッフ間で研究会がもたれた。その際、春名さんから、「社会にステップファミリーの認知を広げていくために、ステップファミリー当事者のネットワークをつくるとともに、それを支援していく専門家のネットワークも形成していくこと」が、SAJ のミッションとして示された。この間、大阪ボランティア協会に、SAJ の組織運営のあり方についてアドバイスを求めるなどして、組織としての規約やメンバー構成、中長期計画などのいくつかの点について、主にネット上において運営スタッフ間で話し合い、明確化していった。

2001 年度の活動計画としては、①ヴィッシャー夫妻の本の翻訳とその出版、②出版記念としてヴィッシャー夫妻の来日記念講演と SAJ メンバーとの交流、③SAJ の正式発足と会員の募集、④ニュースレターの発行、⑤BBS を中心とした Web 上の交流、⑥地域別のセルフヘルプグループ (LEAVES) 活動のための準備、⑥ステップファミリー調査への協力、⑦広報活動の展開、が掲げられた。

11 月にヴィッシャー夫妻の来日講演を企画するにあたって、資金を獲得する必要性が生じた。また実際に、SAJ を組織化し、具体的な企画をすすめるために、その運営についての最低限の資金も必要となってきた。会の活動が活発になり、具体的な打ちあわせが必要となってきたこの時期は、電話や郵送料、交通費、その他様々な資金が必要となり、個人の負担だけにたよることには限界がみえてきた。そこで、資金獲得のための財団等への助成金申請活動が、この時期からスタートする。しかし実際には、初年度は申請した助成の大部分は、会としての活動実績不足などの理由で採用されず、助成金を獲得することができなかった。唯一、経済産業省が行っている「介護子育て分野における革新的なサービス

提供に資する「IT活用事業」<sup>11</sup>のモデル事業の一つに選ばれ、初年度の活動資金として100万円を取得することができた。

6月25日には、SAJを組織として正式に立ち上げ、会員の募集を開始した。代表には春名さんが就任し、組織としては運営委員会方式をとり、運営委員には、9名の当事者会員（うち3組が夫婦での参加）、2名のサポート会員（1名は編集者、1名は大学教員）で構成された。会員は、正会員（ステップファミリー当事者）、サポート会員（関連する専門家）賛助会員に分けて、会員募集を行った。ただ正会員には、現在は再婚していないが、将来的にステップファミリーになる可能性のある人も含まれるということになっている。

- ① 正会員・・・・・・・・・・本会の目的に賛同して入会した当事者、及び将来 当  
事者になる可能性のある者
- ② サポート会員・・・・・・・・・・本会の主旨に賛同する専門家
- ③ 賛助会員・・・・・・・・・・会の主旨に賛同する①②以外の個人

11月の講演にむけて、東京、大阪での会場の確保や参加者募集のためのチラシの作成、チラシの配布などの作業が運営委員を中心に行われた。講演にむけての広報活動等の準備のために、特に関東、関西の会員は、ネット上だけでなく直接顔を合わせて打ち合わせを行う機会を持つようになっていった。

9月には、ヴィッシャー夫妻の講演にむけて申請していた助成金申請が不採用との決定を受ける。さらに10月にはエミリー・ヴィッシャーさんが急逝するという不幸な出来事が重なった。しかし急遽、現SAA代表であるマージョリー・エンゲルさんが代わって来日していただけることになり、11月3・4日（東京）にて、当事者、専門家向け講演会を2回、11日には尼崎市にて当事者向け講演会が実施された。また来日中には、運営委員とエンゲルさんの交流会も行われ、SAAのこれまでの活動の経過や具体的なプログラムについて、エンゲルさんからの豊富な資料による説明がなされた。当初、講演会はそれぞれ100名以上の参加者を想定していたが、ネットを通じての宣伝、マスコミ等による紹介だけでは、あまり参加者は増えなかった。しかし、この講演参加者や会員の募集にむけて、それぞれのメンバーが講演のチラシやSAJのパンフレットを地域の女性センターや子育て支援センター等に持参し、置かせてもらうなどの、現実のコミュニティでの地道な草の根活動がこの計画を契機に展開された。児童や家庭問題に関する専門家については、この問題に関する関心は思った以上に薄く、特に専門家向け講演では、児童相談所や子育て支援センター等にもチラシを配布したがほとんど反応はなく、むしろ家族に関する法律の専門家や、家族社会学の研究者などの参加が目立った。

ところで、エンゲルさんの来日の大きな意義は、ステップファミリー当事者にとって、組織の将来像として、SAAの組織や活動内容を具体的に知ることができたことと、ステップファミリーの当事者であり、かつ専門家として活躍するエンゲルさんにロールモデルを

見出すことが出来たというところにあるのではないだろうか。彼女は当事者として力をつけていくこと、当事者がステップファミリーの認知を社会に対して訴えていくことの重要性を、スタッフミーティングでは力を入れて話されていた。

その後、SAJは、次年度からの実際のコミュニティでの対面型セルフヘルプグループ活動である LEAVES の開催にむけて、ファシリテーターとなる当事者の養成、プログラムの開発、資金獲得、参加者への広報活動等に次第に力が注がれていく。この活動のモデルとして、SAA のセルフヘルプ活動のプログラムである「Smart steps」が翻訳され、日本の家族の実情を加味しながら、用いられている。

2002 年 1 月に関東、関西で、第一回目の対面グループ活動である LEAVES が開催された。それぞれ参加者は 13 名、16 名で、この半分以上が夫婦そろっての参加であった。第一回目の参加者は、Web 上での BBS などのコミュニケーション（BBS に書き込みをすることはなかったにしろ、見ることはしてきた）の経験者であった。第 2 回目は、4 月にそれぞれ関東、関西で行われた。参加者は、16 名、9 名で、それぞれ半数近くは新たに今回参加した人たちであった。特に関東では、Web 上の SAJ の活動を知らずに、新聞記事などの情報から電話で申し込みをしてきた人も含まれていた。このような人たちは、対面型グループの中で、各自が匿名として、ハンドル名を用い交流していたことに対し、多少の違和感を持ったようである。BBS での交流と、対面型の交流がどのように今後進んでいくのか、そこに参加する人たちは重なり合うのか、それともいずれかの交流にグループが分かれていくのか、これについては、これからの活動の経緯を見守る必要があるだろう。

またファシリテーターを体験した当事者からは、いくつかの問題提起もなされた。例えばあるスタッフは、

「経験的にいうと、BBS では、ある人の書き込みについて、一定のアドバイスを書き込みした方が、相手にとって非常に有効なサポートになる場合が多い。例えば、『私の場合は、こうだった、とか、こういうふうにした』と書き込むことがすごく大事だと思ってやってきた。でも、対面型のサポートでは、まずは共感を示すことが大事で、ファシリテーターはあまりアドバイスや意見を言わないことが原則といわれ、多少混乱した。」

と述べている。BBS での仲間同士での相談活動の方法と、対面型セルフヘルプ活動の共通点と相違点はどこにあるのか。BBS でのサポート活動の担い手と対面型グループの担い手が、重なるのか、異なるのか。またそのサポートの効果は同じなのか、異なるものになるのか。これもまた今後の大変興味深い今後の研究課題であろう。LEAVES の活動は、2002 年度は関東、関西でそれぞれ 4 回の開催が予定され、年度末にはそれぞれの活動の交流会などが計画されている。

資金面では、2002 年度は対面型サポート活動計画を中心に助成申請した結果、いくつか

の助成金を獲得することができた。しかし会員数については、この1年間それほど飛躍的には伸びていない。2002年4月現在、74名（当事者会員である正会員はうち54名）となっている。この54名の中には、夫婦そろっての会員もかなり含まれることから、総じてステップファミリー当事者の積極的な組織への参加は広がっていないともいえる。これはオンライン上の活動では、特に会員にならなくても、BBSへの参加は可能であるし、具体的に会員になるメリットというものを当事者があまり感じていないことによるのかもしれない。また積極的にステップファミリーの会員となり、具体的にコミュニティでの活動に参加しようと思う当事者と、悩みをわかちあうためにWeb上のBBSにやってくる当事者とが必ずしも一致していないということも考えられる。一方で圧倒的多数の潜在的に存在しているステップファミリーたちに、未だ組織の存在が知られていないことの方が、この会員数の停滞については、大きな要因と考えるほうが自然なのかもしれない。いずれにしても、SAJは、組織として誕生して1年足らずであり、その活動は始まったばかりなのである。

### **3. オンライン・サポートグループとしての特徴**

以上、SAJの発展過程を述べてきたが、最後にこの発展過程からみえてきた、オンラインから始まったサポートグループの特徴をあげておきたい。

#### **①同じ特徴をもった人を探索するところから活動がスタートすること**

ある問題や特徴を持った人が、そのことをわかちあいたいと思う同じ特徴を抱えた人を一般の社会では見つけにくい状況のとき、オンライン上のコミュニティは有効に機能する。特にステップファミリーのように、本人たちから名乗ることはほとんどなく、その特徴は外部には見えにくい、制度やサービスにも繋がらないし、特定の場所に集うこともないマイノリティにとっては、自分の特徴を名乗り、「孤立者から少数者になる」手段として、オンラインコミュニティの存在は非常に大きい。

#### **②結びつく当事者たちの現実のコミュニティでの距離が比較的離れていること**

バーチャルな世界の特徴は、現実社会の距離と時間からの離脱が可能な点にある。<sup>12</sup>それはネットによって結びつく当事者たちのオンライン上での距離と、実際のコミュニティでの距離とは異なることを意味する。もちろん会おうとすれば会える距離に居住している場合もあるが、概して国内の各地に散らばって居住しており、ときには海外居住者である場合もある。SAJの場合も、運営委員に海外居住者がいるほか、BBSの書き込みをする人たちの中にも複数の海外居住のステップファミリーがいる。オンライン上でのコミュニケーションにこのことはほとんど影響しないが、そこから現実の社会でのコミュニケーションを始めようとするとき、それは活動の壁となることもある。

#### **③身近な地域からスタートし、全国的組織になっていくという従来の当事者活動とは違う**

### 発展経過を辿ること（はじめから否応なく全国組織としてスタートする）

②のような過程でメンバーが集まってくるため、組織を形成するときには、はじめから全国組織としてスタートすることとなる。従来のセルフヘルプ活動は、草の根的に身近な地域からスタートし、次第に全国組織に発展していくことが多い。SAJの場合、まず全国規模でオンライン上での交流が始まり、そこから組織が立ち上がった。次に全国規模のオンラインサポートから、地域ごとに分けてリアルなコミュニティでのサポートグループ作りを意図的に始めようとしている。このようにみていくと、オンラインサポートグループは、従来の「Grass-roots（草の根）」の意味とは異なる発展の方向性をもつように思われる。

### ④ BBS等オンライン上のコミュニケーションでは、匿名での自由なコミュニケーションができるが、一方ではじめからそれは不特定多数の人たちに見られていること

先に述べたように、オンライン上では、距離や時間からの離脱と同様、有名、具体からの離脱も可能となる。オンライン上では、究極の匿名性が保たれ、本人が明かさなければ、生別、年齢、職業のほか、人種、容姿や声など全ての個人的特徴は隠すことが可能である。それがその人の外見や性別、年代にとらわれずに、自由に相手と交流できる効果を生む。しかし一方で、当事者になりすまして、そのコミュニティに参加することも可能にする。また、BBSを公開している以上、そこでのやりとりは、多くの当事者以外の人たち（少なくともそこにアクセスする以上、その内容に一定の関心を示している人たちではあるが）の目にさらされていることにもなる。悩みや苦しみを当事者間でわかちあい、共有する場を異なる誰かに見られていること、また異なる誰かが参加しているかもしれないことは、どのような影響を及ぼすのか。例えば、継子との関係に悩む継親がBBSにありのままにその気持ちを書き込むことが、その問題についての偏見を助長することに繋がる危険性もある。またその書き込みを読んだ第三者の継子を傷つけることになる可能性もある。対面型のグループと異なり、その交流の場は必ずしも安全で守られた場とはいきれない。そのため、その組織のメンバーだけに閉じた形でBBSを運営している場合もあるが、一方で、それは新たな当事者の参加を妨げることになってしまう問題も孕んでいる。

### ⑤オンライン上のコミュニケーションのみであるかぎり、事務所や場、資金の必要性や負担は少ない。

当事者が自分たちの問題に気付き、同様の問題を持つ人をオンライン上で探索し、そこでの交流をするために、そこにHPを開設し交流することで、問題を分かち合ったり、情報交換をするという範囲においては、そこでは交流する場を設定する必要性もないし、組織の代表を決めたり、事務所を設置したりする必要はない。またそのための資金も必要はなく、最低限のHPを管理するための通信費と労力が必要なだけである。（といっても、この管理にはかなりの時間と労力が必要であるが）しかし、そこから現実に出会うことを開始し、現実の場でのセルフヘルプグループ活動を展開したいということになれば、集う場



所の確保、交通費、それを企画し実行していくスタッフなど、組織としての具体的な人的、金銭的資源が必要となってくる。バーチャルからリアルコミュニティへ活動を展開していくとき、この資源確保という部分が大きな壁となる。

#### ⑥組織としての発展の速度が、通常のコミュニティで発生した組織より非常に早い。

空間、時間からの離脱が可能なオンライン上では、そのコミュニケーションの速度は通常より量質の両面において相当に早い。そこからスタートしたサポート組織の発展過程は、あたかも「早送り映像」のようなスピードで進化しているように見える。たとえば同じステップファミリー組織として発展してきた SAA では、全米的な組織として正式に機能するまでにおよそ 20 年かかっているという。それに比較すると、SAJ のこの 1 年数ヶ月の組織化の早さには驚くべきものがある。例えば対面型のセルフヘルプ活動を全国に展開していくことについても、参加者の募集から会場の確保、グループ活動のプログラム、ファシリテーター間の情報交換など、その全てのコミュニケーションにインターネットという道具が駆使され、数ヶ月の準備期間を経て、少なくとも関東、関西エリアで同時にスタートさせている。もし現在、オンライン上で行っているこのようなスタッフ間の組織運営の活動をこれを用いないで行ったとしたら、時間とそこにかかる人的、金銭的負担は数倍にもなってしまふことだろうし、SAJ の活動のほとんどが成立しなくなるだろう。

一方でこの発展の速さは、組織のこれからにどのような影響を及ぼすのだろうか。少数の核となるメンバーによって、全体の会員数がさほど増えないなかで、SAJ は大規模に活動を展開してきたが、組織としてそれを支える当事者会員の総数をどのように増やしていくべきなのか。SAJ のこれからの課題の一つとなるであろう。

#### 4. おわりに

以上のように、SAJ の発展過程を事例的に整理、分析しながら、オンライン上に発生したサポート組織の特徴について述べてきた。しかしこれはあくまでステップファミリーという当事者たちのオンライン上のコミュニケーションとそれによって発展してきた SAJ という一つのサポート組織の経過とその特徴である。はたしてこれがオンライン上に発生した全てのサポート組織に共通した特徴であるかどうかについては他のグループの実態などを踏まえて、慎重に検討を重ねていく必要があるだろう。

その他にもオンラインサポートグループの研究課題は複数ある。一つのグループにおける組織化の過程から導き出されるオンライングループの運営のあり方は、他のグループへの知見となりうるのだろうか。さらにオンライン上のグループ活動は、これまでの対面型セルフヘルプ活動と同様に、個々のメンバーの Well-being やエンパワーメントに有効に機能するのか。それは当事者活動として、具体的な社会活動や変革に結びついていくのか。

SAJ の活動が開始されて、まだ数ヶ月である。他のインターネット上のオンラインサポートについても、インターネットの普及そのものがこの数年のことであり、いずれも設立

してまだ日が浅い。これらの活動の経過を見守りながら、以上のようないくつかのテーマについて、より詳細な研究を続けていくこと、それが今後の課題である。

---

#### 【注】

- <sup>1</sup> SAJについては Stepfamily Web (<http://www.saj-stepfamily.org/>) を参照のこと。
- <sup>2</sup> それぞれの HP は以下の URL。「サークル・ベルメール」(<http://www.belle-meres.net/>) 「Hop! Step Family」(<http://members.jcom.home.ne.jp/someko/>)。YAHOO の推薦サイト「ステップファミリー」には、その他いくつかの個人による HP が紹介されている。
- <sup>3</sup> アメリカでは electronic support group (インターネット自助グループ) は、少なくとも 2,000 件以上の関連サイトがあるという報告もある。(阪元章編『インターネットの心理学』p71) 日本での全体的なサイト数は不明ではあるが、この数年インターネットの普及とともに、様々は当事者組織、またそのサポート組織が HP を開設するなどのオンライン上の活動は急激に増加している。
- <sup>4</sup> 例えば、日本初の患者家族会の HP を立ち上げた「日本ダウン症ネットワーク (JDSN)」(<http://jdsn.gr.jp/>) は、それまでの各地域での約 80 団体もの親の会の中のネットワークを結び、新たな交流を求めて作られたものであり、リアルなコミュニケーションの体験後に生まれた。
- <sup>5</sup> 岡知史「21 世紀のセルフヘルプグループとその調査方法」右田紀久恵他編『社会福祉援助と連携』中央法規出版、2000 年、p103
- <sup>6</sup> 〃 p.10
- <sup>7</sup> 厚生労働省 HP「平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金公募要綱」(<http://www.mhlw.go.jp/wp/kenkyu/koubo02/kh05.html>) 参照。
- <sup>8</sup> われわれの研究プロジェクトでは、2001 年 5 月～7 月、アンケート調査に先立ち、数名のステップファミリーの人たちに対して、個別のヒアリング調査を実施した。
- <sup>9</sup> 以下の SAJ 設立の経過については、注 1 のサイトに春名さん自身が書いた「ここにいたるまで」の文章と、数回にわたってのインタビューに基づいている。
- <sup>10</sup> Visher, E. B & Visher, J. S., (1991), *How to Win as a Stepfamily*. Second Edition, Brunner/Mazel.(春名ひろこ監修・高橋朋子訳 (2001)『ステップファミリー：幸せな再婚家族になるために』WAVE 出版)。
- <sup>11</sup> この事業については、「わいわい子育てネット」(<http://www.waiwai-wand.com/>) を参照のこと。
- <sup>12</sup> Phillips, W. (1996). A Comparison of Online, E-mail, and In-Person Self-Help Groups Using Adult Children of Alcoholics as a Model. In *The Psychology of Cyberspace*, (<http://www.rider.edu/users/suler/psyber/acoa.html>) (article orig. pub. 1996)

#### 【参考文献】

- 内藤まゆみ (2000)「インターネットにおける自助グループ」阪元章編『インターネットの心理学』学文社,pp.72-82
- 岡知史 (2000)「21 世紀のセルフヘルプグループとその調査方法」右田紀久恵、小寺全世、白澤政和編『社会福祉援助と連携』中央法規、pp.91-107
- 岡知史 (1998)「複雑系としてのセルフヘルプ・グループー自律分散システムという新しいモデルの可能性ー」久保紘章、石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規、pp.57-71
- 小坂守孝 (1998)「自分空間としてのネットワークー相談する・心の問題へのアプローチ」川浦康至編集『インターネット社会』現代のエスプリNo.370、至文社
- しんぐるまざあず・ふぉーらむ編著 (2001)『シングルマザーに乾杯!』現代書館
- 金子郁容 (1999)『コミュニティ・ソリューション・ボランティアな問題解決にむけて』

---

岩波書店

百溪英一 (1995) 「障害児者関連 www Home page の役割と現状」 日本ダウン症ネットワークホームページ (<http://infofarm.cc.affrc.go.jp/~momotani/tron.html>)

Phillips, W. (1996). A Comparison of Online, E-mail, and In-Person Self-Help Groups Using Adult Children of Alcoholics as a Model. In *The Psychology of Cyberspace*, (<http://www.rider.edu/users/suler/psyber/acoa.html>) (article orig. pub. 1996)

## あ と が き

I 章でも触れたが、本書は、明治学院大学・社会学部附属研究所の特別推進プロジェクト「現代社会における技術と人間」(2000-2002 年度の 3 年計画)の下部組織「ソーシャル・サポートにおける CMC (computer-mediated communication)」研究グループの一研究課題「ステップファミリー調査」の中間成果報告である。なお、この特別推進プロジェクトは、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金(2001-2002 年度)による研究助成を受けている(研究課題「現代社会における先端技術の「先端性」の社会的意味 — 受容と葛藤」、研究代表者:野沢慎司)。私たちは、この 2 つの機関からの支援に感謝している。

この報告書「ステップファミリーにおけるソーシャル・サポートの研究」は、メインとなる「ステップファミリーに関するアンケート調査」が 2002 年 5 月末に終了を迎える前に、2001 年度末時点(正確には 2002 年 2 月 22 日時点まで)の回収データを入力し、中間的に分析した成果をまとめたものである。この調査票調査は、通常の調査と異なり、7 ヶ月間以上の長期にわたる調査票回収期間を設定していることもあって、協力いただいた当事者組織などへの中間報告が必要だろうとの判断から、このような報告書を作成することにした。暫定的な報告とは言え、分析と執筆に予想以上の時間がかかり、当初の予定よりも発行が遅れてしまったことをお詫びしたい。

5 月末に調査が終了した後には、回収データ全体についての再分析を行い、年度末にはバージョンアップした報告書を作成する予定である。その意味でも、この中間報告に提示された分析結果は暫定的・仮説的なものと理解していただきたい(この調査が抱えている方法上の限界については II 章を参照)。今後は、今回の調査回答者のうちでさらにご協力を了承していただいた方々への事後的なインタビュー調査を含む多様な調査を実施して、より深い研究を展開していきたいと考えている。この研究プロジェクトはまだまだ発展途上の段階にあり、眼前に広がるフロンティアはなお広大である。

この調査は、多くの方々のご協力によって初めて実施が可能となった。この場を借りてお礼を述べさせていただきたい。調査の様々な場面で、SAJ (ステップファミリー・アソシエーション・オブ・ジャパン) に多大な協力をいただいた。とくに代表の春名ひろこさんをはじめとするスタッフ(運営委員)の方々にお世話になった。また、予備調査インタビューなどご協力いただいた「サークル・ベルメール」のメンバーの方々にも感謝したい。2001 年 11 月に来日した SAA (Stepfamily Association of America) 会長のマージョリー・エンゲルさん (Margorie Engel, Ph.D.) には、米国でのステップファミリー研究の状況や成果についてご教示いただき、研究展望に大きな指針を得た。明治学院大学社会学部附属研究所の研究員・森田聡之さんと事務スタッフ・小林千津恵さんには調査票の送付・回収・管理など、煩雑な調査の実務面を担当していただき大変お世話になった。菊地真理さん、稲葉知子さん、斉藤亮太郎さんには、調査データの収集・整理・分析の様々な支援作業で活躍していただいた。私たちの研究プロジェクトのホームベースである明治学院大学・社

会学部附属研究所の前所長・渡辺雅子教授と現所長・中野敏子教授には、一貫してこの研究プロジェクトへの暖かいサポートをいただいている。皆さんに感謝したい。

最後になったが、予備調査と本調査において多岐にわたる質問に快くご回答いただいた数多くの調査回答者の方々に心よりお礼申し上げます。プライベートな内容に踏み込む、不躰な数多くの質問に辛抱強く答えていただければ、このような研究は成り立たなかった。ささやかな研究成果にすぎないが、ステップファミリー当事者の方々にとって、そして当事者以外の社会にとって、これまで社会的に見えにくかった「ステップファミリーという経験」を知るための第一歩として少しでも役立つものであることを祈りたい。

2002年6月  
野沢 慎司